

中世後期日本における貨幣使用に関する研究

稲吉 昭彦

目次

序章	三
----	---

第一章 研究史の整理と研究視角	八
-----------------	---

第一節 研究史の整理と問題の所在	八
------------------	---

第二節 研究視角	一五
----------	----

1 中世貨幣の性格	一六
-----------	----

2 中世後期日本の貨幣使用	二〇
---------------	----

3 金・銀の浸透	二一
----------	----

第二章 「撰銭」の仕組み―「悪銭替」と「悪銭売買」―	二七
----------------------------	----

はじめに	二七
------	----

第一節 撰銭という行為	二八
-------------	----

第二節 悪銭受領の対処	三三
-------------	----

1 「悪銭替」の仕組み	三三
-------------	----

2 「悪銭売買」の仕組み	三八
--------------	----

おわりに	四八
------	----

第三章 錢貨に封を付けること	五四
----------------	----

はじめに	五四
------	----

第一節 錢貨に封を付けること	五五
----------------	----

第二節 錢貨に封を付けることと悪錢問題	五九
---------------------	----

おわりに	六八
------	----

第四章 緡錢慣行	七五
----------	----

はじめに	七五
------	----

第一節 緡錢の比率	七六
-----------	----

第二節 緡錢の値	八一
----------	----

おわりに	九九
------	----

第五章 計算方法	一〇二
----------	-----

はじめに	一〇二
------	-----

第一節 位取り方式	一〇三
-----------	-----

第二節 比例定数方式	一〇九
おわりに	一二三
第六章 銀の浸透と貨幣使用	一二五
はじめに	一二五
第一節 諸職補任料の支払い状況	一二七
第二節 貨幣使用と相場	一三四
おわりに	一四二
付論 私札と木綿売買	一四九
はじめに	一四九
第一節 私札の構造	一四九
第二節 私札の使用と木綿売買	一五三
終章 本研究の総括	一五五
初出一覧	一六一

中世後期日本における貨幣使用に関する研究

稲吉 昭彦

序章

本研究は、中世後期日本における貨幣使用の特質を、錢そのものに視点を据えて解明しようとするものである。具体的な分析対象は、撰錢行為、錢貨に封を付けること、緡錢慣行、短陌の計算方法、錢と銀との関係である。

卑金属の銅を素材とした円形方孔の錢は、前近代日本において貨幣として使用された。それは、和銅元年（七〇八）に発行された「和同開珎」から始まる「皇朝十二錢」の時代、一二世紀後半から一七世紀にかけての「中国銅錢」の時代、寛永一三年（一六三六）から発行された「寛永通宝」の時代の三段階に分けることができ、時代区分上、「皇朝十二錢」の時代が古代、「中国銅錢」の時代が中世、「寛永通宝」の時代が近世にあたると理解される。⁽¹⁾ むろん、「金本位制」が採用された近代日本の貨幣とは、貨幣価値の根拠の違いや貨幣が果たす諸機能などで大きく異なることが想定されるが、前近代日本を通じて貨幣であった錢においても、貨幣使用のメカニズムや他の諸貨幣との関係を探ることによって、それぞれの時代の特質を垣間見ることができよう。

また錢は、中国や日本、朝鮮やヴェトナムなどの東アジア全域で、貨幣として使用された。それはどの国で生産されたものでも各国で共有されたが、⁽²⁾ それぞれの国における社会状況や経済構造に応じて、貨幣の使用方法や現象が異なった。その差が各国の特質を表していると考えられる。

つまり錢は、各々の時代と空間の特質をとらえることができるものであり、それを比較することによって、貨幣経済の展開を解明できるのではないか。本研究はその起点にあたる。

さて本研究で取り上げる中世後期日本は、一二世紀後半ごろから続いていた中国銅錢を中心とした錢の体系に混乱が生まれ、金・銀・錢からなる近世の三貨体制へ連なる前段階として位置づけられる時期である。撰錢をはじめとした行為が社会に表れるようになり、大内氏や室町幕府といった権力が撰錢令を發布する。また、一六世

紀後半から金・銀が貨幣として機能を果たす状況になり、これが近世三貨体制の成立の前提となる。

これまで中世後期日本の貨幣史研究は、主に銭体系の混乱の象徴たる撰銭行為と撰銭令の問題について論じられてきた。近年の研究では、分析対象を「地域」に焦点をあてて、貨幣の地域性を論じた研究や日本の貨幣を東アジア世界の動向に位置づけた研究、出土銭貨研究など論点も多岐にわたる。さらに、研究史上の問題関心は銭だけでなく、金や銀にも向けられるようになり、特に銀の浸透に関する研究は、多くの研究成果が蓄積されるようになった。

従来の研究は、商品流通の構造や権力側の対応に注目し、当該期を商品経済の発展（＝貨幣流通の増加）による貨幣不足と悪銭増加・金・銀の貨幣使用、そうした貨幣状況に対応する権力と理解している。しかし第一章において詳述するように、従来の研究は、貨幣を権力と不可分の関係とし、貨幣使用を商品経済と等置とする貨幣観に基づいて、当該期における貨幣と権力、貨幣と商品流通を分別せず、貨幣の属性を等閑視してきた点が問題である。

本研究では、こうした問題に関して、貨幣そのものに注目し、貨幣がいかに使われていたのかを究明するものである。まず第一の課題は中世後期日本における銭貨使用の仕組みの解明である。具体的には、中世後期日本における銭貨使用を、撰銭、銭貨に封を付ける、緡銭慣行という行為そのものに焦点をあてて考察していく。撰銭、銭貨に封を付ける、緡銭慣行がどのような行為であったのか、これを明らかにすることは中世後期日本の貨幣を解明するうえで必要であろう。また本研究では、貨幣そのものに焦点をあてて議論を進めており、権力のや商品流通の問題については捨象している。これは銭貨使用に関わる撰銭の問題と撰銭と権力が定めた撰銭令の問題とは別次元であつかう必要があるという考えに基づいており、権力や商品流通の問題が不要という意味ではない。貨幣使用の問題と権力・商品流通の問題を明確に区別し、論理の次元を揃えることで、中世貨幣の特質を明確にできると考えるからである。さらに、銭貨使用の仕組みを検討するにあたっては、実物資料から得られる情

報を十分に活かしていきたい。この方法は、中世後期日本における錢貨使用の仕組みを明らかにするうえでも有効と考える。

第二の課題は、金・銀の浸透にともなう、貨幣使用の実態解明である。具体的には、銀の浸透と貨幣使用の実態を考察していく。一般に、中世後期において錢貨流通秩序が崩壊し、錢が主要な貨幣の地位を失い、東日本の金遣い、西日本の銀遣いと称されるように地域性を帯びながらも、近世において金・銀が主要な貨幣の位置を獲得し、錢が金・銀の補助貨幣となった、と理解される。しかし第一章で詳述するように、近世社会の現実レベルでは錢が単なる金・銀の補助貨幣でなかった。これは金・銀の浸透過程を検討するだけでは、当該期の貨幣を理解するのにあまり有効でないことを示す。たしかに、一六世紀後半に金・銀が社会に浸透したことは事実である。しかし、それが錢使用から金・銀使用へ移行したことを意味しているのではない。重要なことは、金・銀の浸透にともない、貨幣使用がいかに変容したかという点にある。金・銀・錢の貨幣使用を実現する仕組みがいかなるものだろうか。金・銀・錢間の相場の問題を着目し、短陌の存在を前提とした社会であることを留意しながら考察する必要がある。

右の課題を究明することは、貨幣と権力、貨幣と商品流通の歴史的位置が明確に区別されることとなり、中世日本貨幣の特質の解明に必要な要素となるだろう。

なお、本研究でいう貨幣とは、支払手段、交換手段（流通手段）、価値保存手段、価格表示手段、といった諸機能を有するものを指している。貨幣の諸機能を全て備える必要はなく、諸機能を部分的に果たしていれば貨幣とみなしている。たとえば米は、経年劣化するため価値保存手段としての機能を果たさないが、支払手段や交換手段として機能していれば、貨幣とみなす。加えて、諸機能を利用するさい、普遍性をもって使用できることである。たとえば、切符のような一過性のものはたとえ支払手段の機能を果たしていても貨幣とみなさない。このように、貨幣の諸機能を備えて、普遍性をもって行使できるものが貨幣と理解するならば、貨幣の形態はコイン

のように成形したものは必ずしも限らない。また、貨幣の素材が金属か非金属であるかも問わない。金や銀はコインだけでなく、インゴットも貨幣とみなし、米や絹、胡椒といった実物も貨幣としてとらえる。

以上のような本研究の問題意識をふまえたうえで、本研究の構成を示しておきたい。

第一章「研究史の整理と研究視角」では、本研究と関わる中世後期日本の貨幣史研究を整理し、問題の所在を述べたうえで、本論文の研究視角を明確に提示する。

第二章～第五章では、中世後期日本における錢行使の態様に着目し、中世後期日本の貨幣について考察した。第二章と第三章では、錢の種類に焦点をあてて、第四章と第五章では、錢のまとまりである緡錢に焦点をあてた。

第二章「撰錢」の仕組み―「悪錢替」と「悪錢売買」―では、撰錢という行為そのものと悪錢を受け取った場合の対処について分析する。これまで不明瞭であった撰錢という行為がいかなる仕組みだったのかを明らかにしたうえで、悪錢の対処、すなわち悪錢を替える行為（「悪錢替」）と悪錢を売買する行為（「悪錢売買」）の仕組みを解明し、錢貨使用の特質を探っていく。そこでは、悪錢の登場が数量的な問題ではないことを実証している。

第三章「錢貨に封を付けること」では、これまで全く注目されてこなかった錢貨に封を付けるという行為を分析し、錢貨使用の一端を考察する。まず、錢貨に封を付けることに関する事例を抽出し、錢貨に封を付けるという行為そのものの仕組みを明らかにする。そのうえで、錢貨に封を付けるという行為が存在しうる歴史的背景に迫り、中世後期日本における貨幣の様相を考える。

第四章「緡錢慣行」では、緡錢を取り上げて、その使用慣行について明らかにする。行使する緡錢には、二つの括り方が確認できる。ひとつが異なる錢種をある一定の比率で混用する緡錢で、もうひとつが百枚未満の錢を百文として使用する短陌である。その特徴を精錢と悪錢の比価に留意しながら考察した。

第五章「計算方法」では、短陌の計算方法を位取り方式（短陌の値を位取りして用いる方法）と比例定数方式

（短陌の値を比例定数として用いる方法）の二方式に分類し、中世日本における計算方法の特質を説明していく。

第六章と付論では、第五章で説明した計算方法を踏まえたうえで、銀の浸透と貨幣使用の関係を考察した。

第六章「銀の浸透と貨幣使用」では、一六世紀後半から一七世紀前半における貨幣使用の変容を、銀の浸透に留意しながら、銭と銀との関係について論じる。具体的には、北野社における諸職補任料の授受について検討する。そのさい、当該期における銭銀相場に着目し、貨幣使用の変容を説明していく。

付論「私札と木綿売買」では、私札と木綿売買の関係について論じている。私札の発行が百姓と商人との木綿売買に使用され、その背景に銀使用の性格が深く関わっていることを示す。なお、私札と木綿売買との関わりを論じていること、近世前期の動向を取り上げていることから、本章には組み込まず付論とした。

終章「本研究の総括」では、各章で説明した内容を整理し、今後の課題を示す。

註

（1） 桜井英治・中西聡編『新体系日本史12 流通経済史』（山川出版社、二〇〇二年）を参照。

（2） 宮澤知之『宋代中国の国家と経済―財政・市場・貨幣―』（創文社、一九九八年）、同『中国銅銭の世界―銭貨から経済史へ―』（思文閣出版、二〇〇七年）を参照。

第一章 研究史の整理と研究視角

第一節 研究史の整理と問題の所在

本章では、本研究と関わる中世後期日本の貨幣史研究を整理し、問題の所在を述べたうえで、本研究における研究視角を示したい。まず第一節では、中世後期日本の貨幣史研究を整理し、研究史上の問題点を確認しておきたい。

中世後期日本の貨幣史研究では、戦前から現在にいたるまで、錢体系の混乱の象徴たる撰錢行為と撰錢令の問題が、主要な論点として考察されてきた。

まず、戦前から戦後にかけて貨幣史研究の先駆となった研究に小葉田淳の業績がある。^①小葉田は撰錢について「錢貨の質の良否によって生ずる撰錢」、「錢の授受に際して不正を検する行為」とし、その背景について、悪錢の増加、具体的には「善錢が長年の使用のため摩損」と「福建等の私悪錢が流入」をあげている。また、日明関係の影響についても指摘している。

一九六〇年代、小葉田淳の研究をうけて、撰錢と撰錢令について論じたのが滝沢武雄である。^②滝沢は撰錢を「不当なる錢貨の価値の使用上に生ずる損失防衛のための悪錢排除、替錢（または悪錢に対する正当な打歩）を要求する行為、または錢貨数量の不足を検する行為」とし、撰錢令発布の背景については「商取引は発展し、貨幣の需要量は増加し」たことによって、「貨幣数量の不足が生じ」たこととし、その目的は「根本渡唐錢を精錢と混用させること」とする。そして、室町幕府による撰錢令の発布は日明貿易を通じて獲得した根本渡唐錢の強制使用と位置づけた。

一九九〇年代以降、撰銭と撰銭令に関する議論が活発になる。その契機となったのが、足立啓一の研究である。⁽³⁾ 足立は「中国における銭信任の解体が一四六〇年代の北京に始まり各地に広がった」こと、一四八五年に大内氏から日本最初の撰銭令が發布されたことをふまえて、「中世日本は、中国の内部貨幣である銭の体系に組み込まれており、中国の銭体系が解体した時、日本の銭体系も解体した」と主張する。

また、池享は「中国での銭の信認の崩壊が貿易を通じて日本に波及し中国銭の価値変動を引き起こしたことが撰銭問題を深刻化させ公権力に「撰銭令」を發布させる基本的契機だった」と指摘する。⁽⁴⁾

中島圭一は、中世貨幣の特質を「国家の保障に依存せず、流通の自律的秩序が確立していたこと、その信用の根拠を特定の一つ（たとえば素材価値など）に絞るのは難しく、あいまいなままに通用したこと」とし、一五世紀末期以降の中世貨幣については、「独自の通貨を創り出す動き」や「明における銭貨秩序の動揺が日本に伝わったこと」を述べたうえで、「撰銭激化の根本的な原因は、従前の貨幣流通全体に対する社会不安——いわば中世貨幣のシステム疲労であり、他方でこのシステム疲労が独自通貨の創出を促した」と指摘し、撰銭の原因は中世貨幣システムの動揺ととらえる。また撰銭令は貨幣流通の実態を単に追認したものにとらえる。⁽⁵⁾

本多博之は、撰銭を「種類を問わず等価値であった従来の銭貨通用形態が大きく変わり、種類による区別立て、具体的には取引のさいに良質銭貨を選び取って低品位銭貨の受け取りを拒否するという行為」と規定し、撰銭の発生原因は「商品流通の発展による銭貨需要の増大に渡来銭供給が追いつかないなか、国内外の私鑄銭の流通参加が起こり、そこに明国内で銭貨流通の混乱が発生し、歴史の浅い明銭の価値低下現象が貿易を通じてわが国にも及んだとするのが自然だろう」と指摘する。⁽⁶⁾

川戸貴史は、悪銭問題を貨幣需要の増大と貨幣の地域内流通の発生を背景にあるとする。そして「貨幣需要の増加にともない銭貨不足が生じて私鑄銭鑄造が盛んになった」こと、「一四九〇年代になると、「地域通貨」（地域内流通を担う銭貨）の大量流入による銭貨秩序の混乱が発生することになった」ことを指摘する。⁽⁷⁾

黒田基樹は、撰銭の問題を「錢貨側の問題として考えるのではなく、むしろその交換対象である穀物流通量の側に主要な要因があったこと」とし、「災害・不作、さらには戦争等による穀物不足に基因して生じる問題」、「撰銭問題は広範囲にわたる飢饉状況を背景として発生したもの」と指摘する⁽⁸⁾。

高木久史は撰銭を「錢の摩滅・破損、錢文不鮮明、錢文の種類等を理由に、特定の錢を流通から排除する行為、言い換えれば錢の授受に際して良錢を選び悪錢を排除する行為（ただし、良悪の分別は金属の素材価値に必ずしも依拠しない）」とし、撰銭令を「撰銭の禁止や制限など、撰銭に関する基準を規定した法」としたうえで、「撰銭令の発令時期は食糧需要が増大する時期である」と述べ、撰銭令を「食糧需給政策としての性格を持つ」という見解を示した⁽⁹⁾。

以上が先学における撰銭と撰銭令の主張である。撰銭と撰銭令の背景について整理すると、つぎのように分類できる。

- ① 貨幣の品質の問題としてとらえ、品質の劣った粗悪な錢を排除する。
 - ② 中国国内の錢体系が崩壊し、それが日本へ波及した。
 - ③ 商品経済の発展による貨幣需要の増加と貨幣供給の不足により、粗悪な私鑄錢が流通した。
 - ④ 穀物の不足と食糧需給の増大によるもの、飢饉や戦争が影響している。
- 先学ではこれらの組み合わせによって説明されていることがわかる。そして、こうした説明には主に二つの理解が根底にあると考えられる。

ひとつは、中世後期における商品経済の動向が深く関わっていたという点である。商品経済の発展による貨幣需要の増加と貨幣供給の不足による悪錢（排除される錢）の発生という理解や穀物の不足と食糧需給の増大によって、撰銭行為の発生する理解がそれである。前者は貨幣にその要因を求めているのに対して、後者は貨幣に対応する商品にその要因を求めている。こうした理解には、貨幣と商品が対応し、貨幣流通量が商品流通量と相関関係にあるという考えに由来すると思われる。

もうひとつは、中国の銭体系の崩壊が日本の銭体系にも波及するという理解である。この理解は中世日本が中国の内部貨幣に組み込まれているとする足立の説を踏襲したものと考えてよいだろう。中世日本における銭体系の混乱の要因について、中国の銭体系の解体によるものとし、日本国内の問題ではなく中国に視点を置いている点が前者の理解とは大きく異なるだろう。

さて一九九〇年代以降、中世貨幣を対象としたとき、撰銭と撰銭令の問題と軌を一にして、つぎの側面から論じられるようになった。

第一に、分析対象を「地域」に焦点をあてて、貨幣の地域性を論じた研究である。

本多博之は中国地域や豊前国を事例として、「清料」―「当料」―「和利」の概念および通用慣行が存在したことを解明した。「清料」は「基準銭貨であると同時にそれに基づく銭貨額」、「当料」は「清料」に比べ低品位・低価値の一般流通銭貨であると同時に、実際の収納・取引のさいに授受される銭貨額」、「和利」は「清料」(額)から「当料」(額)への換算値」と規定した。⁽¹⁰⁾

高木久史は越前国を事例に、基準銭(価格表示に使用される標準的な銭)と通用銭(条件付で使用された非基準銭)の分化していたことを解明し、「双倍」や「三文立」が基準銭と通用銭との比価で、それに基づいた通用銭使用であったと指摘した。⁽¹¹⁾

千枝大志は伊勢神宮地域を事例に貨幣の地域性について論じた。「悪銭指し」の法の問題、金と永楽銭の問題、「羽書」の問題、相場と銭貨比率の問題など、論点は多岐にわたるが、特に使用銭貨が七二枚で一〇〇文とする特殊な省百法(特殊省百法)の存在を解明したことは大きな意義を持つだろう。⁽¹²⁾

川戸貴史は、「国の料足」と呼ばれる地域に因んだ貨幣の存在を指摘し、それを「地域通貨」と表現した。そして、その「地域通貨」が地域独自の銭貨流通秩序形成に一定度影響したことを主張している。⁽¹³⁾

これらの研究は、貨幣の地域性の問題を取り上げるなかで、「精料」・「精銭」といった基準銭と「当料」・「並銭」

といった流通銭の存在を明らかにし、中世後期日本において銭貨流通秩序が階層化したことを示した。この事実はこの分野における大きな成果であろう。

第二に、日本の貨幣を東アジア世界の動向に位置づけた研究である。

足立啓二は、先に述べた中世日本の貨幣のほかに、皇朝十二銭の時代と日本近世の銭についても論じている。ここでは、皇朝十二銭が律令財政の解体とともに、その機能を低下させること、日本近世の銭が「農民的流通手段」として機能を果たしたことを主張している。¹⁴

黒田明伸は、東アジアのなかでの、中世日本貨幣流通の位置を検討した。そして、銭貨の階層化が中国だけでなく、同時代の日本においても進行し、その貨幣たちの間に補完的な関係が成立していること、一六世紀後半に西日本一帯でおこる土地売買などからの銭遣いの消失は中国銭の流入の停止が引き金になったことを指摘した。¹⁵

第三に、出土銭貨の研究である。これは日本全国の発掘調査から出土した銭（出土銭貨）を研究対象とした研究で、文献だけでは得られない情報を出土銭貨から提供している。その研究分野を推進したのが、鈴木公雄と櫻木晋一の研究である。

鈴木公雄は、出土銭貨の時期（一三世紀第4四半期から一六世紀第4四半期）を八期に区分したうえで、出土銭貨の銭種構成を考古学の側面から分析し、中世後期から近世前期の銭貨流通を描いた。¹⁶特に、永楽通宝は六期（一六世紀第1四半期から第2四半期）以降に銭種構成における割合が増加し、その傾向が九州や関東といった地域に集中しているという指摘は、永楽通宝の地域差の問題に関係し、文献史学の分野に大きな影響を与えた。

櫻木晋一は、主に九州・沖縄の出土銭を事例として分析し、九州において洪武通宝が高い割合で存在し、当該地域において洪武通宝が広く流通していたことを指摘している。そしてその研究成果を「貨幣考古学」と提唱し、新たな専門分野の展開を示した。¹⁷出土銭貨研究を中世考古学の一分野から進展させたことは大きな意義を持つ。さて、このように銭に関する研究が進展するなかで、研究史上の問題関心は銭だけでなく、金や銀にも向けら

れるようになった。特に銀の浸透は、多くの研究が蓄積された。こうした銀の浸透に関するの研究は、銀の貨幣機能獲得過程の解明することを主眼とした。

浦長瀬隆は、土地売券の取引手段の変化を分析し、「一五六〇年代後半から一五七〇年代にかけて西日本では銭の使用から米の使用に変化」し、「一五九〇年代に米の使用から銀の使用に変化」するとしている。その要因について、「貿易に必要なため大内氏をはじめ西国大名が銀の採掘をさかんにおこない、銀の量が増加し、やがて国内でも流通するようになった」と指摘する。⁽¹⁸⁾

盛本昌広は、豊臣期における金銀遣いの浸透過程を分析し、銀遣いは京では文禄年間に本格的になり、慶長年間にかなりの取引で行われ、小額取引も銀が使用され始めたことを明らかにした。⁽¹⁹⁾

中島圭一は、京都における「銀貨」について論じた。その結果、一五六三年に毛利氏が大森銀山を室町幕府と朝廷に寄進したのを契機として銀が京都に流入したこと、一五七〇年代に銀が送金・贈答の主流になったこと、一五八〇年から九〇年代にかけて銀貨の使用が完全に定着したことを主張した。⁽²⁰⁾

川戸貴史は、大友氏領国と京都を事例として金・銀について論じており、金・銀が貨幣に転換することを「貨幣化」と称したうえで、一五七〇年代に大友氏領国において収取対象が銭貨から金・銀に転換した（金・銀の「貨幣化」した）こと、銀の使用頻度が他種の貨幣を凌駕する状況を「普及」と定義したうえで、京都において一五九〇年代に銭の使用頻度が減少し、銀の利用が拡大した（銀が広く「普及」した）ことを主張している。⁽²¹⁾

高木久史は、『信長公記』を素材として、信長期の金銀使用を論じた。そのなかで、京都において永禄末年から天正年間にかけて、交換手段・支払手段・価値蓄蔵手段としての金使用が一定程度あったことを指摘している。⁽²²⁾

千枝大志は、伊勢神宮地域の銀の普及状況を検討し、一五六〇年代中頃から一五七〇年代における不動産取引以外の銀使用が普及していたこと、その御師が高度な読み替え操作である「辻」行為をしていたこと、高度金融

機能を果たしていたことを指摘する。⁽²³⁾

本多博之は、銀の海外流出と毛利氏領国の浸透過程を検討し、石見銀山の開発、銀の生産が、国際通貨「倭銀」を登場させ、重要な貿易通貨として広く利用されたこと、元龜二年の厳島社遷宮が石見銀の厳島流入の契機になったこと、天正一〇年代以降に莫大な金銀が毛利氏から中央政界へ流れていることを指摘した。⁽²⁴⁾

桐山浩一は、京都における銀の貨幣化について論じた。一五七〇年代に贈答品の取引で銀が価値尺度・支払手段として使用される一方で、日常品等の一般的な取引では、銀の使用が確認できないこと、一五九〇年代初期には、一部の銀の使用が一般的な取引でも見られるようになり、一五九〇年代中期に銀が「普及」していったことを指摘する。⁽²⁵⁾

これらの研究を概観すると、銀が社会に浸透し始めた時期については意見がわかれているものの、銀が「普及」・「本格化」・「定着」した時期を一五九〇年代とする点は共通する。それは地域ごとの検討の蓄積によって、銀の「普及」・「本格化」・「定着」した時期に地域的な差異がないことを示している。

以上のように、中世後期の貨幣史研究を整理し、その研究成果を示した。だが、こうした先行研究が中世日本貨幣の諸問題を、近代ヨーロッパの経済体制から抽出された貨幣理論に基づいて説明されてきた点は注意しなければならぬ。近代ヨーロッパが「金本位制」による商品経済の段階にあるのに対して、前近代日本がそれより低い段階にあることは周知の通りである。それにもかかわらず、先行研究は近代ヨーロッパの貨幣理論をあてはめて、前近代日本を論じているのである。そこで近代ヨーロッパの貨幣理論を採用することによって生じた問題点を指摘したい。

第一に、貨幣価値を品位の問題としてとらえる点である。たとえば、史料上に登場する「悪銭」を粗悪な銭、低品位の銭と評価している点、卑金属貨幣（銭）より貴金属貨幣（金・銀）のほうがより発展的な貨幣ととらえる点などがそれである。こうした理解の場合、貨幣は金属貨幣を意味し、貨幣価値は金属成分の含有量で決定す

る見方になる。すなわち貨幣が諸機能を果たす根拠は、貨幣じしんの素材価値にもとづいている立場にある。だが、後述するように、銭が貨幣価値を表示する根拠は一枚を一文とする個数原理にある。銅の素材価値にもとづいていないのである。

第二に、貨幣数量を商品経済と直接結びつけた見方、つまり貨幣数量が商品経済の発展水準と対応するととらえる点である。たとえば、悪銭の登場を量的な商品経済の拡大による貨幣需要増加と貨幣供給不足とする理解や、地域通貨が登場し、地域内流通を担ったとする理解などがそれである。こうした理解は、商品経済の発展による貨幣不足がその根拠となっており、貨幣量と商品流通量とが対応する（貨幣量＝商品流通量）という見解になる。こうした見解は、すべての貨幣が流通過程にあるという前提でなければ成立しない。しかし実際には、蓄蔵された貨幣が存在し、この前提は妥当性をもたないといえる。また、流通過程上の貨幣には、銭といった金属貨幣だけではなく、米といった実物貨幣も存在した。実物貨幣は季節的に流通量変動し、量を計測しにくい特徴がある。したがって、貨幣の蓄蔵や実物貨幣の存在を考慮すると、貨幣量＝商品流通量という見解は成り立たないのである。

このように近代ヨーロッパの経済体制から抽出された貨幣理論をもとに中世日本の貨幣の特質を説かれるのは妥当ではないことを示した。とすれば、貨幣と商品経済とを直接結びつけた貨幣観から脱却することが重要となるだろう。そして貨幣と商品経済を切り離れた中世日本貨幣の特質の究明が必要とされる。

第二節 研究視角

前節では、研究史整理と問題の所在を述べた。そこでは、ヨーロッパ近代の貨幣理論をもとにした貨幣観が中世日本貨幣を理解するうえで障害であることを指摘し、貨幣と商品経済を区別したうえでの考察の必要性を説いた。そこで本節では、右の問題を克服するために、研究視角を設定しておきたい。

1 中世貨幣の性格

中世日本は中国銅錢を中心とした錢（一文錢）を貨幣として使用していた。一六世紀後半に金・銀が社会に浸透し、一七世紀前半に山田羽書といった紙幣が使用されるようになるまでは、錢（一文錢）が金属貨幣の中では主要な貨幣の位置をしめている。このことは先行研究において自明の前提とされる。それゆえに先行研究においては、せいぜい「渡来錢」という性格から日本の権力が発行していないことを論点に置く程度で、錢じだいを持つ貨幣としての性格について問うことはない。しかし、錢と丁銀・豆板銀といった銀（インゴット）、藩札・私札といった紙幣、ヨーロッパや西アジアにおいて使用されたコインなどを比較すると、その性格はかなり異なる。すなわち、中世日本の貨幣使用を説明するうえで、当該期における貨幣がいかなる性格なのかは重要な論点となる。したがって、貨幣の一般的性格を整理したうえで、中世日本貨幣の性格を位置づける必要がある。⁽²⁷⁾ここで重要なことは、貨幣の機能をみる以外に、素材、重量（大きさ）、型式、製法、価格表示方法、単位、流通圏、デザインといった点を総合的に検討することである。以下、錢（一文錢・大錢）、銀（インゴット）、ヨーロッパのコイン、紙幣、米（実物）の貨幣の一般的性格について順を追ってみてみよう。

① 錢（一文錢）

錢（一文錢）は主に卑金属である銅・錫・鉛を素材とする小額鑄貨である。⁽²⁸⁾唐の開元通宝や宋の小平錢、明の制錢などがある。個数で数えられる計数貨幣であり、一枚を一文とするように、貨幣自体に価値の根拠がなく、貨幣の個数を財貨の価値と対応させる個数原理の貨幣である。価格は必ず正数値で表現し、小数点以下を表現できない。そのため、価格や比価は離散的な値をとり、連続的な値をとらない。たとえば、精錢と悪錢の比価が一对二の場合、悪錢二枚が精錢一枚の比で表示されること、精錢と悪錢の比価が一对一〇の場合、悪錢一〇枚が精錢一枚の比で表示されることを意味する。決して悪錢一枚が〇・五文、〇・一文ではなかった。重さや直径は鑄造

地や鑄造時期などによって差異があり、なかには重さが倍以上のものだけでなく、金属組成の割合もすべて異なる⁽²⁹⁾。これは錢（一文錢）の貨幣価値が素材価値を根拠としていないことを示している。また、形状は円形方孔（円の形で穴が四角）であり、縉錢として行使することもあった。錢経二五ミリメートル程の円形方孔の錢であれば、東アジア一帯のどこの地域のものであっても各地域で共有しうる素地を備えていた。すなわち、錢（一文錢）は東アジア一帯で共有されたのである。

② 錢（大錢）

錢には一文錢のほかに、宋の折二錢・当五・当十などの大錢といった額面原理の貨幣が存在する⁽³⁰⁾。これは額面を価格として表現しているものである。形状は一文錢と同じく円形方孔であり、一文錢に比べて大きい⁽³¹⁾が、錢経・重量・金属組成の規格が不安定である。たとえば、折二錢は一文錢の二倍以上の重さを持つことが多い。当十錢は一文錢の三倍の重さであることが多い。また、銅を主たる素材としているため素材価値は低価であり、額面の価格は発行者の信用をもって通用する。したがって、発行者の信用の及ぶ範囲が行使できる範囲となる。たとえば宋の折二錢・当五・当十の通用範囲は中国国家の信用が及ぶ範囲、つまり中国国内のみとなる。たしかに中世日本では折二錢が博多や太宰府などで出土している⁽³²⁾。しかし管見の限り、額面の価格を行使した事例は確認できない。日本では大錢を額面の価格で行使してなかったと考えるべきだろう。

③ 銀（インゴット）

銀（インゴット）は、金属素材の重さを計って用いる秤量貨幣である⁽³³⁾。銀の純度（品位）と量目を根拠に価格を表現している⁽³⁴⁾。日本の丁銀・豆板銀、明清の時代の銀錠などがある。丁銀には、所々に極印が打たれており、これは極印者の信用によって品位が保証されるものである。丁銀の形状は、いわゆるナマコ形をしており、元年間（一六一五～一六二四）に江戸幕府によって禁止されるまで、たがねで切断する（切遣い）によって行使されていた。豆板銀（小玉銀）は、豆つぶの形状をしたものである。日本銀行博物館所蔵の豆板銀の統計分析によ

れば、全体の三分の一が〇・五匁以下のものであったとされる。⁽³⁴⁾ 丁銀と豆板銀によって使用する場合、これらを複数組み合わせたうえで、品位を鑑みて秤にかけていたと推測される。そのため丁銀・豆板銀の使用には不便さがあったと思われる。

④ ヨーロッパのコイン

中国や日本などの東アジアでは一定の形に鑄造した錢を貨幣として使用していたのに対して、ヨーロッパでは打製したコインを使用した。⁽³⁵⁾ 打製コインはヨーロッパ・西アジアの金貨・銀貨、具体的にはリブラ・ソリドゥス金貨、デナリウス銀貨などがある。計算単位については、たとえば中世ヨーロッパではリブラ、ソリドゥス、デナリウス（一二デナリウス＝ソリドゥス、二〇ソリドゥス＝リブラ）の組み合わせで用いられて、もともと重量単位であった。錢（一文錢）が鑄造のため品位がバラバラであるのに対して、打製コインは品位が均一である。また金・銀の素材価値に、造幣の利益が加えられてコインの貨幣価値となり、打刻された王の肖像の背景にある権力の信用がその根拠となった。

⑤ 紙幣

紙幣は元の鈔や江戸期の藩札や私札などがある。⁽³⁶⁾ 紙を素材としており、素材じたいに貨幣価値はなく、発行者など信用によって貨幣価値の根拠としている。藩札は、藩の信用をもとに額面の価値を保持する。一方、私札は発行者の情報が記されていることに加えて、使用者の判が捺されていることがある。これは発行者の信用と使用者の信用に基づいていることを意味している。

⑥ 米

米は、貨幣としての諸機能を備えており、中世日本においても貨幣として使用されていた。⁽³⁷⁾ 米は品質と容量を貨幣価値の根拠とし、銀（インゴット）と同じく秤量的に使用する。米は生産と消費の問題が常に関わる貨幣であった。季節によって流通量の変動し、商品として市場の価格が安定しない性格を持つ。また、年月の流れによつ

て品位が劣化してしまうため、価値保存機能を保持していない。その点は、品位が一定で保存できる中世ヨーロッパの胡椒とは性格が異なる。

⑦ 木片・紙巻タバコ・

貨幣としての機能を備えていれば、木片や紙巻タバコも貨幣となる。黒田明伸によれば、一九三一年末のアメリカワシントン州テンネオの木片や一九四六年九月から四八年にかけてのドイツの紙巻タバコが貨幣として諸機能を備えていたとされる。⁽³⁸⁾ ただしこの場合、価値保存機能や支払手段といった機能は果たさず、価格表示手段として機能していたと考えられる。また、木片や紙巻タバコには、素材としての価値はなく、発行者による信用もない。取引間においてそれを貨幣として機能させようとする合意形成が信用の根拠となっている。

以上、貨幣の一般的性格を整理した。中世日本貨幣の主要な位置にいた錢（一文錢）の特徴は、他の諸貨幣を比較するとより明確にみえてくる。

それは、錢（一文錢）が一枚を一文とする計数貨幣という点である。錢の重さに拠らず、錢の種類を問わず、一枚が一文の個数によって価格表示の根拠としている個数原理の貨幣である。それに対して、他の諸貨幣は価格表示・貨幣価値をあらわす根拠が大きく異なっていた。たとえば銀（インゴット）は、品位と重量の組み合わせによって価格を表示する貨幣である。貨幣価値の根拠は銀の素材価値にある。また、紙幣や大錢は貨幣に記された額面で価格を表示する。紙幣は、貨幣に記された額面の価格を行使するには、札じしんの素材価値ではなく、兌換先の金属（金・銀）の素材価値（本位貨幣制の場合）や発行者の信用（管理通貨制の場合）である。さらに、大錢の場合は、額面の根拠は、中国国家の信用である。一文錢が東アジア全域で使用されていたのに対して、出土事例があるものの、大錢の使用範囲が東アジア全域ではなく中国国内に限られるのは、中国国家の信認が東アジアに及んでいなかったことを示す証左といえる。

このように中世日本貨幣の主要な位置にいた錢（一文錢）が一枚を一文する計数貨幣であることは、他の諸貨

幣と比較すると大きな特徴といえる。銅の素材や重さに関係なく、鑄造者（発行者）の信用にも関係なく、一枚が一文という単純な個数原理によって価格を表現する貨幣が、中世日本における貨幣の性格であった。

2 中世後期日本の貨幣使用

これまで、中世後期日本の貨幣流通については、錢体系が混乱した状況となる一方で錢の階層化が進行し、それをめぐる権力側の対応が指摘されてきた。そして、その背景には、商品経済の発展があると理解されている。先行研究では、貨幣と権力との関係、貨幣と商品経済の分別せずに論じられるさらいがあった。だが、先述したように、貨幣を商品経済と結びつける貨幣観を採用することは妥当ではない。

そこで本研究では、中世日本貨幣の性格をふまえたうえで、中世後期日本における錢貨使用の仕組みの解明を一つの課題としたい。具体的には、中世後期日本における錢貨使用について、撰錢、錢貨に封を付ける、緡錢慣行という行為そのものに焦点をあてて、そのメカニズムを考察していく。撰錢、錢貨に封を付ける、緡錢慣行がどのような行為であったのかを明らかにすることは、中世後期日本の貨幣使用を解明するうえで必要不可欠と考えているからである。

繰り返しになるが、本研究では、貨幣そのものに焦点をあてており、権力との関わりや商品流通の問題については捨象している。たとえば、権力側の意向が強く反映される可能性がある撰錢令は、錢貨使用の実態に関わる撰錢行為と別次元の問題としてとらえるべきものである。したがって、本研究では、撰錢令を分析対象として取り上げていない。これは貨幣と権力、貨幣と商品流通の問題が不要という意味ではない。中世日本貨幣の問題と権力や商品流通の問題を明確に区別し、論理の次元を揃えることで、中世日本貨幣の特質を明確にできると考えるからである。

錢貨使用の仕組みを検討するにあたっては、実物資料から得られる情報を十分に活用していく。宮澤知之は、

中国貨幣の主要な位置をしめた銅錢を、文献史学と考古学と古銭学とを組み合わせ、相互補完的に検証し、中国貨幣史の大きな流れを描くことに成功した。⁽³⁹⁾特に留意すべき点は、文献資料だけでは立論できなかった部分を、実物資料に視点を据えることで明らかにされた点であろう。この方法は、中世後期日本における錢貨使用の特質を明らかにするうえでも有効と考える。

3 金・銀の浸透

一六世紀後半、金・銀が貨幣として機能し、実物たる米も場合により貨幣として使用された。従来、この状況については、「東日本の金遣い、西日本の銀遣い」と言われるように、地域性を帯びながらも、金・銀が主要な貨幣の位置を獲得する一方、錢は主要な貨幣の地位を失い、金・銀の補助貨幣となったと理解される。こうした理解には、貨幣と商品経済を結びつけ、卑金属貨幣（錢）から貴金属貨幣（金・銀）へと進展することが商品経済の発展したことを示しているという認識が根底にあったと考えられる。そのため先行研究では、金・銀が社会に浸透したことが、卑金属貨幣（錢）から貴金属貨幣（金・銀）へと進展したことを意味し、中世から近世へと移行するメルクマールとされてきた。したがって先行研究においては、金・銀の貨幣機能獲得過程の解明が主眼とされてきたのである。

しかし、東日本の金遣い、西日本の銀遣い、錢の補助貨幣化という通説的理解が、近世社会の現実レベルでは存在しなかったことは、すでに安国良一⁽⁴⁰⁾によって実証されている。安国は幕府の街道・宿駅整備と街道筋における錢の機能を検討し、錢は交通路において交換・支払い手段として重要な役割を果たしており、錢が単なる金・銀の補助貨幣でないことを主張した。安国の研究は、金・銀の浸透過程を検討するだけでは、当該期の貨幣を理解するのにあまり有効でないことを示している。当該期における貨幣の特質を理解するうえで考慮すべき成果であろう。

たしかに、一六世紀後半に金・銀が社会に浸透したことは事実である。しかし、それがただちに銭使用から金・銀使用へ移行したことを意味しているのではない。重要なことは、金・銀の浸透にともない、貨幣使用状況がいかに変化したかという点にあらう。つまり、金・銀の浸透にともなう、貨幣使用状況の変化を解明することが課題となるだろう。金・銀・銭たる「三貨」使用を実現する仕組みがいかなるものだったのか。本研究では、右の課題を解く手がかりとして、銀の浸透と貨幣使用について明らかにする。そのさい、銀と銭との相場の問題に着目し、短陌の存在を前提とした社会であることを留意しながら考察する必要がある。

註

- (1) 小葉田淳『日本貨幣流通史』（刀江書院、一九六九年、初版一九三〇年）。
- (2) 滝沢武雄「撰銭令についての一考察」（同『日本貨幣史の研究』校倉書房、一九六六年）。
- (3) 足立啓二「中国からみた日本貨幣史の二・三の問題」（同『明清中国の経済構造』汲古書院、二〇一二年、初出一九九一年）、同「東アジアにおける銭貨の流通」（荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅲ海上の道』東京大学出版会、一九九二年）。
- (4) 池享「前近代日本の貨幣と国家」（池享編『銭貨―前近代日本の貨幣と国家―』青木書店、二〇〇一年）。
- (5) 中島圭一「日本の中世貨幣と国家」（歴史学研究会編『越境する貨幣』青木書店、一九九九年、初出一九九八年）。
- (6) 本多博之「銭貨をめぐる諸権力と地域社会」（同『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、二〇〇六年）。
- (7) 川戸貴史「中近世移行期の流通構造と貨幣」（同『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館、二〇〇八年）。
- (8) 黒田基樹「戦国大名の撰銭対策とその背景」（同『中近世移行期の大名権力と村落』校倉書房、二〇〇三年）。

- (9) 高木久史「室町幕府の撰銭令」(同『日本中世貨幣史論』校倉書房、二〇一〇年)。
- (10) 本多博之「銭貨通用の実態」(同『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、二〇〇六年)。
- (11) 高木久史「一六世紀後半における銭使用秩序の変容―越前をフィールドに―」(同『日本中世貨幣史論』校倉書房、二〇一〇年)。
- (12) 千枝大志『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』(岩田書院、二〇一一年)。
- (13) 前掲註(7) 川戸論文。
- (14) 前掲註(3) 足立論文。
- (15) 黒田明伸「東アジア貨幣史の中の中世後期日本」(鈴木公雄編『貨幣の地域史―中世から近世へ―』岩波書店、二〇〇七年)。
- (16) 鈴木公雄『出土銭貨の研究』(東京大学出版会、一九九九年)。
- (17) 櫻木晋一『貨幣考古学序説』(慶応義塾大学出版会、二〇〇九年)。
- (18) 浦長瀬隆『中近世日本貨幣流通史』(勁草書房、二〇〇一年)。
- (19) 盛本昌広「豊臣期における金銀遣いの浸透過程」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第八三集、二〇〇〇年)。
- (20) 中島圭一「京都における「銀貨」の成立」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一三集、二〇〇四年)。
- (21) 川戸貴史「一六世紀後半京都における貨幣の使用状況―『兼見卿記』の分析から―」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第二〇号、二〇一〇年)、同「銀貨普及期京都における貨幣使用―『鹿苑日録』の分析を中心に―」(天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』日本史史料研究会、二〇一二年)。
- (22) 高木久史「信長期の金銀使用」(同『日本中世貨幣史論』校倉書房、二〇一〇年)。
- (23) 千枝大志「神宮地域における銀の普及と御師の機能」(同『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』岩田

書院、二〇一一年)。

(24) 本多博之「銀の海外流出と国内浸透」(同『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、二〇〇六年)。

(25) 桐山浩一「一六世紀後半の京都における銀の貨幣化」(『ヒストリア』二三九号、二〇一三年)。

(26) 前掲註(4) 池論文。

(27) 宮澤知之は「中国貨幣経済論序説」(同『宋代中国の国家と経済』創文社、一九九八年)のなかで、「貨幣価値は何に根拠をもち、いかに価格として実現されるかという観点から整理すると、論理的には、計数か、素材か、額面かの三通りの原理があると想定できる」と指摘している。ここでの議論は、この三原理を前提としている。

(28) 銭(一文銭)の性格については、宮澤知之『宋代中国の国家と経済―財政・市場・貨幣―』(創文社、一九九八年)、同『中国銅銭の世界―銭貨から経済史へ―』(思文閣出版、二〇〇七年)を参照。

(29) 周衛栄『中国古代銭幣合金成分研究』(中華書局、二〇〇四年)。

(30) 銭(大銭)の性格については、前掲註(28) 宮澤著書を参照。

(31) 嶋谷和彦「出土銭貨の語るもの」(小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『モノとココロの資料学―中世史料論の新段階―』高志書院、二〇〇五年)。

(32) 銀(インゴット)の性格については、前掲註(28) 宮澤著書、岩橋勝「近世の貨幣・信用」(桜井英治・中西聡『新体系日本史12 流通経済史』山川出版社、二〇〇二年)を参照。

(33) 近世初期に発行された和算書である『塵劫記』には品位の異なる銀に関する換算の計算式が記されている。『塵劫記』(『江戸初期和算選書』第一巻―三、研成社)。

(a)

▲丁銀五百六拾九匁有時 よきはいぶきに内二わり引にかへる時、右之丁銀二はいぶき何ほと、云時、

はいふき四百五拾五匁貳分といふ也、

右に丁銀五百六拾九匁と置て、これに八をかくれハはいぶき四百五拾五匁貳分としる、也、

(b)

▲はいぶき七百九十貳匁有、これを丁銀に内二わりましにして、右之はいぶき二丁銀何程そと云時、

丁銀九百九拾目に成といふ、

右にはいぶき七百九十貳匁と置て、又左に八とおきて、此八にて右之はいぶきをわれは丁銀九百九十匁としる、なり、

右の史料は、『塵劫記』第一五の「銀両がへの事」の部分で、灰吹と丁銀の換算方法を示したものである。

(a) は丁銀を灰吹に換算する例題である。丁銀五六九匁を灰吹に二割引にかえる時、丁銀は灰吹でいくらほどかという問題で、その答えが灰吹四五五匁二分となる。計算式は、

$$569 \text{ 匁} \times 0.8 = 455.2 \text{ 匁}$$

となる。

(b) は灰吹を丁銀に換算する例題である。灰吹七九二匁を丁銀に二割増にする時、灰吹は丁銀でいくらほどかという問題で、その答えが丁銀九九〇匁となる。計算式は、

$$792 \text{ 匁} \div 0.8 = 990 \text{ 匁}$$

となる。

このように、銀の価格が銀の品位を基準として量目を表現していたことがうかがえる。

(34) 前掲註(32) 岩橋論文。

(35) ヨーロッパのコインの性格については、森本芳樹「西欧中世貨幣制度概観」(マルク・ブロック著、森本芳樹訳『西欧中世の自然経済と貨幣経済』創文社、一九八二年)、同「西欧中世前期貨幣史の諸問題」(『経

済史研究』（九州大学）五六―五六、一九九二年）、同「ヨーロッパ中世貨幣史／古銭学から」（『歴史学研究』七一一号、一九九八年）、同「小額貨幣の経済史―中世前期におけるデナリウス貨―」（同『西欧中世形成期の農村と都市』岩波書店、二〇〇五年）を参照。

（36）紙幣の性格については、前掲註（28）宮澤著書を参照。

（37）米の性格については、前掲註（28）宮澤著書を参照。

（38）黒田明伸『貨幣システムの世界史―〈非対称性〉をよむ―』（岩波書店、二〇〇三年）。

（39）前掲註（28）宮澤著書。

（40）安国良一「近世初期の撰銭令をめぐる」（歴史学研究会編『越境する貨幣』青木書店、一九九九年）、同「三貨制度の成立」（『銭貨―前近代日本の貨幣と国家―』青木書店、二〇〇一年）、同「貨幣の地域性と近世的統合」（鈴木公雄編『貨幣の地域史―中世から近世へ―』岩波書店、二〇〇七年）。

第二章 「撰銭」の仕組み―「悪銭替」と「悪銭売買」―

はじめに

本章では、撰銭の問題を検討する。撰銭に関する研究は、主に撰銭令や悪銭問題を分析対象として、銭貨流通の地域性や階層化、当該期における権力との関わり、東アジア規模の視角からみた貨幣流通、出土銭貨研究など、様々な角度から論じられてきた^①。その一方、いくつかの問題点を抱えている。

第一の問題は、撰銭という行為とは何かという問題と、権力・商品流通・地域経済の問題を混同していることである。その典型例は撰銭令と撰銭の問題を分けずに検討していることである。撰銭令の内容は、権力側の論理が強く反映されたものになっていることが推測される。したがって、撰銭令の内容が実際の貨幣流通の実態と合致するかどうかはわからない。これまでの研究は、この点を混同し分別せずに論じられてきたため、貨幣流通の特質を見逃してきたと考えられる。

第二の問題は、悪銭に対する理解である。従来、悪銭は流通界から排除されたと説明される^②。そして、その悪銭は「低品質」・「低品位」・「粗悪」と評価されるように質の悪い銭貨とされる。とすれば、撰られた悪銭はどうなるのであろうか。管見の限り、排除された悪銭が例えば鑄潰されるかどうか具体的に言及した研究は皆無であり、検討の俎上にもあがっていない。すなわち、従来の研究では悪銭は流通界から排除されるということが自明とされてきたのである。また、一六世紀後半になると悪銭が基準銭化するとされるため、排除されたはずの悪銭を使用するという論理矛盾がある。

以上の問題を踏まえると、まず撰銭とは何かということ、つまり行為としての撰銭じたいを明らかにすること

が重要であろう。撰銭令にみられるような権力との関わりも、また商品流通との関わりも、さらには貨幣の地域性や階層差などの問題もすべて撰銭という行為を明らかにした上で再度検討すべきである。

そこで本章では、撰銭という行為そのものと悪銭を受け取った場合の対処を明らかにしたい。

第一節 撰銭という行為

中国銅銭を中心とする銅銭が東アジア一帯で貨幣として使用したことはよく知られている。日本では一二世紀ごろから銅銭を通貨として使用したとされるが、そこで流通していた銅銭は中国銅銭（官銭・私銭）のほか、中国銅銭を母銭として鑄造した模鑄銭、中国銅銭を加工した母銭から鑄造した通用銭、新規母銭（新たに彫り起こした母銭）から鑄造した通用銭、ヴェトナムで鑄造した銭貨などがあつた。中国銅銭の官銭は歴代中国王朝が鑄造した銭貨のことで、具体的には唐の開元通宝や北宋銭や明銭などを指す。

中世日本においてこれら各種の銭貨を区別するという行為が起こる。すなわち、撰銭である。

【史料1】

〔馬^{（端素書）}上料足請取案 応永廿八 六 二 三百貫文 送文西殿へ まいる〕

請取 祇園社馬上用途之事

合参百貫文者

右諸色^{（職掌）}賞人酒肴以下雑用等、柒拾貫文加之定、悉令清撰之畢、仍所請取如件、

應永廿八年^{辛丑}六月二日

祇園社納所法眼

【史料1】は、応永二八年（一四二一）六月二日付、祇園社納所法眼馬上料足（馬上役）請取状案^④で、撰銭が確認できる早い事例である。これによれば、祇園社が馬上料足（馬上役）三〇〇貫文のうち七〇貫文を諸職掌人

などに下行することを定めて、三〇〇貫文を「清撰」した上で受け取ったことがわかる。

馬上料足（馬上役）とは、神輿渡御の費用のことである。⁽⁵⁾ その費用の流れは、瀬田勝哉によれば、「馬上料足三百貫文が馬上一衆の年行事から祇園執行に送られ、執行あるいは財政方の納所から請取状を馬上一衆年行事に出す。つぎにその三百貫文のうちから、必要経費として別当・目代以下各職掌人に定額が下行され、各職掌人から請取状を執行に出す」とされる。⁽⁶⁾ また、「清撰」とは、精銭を選別するという意味であろう。馬上料足（馬上役）三〇〇貫文は馬上一衆の年行事から祇園執行に送られるが、そのさいに撰銭されたのであった。

それでは、実際に馬上料足（馬上役）三〇〇貫文を撰銭したのは誰であろうか。この問題を考える上で参考になるのが、馬上料足（馬上役）の支配帳である。これは祇園執行が馬上料足（馬上役）を鉾や神馬、諸職掌人などに下行した内訳を記したものである。【史料1】に対応する応永二八年（一四二二）の支配帳は残されていないが、応永二九年（一四二二）の支配帳には銭三三九文を「せによみ（銭詠）の下人」に、また永享六年（一四三四）の支配帳には銭二五〇文を「銭ゑり女男」に下行されていたことが記されており、永享二年（一四三〇）と永享四年（一四三二）の支配帳では「銭詠下行物」という文言が確認できる。⁽⁷⁾ 「せによみ（銭詠）の下人」・「銭ゑり女男」と呼ばれる人々は、撰銭を職掌とする者と考えられる。すなわち、祇園社は馬上料足（馬上役）を撰銭を職掌とする者に「清撰」させていたのである。したがって、実際に応永二八年（一四二二）の馬上料足（馬上役）三〇〇貫文を撰銭したのは彼らであったと推測できよう。

このように、撰銭は一五世紀前半から確認できただけでなく、撰銭を職掌とする者が存在したことは注視すべきであろう。これまで、史料における撰銭の有無や撰銭の開始時期が問題とされてきたが、本史料のように、撰銭を職掌とする者の存在は撰銭がそれ以前からおこなわれていた事のなよりの証左といえよう。祇園執行が撰銭を職掌とする者に撰銭をおこなわせたのは、馬上料足（馬上役）が三〇〇貫文と多額であったことはいままでのないが、もう一つ、中国銅銭や模鑄銭などといった銭種の判別ができたからと考えられる。

それでは、どのように中国銅銭や模鑄銭などといった銭種を判別したのであるうか。天正一三年（一五八五）、ルイス・フロイスが「ヨーロッパでは銅の貨幣は滞りなく受取られる。日本では必ず選びとられる。古いものであること、特定の色、特定の刻印のついているものでなければならない」と記述しているように、色・銭文を参考^⑨に撰銭したことがうかがえる。銅銭の色は金属成分構成比の違いによって異なる。銅は他の金属と合金をつくらるとき、他の金属の種類や相対比率のわずかな差で劇的に色が変わる。銅が多ければ赤みがかったり、鉛が多ければ灰色がかっていたりする。また、ルイス・フロイスは述べていないが、模鑄銭は文字全体が広がり、銭形が縮み薄くなり、輪が広くなり、郭が抜け落ちるという特徴がみとめられる。さらに、新規母銭から鑄造した銭貨は、書体が中国銅銭（官銭）とは違い、中には加治木銭のように背文があるものもある。おそらく、先述した「せによみ（銭詠）の下人」・「銭ありの女男」は書体の違い・輪・郭・銭文の鑄上がりの違い・銭形自体の形・厚みなどから総合的に判断したのであろう。

ところで、撰銭はどのような手順でおこなわれたのであろうか。撰銭が成立するまでの過程をみてみたい。まず、撰銭をおこなう前提として、撰銭は立ち会いの上でおこなわれたことを指摘しておきたい。

【史料2】

- 一、能堯子^(公)入^(公)二御門跡へ補任料参貫文御取候、松梅院政所代御持候間、上様へ被召となり、かうしゆん所にて新承仕御見参候、政所殿御花子^(菓子)くきやう^(供養)ニすへ候、新承仕前者只ふちた^(縁高)か七枚^(也)、
- 一、我等も料足七百文取申候御法也、あく銭^(悪)にて候間能堯^(呼)よひゑり^(獲)申候也、

【史料2】は、『目代日記』永禄五年（一五六二）一〇月日条で、「入公」補任料に関する記述である。^⑩これによれば、曼殊院門跡は能堯子の「入公」の補任料として三貫文を受け取るようになっていて、政所代であった松梅院を曼殊院門跡のところへ招いていること、「かうしゆん」の所に新承仕が見参したこと、目代も得分として七〇〇文を受け取るようになっていたが、悪銭であったため能堯を呼び出し撰銭していることがわかる。こ

こでの「入公」とは宮仕衆中へ加入することで、新承仕の親もしくはその関係者が、曼殊院門跡に補任料三貫文、目代に得分七〇〇文を支払うことが取り決められていた。⁽¹⁾

ここで注目したいのは、目代が能堯を呼び出していることである。能堯が子の「入公」の得分を目代に支払っており、ここでは能堯が支払人で目代が受取人であったことがわかる。また、目代は能堯を呼び出した後に撰銭しており、目代が能堯を呼び出したのは撰銭をおこなうためであったと考えられる。受取人(目代)と支払人(能堯)が立ち会いの上で撰銭をおこなったのである。いうなれば、撰銭は受取人と支払人の間で立ち会う場、つまり銭貨を区別する場を設けておこなわれたのである。

実は受取人と支払人が立ち会いの上で撰銭したことが重要な意味を持っている。なぜならば、撰銭は受取人と支払人が接触しなければ成立しないのである。

【史料3】

長橋へ可参之由候間、朝飯以後参、来四月御懺法講之御用夏之御直衣被織候了、様體上中下之分、折紙相調候て持参、中之分可申付之由候了、則井上召寄申付候了、御たけ七丈七尺、御文^三重^菱、百七十文きれ也、御手付三百疋被出候^(間カ)、先二貫七百文渡候了、悪銭之間請取候ましき由申候、又長橋にはかへられ候ましき由候間、種々問答候、やうく百疋えらせ候了、

【史料3】は、『言継卿記』享祿五年(一五三二)二月一二日条で、懺法講の夏直衣の費用に関する内容が記されている。⁽²⁾これによれば、山科言継は長橋局から受け取った「御手付」三〇〇疋(三貫文)のうち二貫七〇〇文を井上に渡したところ、井上は悪銭のため受け取りを拒否し、長橋局からも銭貨の交換を拒まれたため、言継は井上との間で「問答」をおこない、その結果、一〇〇疋(二貫文)を撰銭したことがわかる。「御手付」は長橋局から山科言継に御服調進の費用として支払われたもので、山科言継は井上に織り代を「御手付」から支払ったものと思われる。また、「又長橋にはかへられ候ましき由候間」とあることからみて、言継は長橋局から預かつ

た「御手付」に悪銭が含まれていたことを了承していた可能性もある。

ここで注目されるのは、受取人（井上）と支払人（山科言継）の間で撰銭をめぐる「問答」がおこなわれていることである。撰銭をめぐる「問答」は、通用する銭貨の認識が受取人と支払人の間で異なるために発生する。そのため、銭貨を授受するには、その認識の差をうめる必要がある、受取人と支払人の間で銭貨を具体的に精銭と悪銭とに区別するのである。つまり、受取人と支払人の間では銭貨の授受ごとに精銭と悪銭を線引きする必要がある、そのたびに合意する必要があった。撰銭は受取人と支払人の「問答」による合意なしには成立しないのである。

こうしたことは、つぎの史料からも推測できる。

【史料4】

一、舞楽人御訪暮々貳千疋被渡之、雖然悪銭之間不請取之、雖加種々問答、移刻及子刻、然者明日此内貳百疋可替之由申調了、

【史料4】は、『言継卿記』永禄二年（一五五九）正月一六日条で、踏歌の節会での路銭に関する内容が記されている。⁽¹³⁾ 山科言継は永禄二年（一五五九）正月八日に樂奉行に補任されており、⁽¹⁴⁾ 路銭の支払いを奉行する役目であった。また、路銭の額は永禄二年（一五五九）正月一〇日に二〇〇〇疋（二〇貫文）と定められた。⁽¹⁵⁾ そして【史料4】から、山科言継は舞楽人に路銭二〇〇〇疋（二〇貫文）を渡したが、舞楽人は悪銭であるため請取を拒否し、山科言継と舞楽人の間で「問答」があり、その結果二〇〇〇疋（二〇貫文）のうち二〇〇〇疋（二貫文）を替えることを合意している。この「問答」は「子刻」まで及んでおり、時間を要していたことがうかがえる。この事例からも、撰銭が受取人と支払人の「問答」による合意で成立しているのは明らかであろう。⁽¹⁶⁾

以上のように、撰銭が成立するまでの過程をみてきた。撰銭は受取人と支払人の「問答」による合意で成立し、その結果、銭貨は受容されるものとされないものに分別される。一旦決まった結果は、覆されることなく、受

取人・支払人ともそれに従っていた。銭貨の状態は良いものから悪いものまで連続しており、精銭と悪銭に区別するには曖昧な部分が存在した。撰銭はそうした銭貨の範疇分けと理解できるのである。

第二節 悪銭受領の対処

前節において、撰銭が受取人と支払人の問答による合意で成立することは明らかとなったが、それでは、悪銭を受け取った場合、どのような対処がおこなわれていたのであろうか。悪銭を受け取った場合の対処は史料上から二通り確認できる。一つは悪銭を替える行為（「悪銭替」）で、もう一つは悪銭を売買する行為（「悪銭売買」）である。ここでは、「悪銭替」と「悪銭売買」について検討し、その仕組みを明らかにしていく。

1 「悪銭替」の仕組み

悪銭を受け取った場合、第一の対処の仕方が「悪銭替」である。これはどのような行為であろうか。

【史料5】

一、悪銭替事、

先日、乗喜、河原城料足内、悪銭二貫三百文給之、悪銭可替進之由申、而二貫三百文、悉可進之条、不便歟、仍一貫之内五分一分、可被免之、仍二貫三百文内、四百六十文可有御免歟云々、

【史料5】は、『東寺廿一口供僧方評定引付』応永一二年（一四〇五）四月二日条⁽¹⁷⁾で、「悪銭替」の比較的早い事例である。これによれば、東寺納所の乗喜（受取人）が大和国河原城荘の料足のなかに混在した悪銭二貫三〇〇文の取り替えを東寺側に進言している。また、悪銭二貫三〇〇文のうち四六〇文は東寺側が「不便」を理由に免除しており、悪銭一貫八四〇文を支払人に返却したことが推測できる。ここでの支払人が誰であるかはわからないが、ともあれ悪銭を受け取った場合、受取人は支払人に悪銭を返却しているのである。

それでは、悪銭は支払人に返却されたあと、どのような過程をたどるのであるのか。

例えば、『教言卿記』応永一三年（一四〇六）五月六日条には「一、御月宛到、但悪銭不足可撰云々」とあり、山科教言が御服所の「御月宛」のなかに混在した悪銭を「善銭」（精銭）に替えることを要求している。⁽¹⁸⁾同七日条には、「一、御月宛取替善銭可致沙汰之由申之、^判判目出」とあり、翌日に「善銭」（精銭）が山科教言のもとに届いた。⁽¹⁹⁾「御月宛」とは、御服調進する山科家に朝廷から御服調進の費用として毎月支払われたものである。⁽²⁰⁾なお、ここでは銭貨の受取人が山科教言で、支払人が朝廷であった。

また、『実隆公記』大永六年（一五二六）二月一日条には、「苧公事千六百疋到来、精撰不足之間、未遣請取、^{相残并二貫也}」とあり、三条西実隆が苧公事一六〇〇疋（一六貫文）を「精撰」したが、精銭不足により受け取りを拒否した例が見出せる。⁽²¹⁾同一二日条には、「苧公事五百疋到来、悪銭替同到来、昨日貳十一貫請取遣之、残廿七貫也、其趣以藤次郎申遣處、種々又有申旨、重而可申遣也」とあり、翌日に苧公事五〇〇疋（五貫文）とともに、「悪銭替」として銭貨が届き、合計二貫文を受け取っている。⁽²²⁾

右の事例から、受取人が支払人に悪銭を返却したあと、支払人から代わりの銭貨が届く過程をたどっていたことがいえるであろう。ただし、悪銭を返却してから代わりの銭貨が届くまでの期間が右の事例のように翌日とは限らず長い期間を要した事例もある。

『実隆公記』大永三年（一五二三）二月八日条には、「金光院悪物百疋被返之」とあり、金光院良秀が三条西実隆に「悪物」一〇〇疋（一貫文）を返却している。⁽²³⁾同四年（一五二四）正月九日条には「幸遵傳達之間貳ヶ遣之了、此内百疋遣金光院、去年悪物替也、悉返弁了」とあり、三条西実隆が般舟三昧院の幸遵に「二ヶ」（二貫文）を渡して、このうち一〇〇疋（一貫文）を金光院良秀に「去年悪銭替」として「返弁」している。⁽²⁴⁾ここにみえる「去年悪物替」が、「金光院悪物百疋被返之」に対応しており、金光院良秀が三条西実隆に返却した「悪物」の代わりの銭貨を指すことが判明する。すなわち、三条西実隆は大永三年（一五二三）二月八日に金光院良秀から「悪

物」が返却され、翌年の大永四年（一五二四）正月九日に「悪物」の代わりの銭貨を金光院良秀に届けているのである。このように、悪銭の返却から代わりの銭貨が届くまで二ヵ月余りの期間を要することもあった。

さらに、「悪銭替」の過程を具体化するために、播磨国小宅荘に関する請取状を検討してみよう。

【史料6】

請取申料足^{（之カ）}□事

合貳貫文者、

此内百文丹波せき
ひき取候、又つと一請取申候、

（異筆）
「百文悪銭、此分も不足候」

右、所請取申之状如件、

文明十年十二月廿六日

納所
宗善（花押）

小宅政所殿

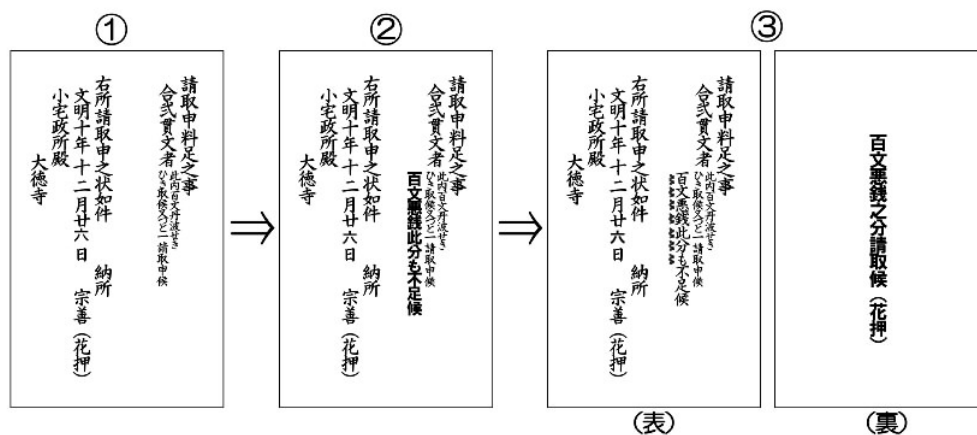
大徳寺

（裏書）○異筆部分ノ裏ニアリ

「百文悪銭之分請取候（花押）」
（宗善）

【史料6】は文明一〇年（一四七八）十二月二六日付、播磨国小宅荘料足請取状^{（25）}で、徳禅寺の納所である宗善^{（26）}が播磨国小宅荘政所から二貫文を受け取ったことを示すものである。請取状には、「百文悪銭、此分も不足候」と宗善とは異なる筆で記されており、「百文悪銭、此分」は見せ消ちとなっている。また、異筆部分の裏には、「百文悪銭之分請取候」とあり、そこには宗善の花押が据えられている。表の文言からは一〇〇文が悪銭であったこと、裏の文言からは大体の一〇〇文を受け取ったことがわかる。これらの文言は、請取状が作成した段階では、記されていなかったと考えられる。すなわち、銭貨を受領するさいに、文言が追筆されたのである。

請取状の追筆過程



【図1】 請取状の追筆過程

【図1】は請取状の追筆過程を示したものである。①は請取状が作成された段階で、二貫文を受け取ったという内容で作成されていることがわかる。この段階では、宗善は錢貨を受け取っていないと考えられる。②は錢貨二貫文を受け取ったが、撰錢を行って悪錢一〇〇文を返却した段階である。請取状には「百文悪錢此分も不足候」と書き込まれ、請取状は悪錢とともに渡されたと考えられる。③は小宅政所側が悪錢一〇〇文の代替の錢貨と請取状を徳禪寺に送って、宗善が「百文悪錢、此分」の部分の消して、「百文悪錢之分請取候(花押)」と書き込んだ段階である。この文言は「百文悪錢、此分も不足候」という文言の裏に書かれている。これは、表の文言を消した上で、花押を据えることによって、表の文言を閉じこめる意味があったのかもしれない。この請取状の検討から、悪錢が返却される時と代替の錢貨が届く時に段階差があったことは明らかだろう。

以上、「悪錢替」に関する史料の検討してきたが、「悪錢替」の過程を示したのが【図2】である。すなわち、受取人が支払人に悪錢を返却もしくは受け取りを拒否し、精錢との取り替えを要求し、後日支払人より精錢が届く過程である。悪錢の返却から代わりの錢貨が届くまでは翌日や二ヶ月と様々で

「悪銭替」概念図



【図2】 悪銭替の概念図

ある。また、「悪銭替」じたいは一五世紀初期から確認することができ、一六世紀にも史料上に散見することから、「悪銭替」は一五世紀から一六世紀にかけておこなわれたことが推測できよう⁽²⁷⁾。さらに、「悪銭替」は、あくまでも支払人と受取人とのやりとりであり、第三者が関与していない。これは後述する「悪銭売買」と大きく異なる点である。

しかし、こうした「悪銭替」が滞りなく成立したかという問題が生じることはなく、実際の「悪銭替」の過程において、悪銭が混在することである。

【史料7】

十七日、(中略) 自護国悪孔方替二緡百五十片来、内又悪物八百五十片在之、壹緡三ヶ請取之由聽叫申也、

【史料7】は『鹿苑日録』天文一二年(一五四三)十一月一七日条で、護国院から「悪孔方替」として「二緡百五十片」(二貫一五〇文)が届いたが、そのうち再び「悪物」が「八百五十片」(八五〇文)あり、「壹緡三ヶ」(一貫三〇〇文)だけを受け取ったことがわかる。「悪孔方替」は、悪銭の代わりの銭貨であり、以前に悪銭を返却したことが推測できる。また、「悪物」とされた八五〇文は再び支払人に返却され、代わり

の錢貨が要求されたと考えられる。

それでは、なぜ精錢の中に悪錢が混在するのであるのか。それにはつぎの二つの場合が想定できる。一つは支払人が悪錢と知りながら精錢に混ぜた場合である。この場合は精錢支払いが前提で、支払人は不正を行おうとしている。もう一つは支払人が悪錢とは知らずに使用とした場合であり、すなわち悪錢が混入してしまった場合である。その場合は、悪錢として認識していないか、もしくは一見して判別できない（撰錢できる人がいない）であろう。

精錢と悪錢の区別は、その曖昧な境界部分で判断がゆれ動くのである。このことは、悪錢というものが時期や地域によって異なっていることを示唆している。

2 「悪錢売買」の仕組み

悪錢を受け取った場合、第二の対処の仕方は「悪錢売買」である。そもそも「悪錢売買」とはどのような行為であろうか。ここでは越前国を事例としてみてみよう。

【史料8】

〔辰歳〕（増長寺） 宗才ヨリ鹽噌料之注文并如意・滴分〕（滴庫軒）

永禄十一辰歳分二上国衛米納分、阿波賀三比屋所ニテ

十一月廿五日 貳斗 上殿御分 二郎衛門弁、納才之、

同日 壹石二斗 半田源左衛門尉分 掃門弁、納才之、

〇一月廿八日 六斗 半田源左衛門尉分 彦衛門弁、納才之、

〔月廿五日〕 九升二合 高源院分 大郎二郎弁、納才之、

同日 七斗二升 高源院分 兵衛弁、納才之、

第2章 「撰銭」の仕組み

同日	壹石一斗七升六合	同分	同日	与八弁、	納才之、
	四斗二升	高源院分		彦八弁	納才之、
同日	九升二合	高源院分	同日	大郎衛門弁、	納才之、
同日	六斗二升	高源院分	同日	彦九郎弁、	納才之、
一日	壹石四斗四升		同日	桑山源右衛門尉方弁、	納才之、
同日	六斗	新保式部分	同日	甚二郎弁、	納才之、
同日	五斗	同分	同日	大郎衛門弁、	納才之、
一月廿九日	壹石二斗	同分	一月廿九日	甚二郎弁、	納才之、
同日	七斗三升		同日	大郎衛門弁、	納才之、
已上九石五斗九升					
一月十八日	五斗	新保式部丞方分	同日	五斗七升、	大郎□門弁、 (衛)
	彦九郎弁、				
	三石六斗三升	太田新左衛門尉弁、		五斗二升、	同弁、
	六石六斗二升、	丹治五郎左衛門弁、			
十二月十八日	壹石八斗六升七合七勺、	寺尾方弁、	同日	参斗六升	小三郎弁、
同日	貳斗四升	甚二郎弁、	同日	参斗	六衛門弁、
同日	参斗六升	双衛門弁、	同日		
一日	参斗参升三合三勺、	乙部新兵衛方弁、	同日		
同日	貳斗八升六合、	源五郎弁	同日	六斗五升	丹治五郎左衛門尉弁、
十二月廿二日	壹石一斗八升、	太田新左衛門尉弁、			
一月廿四日	四石九斗四升、	太田新左衛門尉弁、			

十一月廿九日
壹石九斗八升、桑山源左衛門尉弁、

已上

壹石七斗 新保式部分 源兵衛弁、
参斗 川嶋殿分 寺尾方弁、未進、

已上卅五石九斗二升七合

九斗二合、年々未進分納之、

并卅六石八斗二升九合宗功一文字升懸而、廿七石九斗八升 此下行之分

石、宗才算用不足二合力分、五斗、三比屋藏替、不使、

残而十七石四斗九升、石別一貫八百文充、

此代卅壹貫四百八拾二文

壹貫四百五拾文 惡錢四貫五百文、宗怡御上使之時預置候、賣代三文立、

并卅二貫九百卅四文、此之内綿十六把卅二貫文、壹把二貫文充買之、
残而九百卅四文、宗才預申分、

○委私ニ申候、此代ハ来便ニ可上候也、才敷ハツヲ取置候、

志原藏滴凍軒分

五石五斗辰歳分
五斗、毎年土免
八斗、當年分免
此之内四石貳斗、天祥寺納升ニテ福松ノ升ニ懸而、三石八斗二升二合、
石別壹貫八百文、阿波賀市、和六貫八百七十九貫申候也、

六百卅四文 永禄十一辰歳、宗怡上使之時、惡錢二貫百四十三文預置候、三文立ニ賣之、

八百文 同辰歳分志原之地子銭一貫二百文御座候ヲ、縄ヲ畠ニアテラレ、四百文土免也、

并八貫三百十三文、綿四〔把脱〕八貫上申候也、此之内三百十三文宗才預申也、

春近郷拾貫文、如意庵分

拾貫文、此之内御五貫文、綿二把半、二百五十目、残五貫文者悪銭御座候間、御左右次第調可申候也、

（永禄十二年）
十一月十八日

宗才（花押）

當庵

御納所禪師

参

【史料8】は一月一日付、越前国二上国衙等収納算用の注文⁽²⁹⁾で、年代としては永禄一二年（一五六九）と推測される。これは永禄一二年（一五六八）の二上国衙及び志原蔵滴凍軒、如意庵春近郷の年貢収納が確認できる史料で、【表1】は二上国衙及び志原蔵滴凍軒、如意庵春近郷の年貢収納過程を示したものである。

①二上国衙では、収納された年貢三五石九斗二升七合に年々の未進分九斗二合が納められ、合計三六石八斗二升九合となり、これを一文字升に懸けて二七石九斗八升となる。そこから「宗才算用不足二合力分」として一〇石を「三比屋蔵替、不使」として五斗を差し引き、一七石四斗九升となる。そして、これを銭貨三一貫四八二文に交換している。

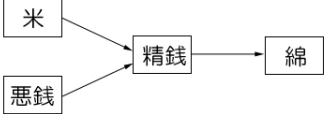
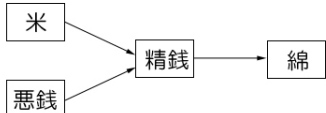
②悪銭四貫五〇〇文は「三文立」で精銭一貫四五〇文に交換している。

③①と②を合算して三二貫九三四文となる。

④三二貫九三四文のうち、三二貫文は綿一六把に交換し、残り九三四文は宗才が預かった。

⑤志原蔵滴凍軒では、五石五斗から「土免」五斗と「分免」八斗を差し引き四石二斗となる。これを福松の升到懸けて、三石八斗二升二合となる。そして、これを銭貨六貫八七九文に交換している。

【表 1】 二上国衙及び志原蔵滴凍軒、春近郷如意庵の年貢収納過程

<p>○二上国衙分</p> <p>① 35 石 9 斗 2 升 7 合 + 9 斗 2 合 = 36 石 8 斗 2 升 9 合 36 石 8 斗 2 升 9 合 → 27 石 9 斗 8 升 (一文字升) 27 石 9 斗 8 升 - 10 石 - 5 斗 ÷ 17 石 4 斗 9 升 17 石 4 斗 9 升 = 31 貫 482 文 (1 石 = 1 貫 800 文)</p> <p>② (精銭) 1 貫 450 文 ÷ 悪銭 4 貫 500 文 (「三文立」…精銭 1 に対する悪銭 3 の比価)</p> <p>③ 31 貫 482 文 + 1 貫 450 文 ÷ 32 貫 934 文 (① + ②)</p> <p>④ 32 貫文 = 綿 16 把 (1 把 = 2 貫文) 934 文…宗才が預かる</p>	 <pre> graph LR A[米] --> C[精銭] B[悪銭] --> C C --> D[綿] </pre>
<p>○志原蔵滴凍軒分</p> <p>⑤ 5 石 5 斗 - 5 斗 - 8 斗 = 4 石 2 斗 (天祥寺納升) 4 石 2 斗 (天祥寺納升) → 3 石 8 斗 2 升 2 合 (福松升) 3 石 8 斗 2 升 2 合 ÷ 6 貫 879 文 (1 石 = 1 貫 800 文)</p> <p>⑥ (精銭) 634 文 ÷ 悪銭 2 貫 143 文 (「三文立」…精銭 1 に対する悪銭 3 の比価)</p> <p>⑦ 1 貫 200 文 - 400 文 = 800 文</p> <p>⑧ 6 貫 879 文 + 634 文 + 800 文 = 8 貫 313 文 (⑤ + ⑥ + ⑦)</p> <p>⑨ 8 貫 = 綿 4 把 (1 把 = 2 貫文) 313 文…宗才が預かる</p>	 <pre> graph LR A[米] --> C[精銭] B[悪銭] --> C C --> D[綿] </pre>
<p>○春近郷如意庵分</p> <p>⑩ 5 貫文 = 綿 2 把半 (1 把 = 2 貫文) 5 貫文…悪銭</p>	

⑥ 悪銭二貫一四三文は「三文立」で精銭六三四文に交換している。

⑦ 地子銭は一貫二〇〇文で、そこから「土免」四〇〇文を差し引き八〇〇文となる。

⑧ ⑤と⑥と⑦を合算して八貫三十三文となる。

⑨ 八貫三十三文のうち、八貫文は綿四把に交換し、残り三十三文は宗才が預かった。

⑩ 如意庵領春近郷では、一〇貫文を受け取ったが、そのうち精銭が五貫文で、悪銭が五貫文であった。精銭五貫文は綿二把半に交換している。

このように、二上国衙及び志原蔵滴凍軒では米や悪銭を精銭に交換し、その精銭を綿に交換したこと、如意庵春近郷では精銭を綿に交換したことがわかる。米と銭貨の比価は一石＝一貫八〇〇文で、綿と銭貨の比価は一把＝二貫文であった。

ここで注目したいのは、悪銭が精銭に交換されていることである。例えば、二上国衙の場合では悪銭四貫五〇〇文が精銭一貫四五〇文に、また志原蔵滴凍軒の場合では悪銭二貫一四三文が精銭六三四文に交換されている。そして、「売代三文立」とあるように、悪銭を「三文立」で売却している。「文立」とは精銭と悪銭の比価を意味しており、⁽³⁰⁾「三文立」は精銭と悪銭の比価が一对三（精銭と悪銭の比価は精銭一に対して悪銭の個数の比で表示する）であったことを示す。また、受取人と悪銭を交換したのは支払人ではない第三者と考えられる。すなわち、受取人は支払人に悪銭を返却するのではなく、第三者に悪銭を売却し精銭を獲得しているのである。「悪銭売買」が成立するには、悪銭の購入者が存在していたこと、精銭と悪銭の間に比価が存在していたことが前提になる。これらは「悪銭売買」の成立に必要な要素と考えられる。

まず、悪銭の購入者の問題を検討する。「悪銭売買」は悪銭の売却者と購入者が存在して成立するが、それでは、悪銭の購入者はどのような者であろうか。

【史料9】

(折封ウハ書)

「(異筆)巳ノ十一廿六日
到来、」 深岳寺納所

如意庵御納所禪師侍者御中

宗才

「――」
(端裏切封)

態一筆令啓上候、仍春近郷末平名御本役、石田彦左衛門尉頼入、重馳走以請取申候、五貫文綿二把半買調候、
残五貫文者悪銭御座候間、商人方へも御知人候者、何方へ成共渡可申候、如去年之賣候て成共可調候歟、依
御左右其心得可仕候、恐惶頓首、

十一月十八日

宗才(花押)

如意庵

御納所禪師

侍者御中

【史料9】は、十一月一八日付、宗才が如意庵納所禪師に宛てた書状⁽³¹⁾で、永禄一二年(一五六九)と推測される。⁽³²⁾これによると、越前国春近郷末平名御本役一〇貫文のうち、五貫文を綿二把半に交換し、残り五貫文が悪銭であったため、宗才が如意庵側に悪銭の対処を尋ねていることがわかる。

受取人は、支払人に悪銭を返却しても精銭を得るのが困難な場合もあると考えられる。荘園の収納のような場合、仮に百姓に「悪銭替」を要求したとしても、それが実現する可能性は低いであろう。また、そうした要求をめぐり、交渉が難航することが予想される。そうした場合、受取人は「悪銭替」とは別の方法、つまり「悪銭売買」という対処を選択したのではないか。

ここでも注目できるのは、宗才が如意庵側に悪銭を「商人」へ売却することを提示したことである。すなわち、悪銭を購入する「商人」が存在したのである。また、前年にも悪銭を売却していたことがうかがえ、「悪銭売買」

が恒常的におこなわれていたことが推測できる。

それでは、なぜ「商人」は悪銭を購入したのであろうか。この問題を考える上で参考になるのが、永禄一三年（一五七〇）三月一日付の如意庵領越前春近郷貢銭納下日記である。⁽³³⁾これは越前国春近郷から「永禄十一辰秋分、同十二巳到来」の年貢銭に関する収支について記したものである。この史料で注目したいのは、「国銭五貫文分之由、宗才送状在之」という記載である。【史料9】では「悪銭五貫文」に対して、如意庵領越前春近郷貢銭納下日記では「国銭五貫文」とあるように、「悪銭」と「国銭」と認識の差異があるものの、同一の銭貨を指していることがわかる。

本多博之は、「出現した銭貨表現は地域によってさまざまであるが、例えば豊前国の場合、良質で基準銭貨の性格を持った「清料」のほか、その対立概念としての「悪銭」や「並銭」、さらには通用範囲（地域）に因む「国銭」や「国並銭」といった銭貨も登場し、これらすべてが個々の価値をもつて流通・通用していた」と指摘している。⁽³⁴⁾越前国でもこの「国銭」のほかに「並銭」という銭貨表現が確認でき、⁽³⁵⁾豊前国と同様に「悪銭」「並銭」「国銭」が流通・通用していたと考えられる。

したがって、「商人」が悪銭を購入したのは悪銭を通貨として商品の買い付けなどに使用するためと推測でき、鑄潰して銅材をとるのではないであろう。悪銭を購入する「商人」は悪銭の使用者として大きな役割を果たしたと評価できる。悪銭は個別の取引で排除される場合もあるが、流通界にとどまり排除されることはないのである。つぎに精銭と悪銭の比価の問題を検討する。

【史料10】

（折封ウハ書）

「（裏筆）
左ノ二月十一日ニ
眞珠ヨリ到来候」

如意庵

従深岳寺

御納所禪師

参侍司下

宗才

〔端裏切封〕

新春之御慶雖事旧候、猶以不可有盡期候、仍春近末平名本役請取申候、悪銭候間、五貫文充石別買調米置候、国中代ニテ賣買者、壹貫文を五百、百文を五拾ニ調候、去年上候物不下前調候、御返事次第調替、龍門寺之内徳桂庵へ、渡可申候、米にて可請取付而者、渡可申候、可御心安候、當年扇子中うけにて新者存候間、調替申候、豊原寺明王院江被遣候間、如此候、拙者方へも扇子被下候、過分忝存計候、罷上候て御礼可申入候、無如在候、恐惶頓首、

二月三日

宗才（花押）

如意庵

御納所禪師

参侍司下

【史料10】は、二月三日付の深岳寺の宗才が如意庵側に宛てた書状^{③⑥}で、年代については、永禄一三年（一五七〇）と推測される。^{③⑦}これによれば、越前国春近郷末平名御本役の悪銭五貫文を精銭に交換した上で米に交換していることがわかる。また、「国中代ニテ賣買者、壹貫文を五百、百文を五拾ニ調候」とみえ、「国中」においては、悪銭一貫文を精銭五〇〇文、悪銭一〇〇文を精銭五〇文に交換することが判明する。つまり、精銭と悪銭の比価が精銭一对悪銭二であることが確認でき、【史料8】にみえる精銭一对悪銭三とは異なる。これは、同一地域内で二種類の比価が存在したことを意味しているだろう。

それでは、同一地域内に二種類の比価が存在することをどのように理解すべきであろうか。この問題は精銭と悪銭の比価がどのように決定されるかが重要であり、「商人」が同一か異なるかで解釈が分かれるところである。

「悪銭売買」概念図



【図3】 悪銭売買の概念図

う。「商人」が同一の場合は悪銭の売却者と「商人」（購入者）の間でその場の取引ごとに決定したと考えられる。一方、「商人」が異なる場合は商人の集団・組織や商品ごとに比価が設定されていた可能性がある。ここでの「商人」が同一か異なるかは、史料上では判明せず今後の課題となるが、いずれにせよ精銭と悪銭の比価が簡単な正数比であることから、金属成分・品位によって比価が決まっていなかったといえよう。すなわち、精銭と悪銭の比価は経済的法則に基づいたものではなく、当該期の商慣行の一つと考えることが可能であろう。

以上、「悪銭売買」について検討し、その仕組みを明らかにしてきた。

【図3】は「悪銭売買」の過程を図示したものである。すなわち、受取人は支払人から悪銭を受け取ったさい、支払人に悪銭を返却するのではなく、第三者に悪銭を売却して精銭を獲得するという過程である。悪銭を購入する第三者は「商人」であり、「商人」は購入した悪銭を通貨として商品の買い付けなどに使用していたと考えられ、悪銭の使用者として大きな役割を果たしていた。「悪銭売買」で使用した比価は精銭一对悪銭二や精銭一对悪銭三といった簡単な正数値で

あった。このことは、精銭と悪銭の比価が錢貨の素材価値によって決まるものではないことを示唆しているだろう。また、比価は固定されており、市場経済のような変動する相場でもなかった。それは、交換のためのルールであり、いわば商慣行のようなものであったのである。

おわりに

以上、撰銭の問題を検討してきた。最後に、本章で明らかになったことをまとめておきたい。

撰銭とは錢貨を区別する行為である。これは一五世紀前半から確認でき、撰銭を職掌とする者も存在した。撰銭の手順は、受取人と支払人が立ち会いの上で、両者の「問答」による合意で成立していた。その結果、錢貨は受容されるものとされないものに分別され、一旦決まった結果は覆されることはなく、両者ともそれに従っていた。

一方、悪銭を受け取った場合の対処の仕方は二通りあり、一つは「悪銭替」で、もう一つは「悪銭売買」であった。「悪銭替」は悪銭を替える行為で、受取人が支払人に悪銭を返却もしくは受け取りを拒否し、精銭との取り替えを要求し、後日支払人より精銭が届く過程である。「悪銭売買」は悪銭を売買する行為で、受取人が支払人に悪銭を返却するのではなく、第三者に悪銭を売却して精銭を獲得する過程である。悪銭を購入する第三者は「商人」であり、「商人」は悪銭を通貨として商品の買い付けなどに使用していた。

本章で明らかにしたように、悪銭の使用される場面のあることが確証される以上、流通界から排除されたということはできない。悪銭は「悪銭」という通貨として、精銭とは異なる流通の場を持っていた。すなわち、悪銭と精銭は異種の貨幣として異なる商品流通を媒介するものである。異なる流通の場とは、種類を異にする商品に対応するものか、商人の集団・組織に対応するものかは今のところ明らかにできないが、黒田明伸のいう支払共同体⁽³⁸⁾の違ひによるということは可能であろう。異なる支払共同体が接触するところで、悪銭と精銭は交換され、

交換されるときに比価が立つ。精銭と悪銭の比価は、銭貨の素材価値によって決まるものではなかった。精銭一対悪銭二や精銭一対悪銭三と簡単な正数比からもわかるように、交換のためのルールであり、市場経済のような変動する相場ではない。

従来、悪銭が流通界から排除されるという認識がある一方、悪銭と精銭の比価の存在が知られていることは、根幹から矛盾する事柄である。比価の存在じたい、悪銭の使用が前提とされるものである。ただし、悪銭の通用する場は、狭い可能性がある。これに対して精銭は広いと考えるのが自然である。

以上の議論は、撰銭とは何かという一点に絞ったものである。現実の歴史過程を再現するには、時期や地域による違いなど様々な条件を加えて考える必要がある。

註

- (1) 代表的なものとして、足立啓二「中国からみた日本貨幣史の二・三の問題」(同『明清中国の経済構造』汲古書院、二〇一二年、初出一九九一年)、「東アジアにおける銭貨の流通」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅲ海上の海』東京大学出版会、一九九二年)、浦長瀬隆『中近世日本貨幣流通史―取引手段の変化と要因―』(勁草書房、二〇〇一年)、大田由紀夫「一五・一六世紀東アジアにおける銭貨流通―日本・中国を中心として―」(人文学科論集四八号〔鹿児島大学法文学部Ⅱ編〕一九九八年)、川戸貴史「中世後期の流通構造と撰銭」(同『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館、二〇〇八年)、黒田明伸「東アジア貨幣史の中の中世後期日本」(鈴木公雄編『貨幣の地域史―中世から近世へ―』岩波書店、二〇〇七年)、黒田基樹「戦国大名の撰銭対策とその背景」(同『中近世移行期の大名権力と村落』校倉書房、二〇〇三年)、桜井英治「銭貨のダイナミズム」(鈴木公雄編『貨幣の地域史―中世から近世へ―』岩波書店、二〇〇七年)、高

木久史『日本中世貨幣史論』（校倉書房、二〇一〇年）、千枝大志『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』（岩田書院、二〇一一年）、中島圭一「日本の中世貨幣と国家」（歴史学研究会編『越境する貨幣』青木書店、一九九九年、初出一九九八年）、橋本雄「撰銭令と列島内外の銭貨流通―銭の道―古琉球を位置づける試み―」（『出土銭貨』九号、一九九八年）、本多博之『戦国織豊期の貨幣と石高制』（吉川弘文館、二〇〇六年）などがある。

（2） 前掲註（1）桜井英治論文では「一五世紀段階の京都やその周辺では、「悪銭」は基本的に排除の対象であった。特定の銭種のみを愛好して、それ以外の銭種は受け取りを拒否するという二者択一の撰銭行為がおこなわれていたのである。ところが一六世紀段階になると、「悪銭」を流通から完全に排除してしまうことは少なくなり、代わって精銭よりも低い価値を与えたうえで通用させる慣行が一般化した」と説明される。

（3） 松延康隆「銭と貨幣の観念―鎌倉期における貨幣機能の変化について―」（網野善彦・塚本学・富田登編『列島の文化史六』日本エディタースクール出版部、一九八九年）、大田由紀夫「一二―一五世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布―日本・中国を中心として―」（『社会経済史学』六一巻二号、一九九五年）を参照。

（4） 『八坂神社文書』三八一号（八坂神社社務所編『八坂神社文書』上巻、臨川書店、一九九四年）。

（5） 馬上料足（馬上役）については、瀬田勝哉「中世の祇園御霊会―大政所御旅所と馬上役制―」（同『洛中洛外の群像―失われた中世京都―』平凡社、一九九四年、原題「中世祇園会の一考察―馬上役制をめぐって―」、初出一九七九年）、河内将芳『中世京都の都市と宗教』（思文閣出版、二〇〇六年）を参照。

（6） 瀬田勝哉前掲註（4）論文、二三八頁。

（7） 『八坂神社文書』三九七号・四〇三号・四二二号・四五一号（八坂神社社務所編『増補八坂神社文書』上巻、臨川書店、一九九四年）。

（8） 千枝大志氏によれば、伊勢地域では永享年間から撰銭がおこなわれたことが確認できるとされる。なお、

伊勢地域における貨幣流通については、千枝大志前掲註（1）著書を参照されたい。

（9） ルイス・フロイス（岡田章雄訳注）『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波書店、一九九一年）。

（10） 「目代慶世引付」永禄五年（一五六二）一〇月日条（北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年）。

（11） 北野社の宮仕については、高橋大樹「中世北野社御供所八嶋屋と西京」（日次紀事研究会編『年中行事論叢―『日次紀事』からの出発―』岩田書院、二〇一〇年）、細川涼一「中世の北野社と宮仕沙汰承仕家―京都橘女子大学所蔵「北野社宮仕沙汰承仕家文書」の補任状から―」（同『日本中世の社会と寺社』思文閣出版、二〇一三年）、三枝暁子「中世寺社の公人について」（同『比叡山と室町幕府―寺社と武家の京都支配』東京大学出版会、二〇一一年）を参照。

（12） 『言継卿記』享禄五年（一五三二）二月一二日条（統群書類従完成会）。

（13） 『言継卿記』永禄二年（一五五九）正月一六日条（統群書類従完成会）。

（14） 『御湯殿上日記』永禄二年（一五五九）正月八日条（『統群書類従・補遺三』統群書類従完成会）、『言継卿記』永禄二年（一五五九）正月九日条（統群書類従完成会）。

（15） 『言継卿記』永禄二年（一五五九）正月一〇日条（統群書類従完成会）。

（16） 返却された悪銭であるが、翌日に「忠宗来、昨日御訪之悪銭替、又今日酒肴代之事申之、調遅々及申刻、種々令馳走、三条大納言太刀先遣之、明日可取替者也」とあるように、代替の銭貨が遅れていることがわかる（『言継卿記』永禄二年（一五五九）正月一七日条）。

（17） 『東寺廿一口供僧方評定引付』応永一二年（一四〇五）四月二日条（伊藤俊一・近藤俊彦・富田正弘編『東寺廿一口供僧方評定引付』思文閣出版、二〇〇二年）。

（18） 『教言卿記』応永一三年（一四〇六）五月六日条（『史料纂集』統群書類従完成会）。

- (19) 『教言卿記』 応永一三年（一四〇六）五月七日条（『史料纂集』続群書類従完成会）。
- (20) 菅原正子『中世公家の経済と文化』（吉川弘文館、一九九八年）を参照。
- (21) 『実隆公記』 大永六年（一五二六）二月一日条（続群書類従完成会）。
- (22) 『実隆公記』 大永六年（一五二六）二月二日条（続群書類従完成会）。
- (23) 『実隆公記』 大永三年（一五二三）一月八日条（続群書類従完成会）。
- (24) 『実隆公記』 大永四年（一五二四）正月九日条（続群書類従完成会）。
- (25) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』二九四五号。
- (26) 宗善は文明一二年（一四八〇）二月三日に五辻大宮見性寺寺領の田地を徳禅寺祠堂方に売り渡していることから、見性寺の関係者と考えられる（『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』六五六号）。
- (27) 従来の研究では、撰銭令が發布された一五世紀後半を悪銭の問題の画期とされる。しかし、「悪銭替」の過程が確認できる以上、実態的な面に関しては少なくとも一五世紀前半から考察する必要がある。
- (28) 『鹿苑日録』 天文一二年（一五四三）一月一七日条（続群書類従完成会）。
- (29) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』三三二号。
- (30) 精銭と悪銭との比価は、「文立」のほかに「相倍」や「和利」と表現される。「相倍」については、前掲註（1）高木著書を、「和利」については、前掲註（1）本多博之著書を参照されたい。
- (31) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』三〇四二号。
- (32) 『大日本古文書』は年代を天文一四年（一五四五）と比定している。しかし【史料8】に「春近郷拾貫文、如意庵分、拾貫文此之内五貫文、綿二把半、二百五十目、残五貫文者悪銭御座候間、御左右次第調可申候也」とあり、【史料9】と内容が合致している。したがって、年代としては永禄一二年（一五六九）と推測できる。

- (33) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』三〇五〇号。
- (34) 前掲註(1) 本多博之著書六六頁。
- (35) 「矢部宮秋家文書」三号(『福井県史 資料編六 中・近世四』)、「刀根春次郎家文書」五一号(『福井県史 資料編六 中・近世四』)など。なお、越前国の基準銭と通用銭については、高木久史「一六世紀後半越前における銭使用秩序の変容」(前掲註(1) 高木久史著書、第一部・第一章)を参照されたい。
- (36) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』三〇四三号。
- (37) 『大日本古文書』は年代を天文一五年(一五四六)と比定している。しかし、【史料9】が永禄一二年(一五六九)と推測できるため、【史料9】と関連する【史料10】は年代を永禄一三年(一五七〇)と推測できると推測できる。
- (38) 黒田明伸『貨幣システムの世界史―非対称性―をよむ―』(岩波書店、二〇〇三年)を参照。

第三章 錢貨に封を付けること

はじめに

前章では、撰銭の問題について、撰銭という行為そのものに注目し、その仕組みを明らかにしてきた。

撰銭は錢貨を区別する行為で、受取人と支払人が立ち会い、両者の合意により成立していた。その結果、錢貨は受容されるものとされないものに分別され、一度決まった結果は覆されることはなく、両者ともそれに従っていた。また、悪銭を受け取った場合の対処の仕方は「悪銭替」と「悪銭売買」があり、前者は悪銭を替える行為で、受取人が支払人に悪銭を返却もしくは受け取りを拒否し、精銭との取り替えを要求し、後日支払人より精銭が届く過程で、後者は悪銭を売買する行為で、受取人が支払人に悪銭を返却するのではなく、第三者に悪銭を売却して精銭を獲得する過程であった。その第三者は「商人」であり、「商人」は悪銭を通貨として商品の買い付けなどに使用していた。以上が前章において指摘した内容である。

しかし、ここでは、撰銭という行為の解明を主眼としたため、他の行為については論じることができなかった。撰銭の分析は、中世貨幣の様相の一端を垣間みることができるが、その分析だけでは中世貨幣の問題を説明したとはいえない。それを端的に示すのが、撰銭された錢貨が第三者にわたるとき、その信用を得ることができるか、という問題である。これは、撰銭の分析だけでは明らかにできないと考えられるが、当該期における貨幣の特質を錢貨使用の側面から理解するためには必要な課題の一つであろう。

そこで本章では、先の課題に迫るために、錢貨に封を付けるという行為について分析したい。これまで錢貨に封を付けるという行為は、論じられたことがなく、そもそもその行為したいあまり知られていない。したがって、

まずは錢貨に封を付けることに関する事例を検討し、その仕組みを明らかにする必要がある。その上で、その行為の歴史的背景を探ることによって、当該期における貨幣のありようを考えてみたい。こうした作業は、当該期における錢貨使用の実情の一端が明らかになるだけでなく、中世貨幣の理解の深化につながるだろう。

第一節 錢貨に封を付けること

第一節では、錢貨に封を付けるという行為に関する事例を取り上げ、その仕組みを明らかにする。

中世日本では、錢貨流通の浸透にともない、莊園の年貢納入方法として米などの現物で納入する現物納だけでなく、錢貨で納入する錢納も用いられるようになる。そして、錢貨が遠隔地の莊園から京都などの莊園領主（納入先）へ運送されることはよく知られている。^①

錢貨に封を付ける行為は、隔地間の年貢錢運送に見出すことができる。ここでは、大徳寺領小宅莊三職方の年貢錢運送を例として錢貨に封を付けるという行為をみていきたい。

まず、大徳寺による小宅莊三職方の経営についてみておきたい。^②小宅莊は播磨国揖東郡の莊園で、莊内は惣莊方と三職方（公文職・田所職・惣追捕使職）に分かれ混在していた。小宅莊三職方が大徳寺領として成立するのは、正中二年（一三二五）中御門経継が大徳寺に小宅莊三職方を寄進して以降である。^③小宅莊三職方は、後醍醐天皇から元徳二年（一三三〇）に安堵の綸旨が、^④建武元年（一三三四）に官宣旨が下され、^⑤大徳寺領として承認された。その後、所領をめぐり在地勢力の貞宗と争ったが、足利義詮が小宅莊三職方を大徳寺領として安堵したことにより、大徳寺の一円寺領となった。^⑥応仁・文明の乱以後は、赤松氏などの地域権力の侵攻により、度々その経営維持が危ぶまれたが、天文年間ごろまでは大徳寺による経営が確認でき、^⑦わずかな額面でありながら年貢錢が運送されていた。

こうした状況のなか、年貢錢運送において錢貨に封を付けるという行為が確認できる。

【史料1】

「(封紙捺封ウハ書)

三職政所

徳禅寺納所禅師

宗能」

(端裏切封)
「(墨引)」

當年分御年貢銭、只今五貫文運上申候、贈状別紙進候、料足封付候、慥御請取可在候、如何様、重而運上可申候事候、恐惶謹言、

十一月十四日

宗能(花押)

徳禅寺

納所禅師

【史料1】は、宗能が大徳寺塔頭の徳禅寺に宛てた十一月一日付けの書状である。⁽⁸⁾ 宗能は播磨国小宅荘の三職政所で、小宅荘の年貢を収納・運送することを担っていたと考えられる。年代は、延徳・明応年間に宗能の活動が確認できることから、⁽⁹⁾ その前後の時期のものと思われる。そして、宗能が年貢銭五貫文を運送するさいに、送進状を別紙で作成し、銭貨に封を付けたこと、確実に受領できる年貢銭の運送方法を徳禅寺側に尋ねていることがわかる。別紙に作成された送進状は、文面に封を付けたことを注記していたと推測され、⁽¹⁰⁾ 銭貨に封を付けたものとそうではないものとを区別し、書状・送進状といった状と封を付けた銭貨が一对になっていたと考えられる。その意味については後で改めて取り上げるが、宗能は年貢銭を運送するさいに、銭貨に封を付けて送進状をそえるという方法を用いており、【史料1】と同様の内容のものが他にも確認できることから、⁽¹¹⁾ その方法は恒常的に行われていたと考えられる。

では、銭貨に封を付ける行為は具体的にどのようなものであるのか。この問題を考える上で、次に名田荘の年

貢錢運送を検討する。

名田莊は若狭国遠敷郡の莊園である。名田莊の伝領は、複雑な経緯をたどり、南北朝期ごろに大徳寺塔頭徳禪寺領として一円寺領となった。^⑫ 南北朝期以降、名田莊は徳禪寺による直務支配であった。それは地域権力による度重なる侵攻がありながらも一五世紀末ごろまで続いた。しかし、一六世紀始めごろになると徳禪寺はその直務支配も困難となり、名田莊の年貢は若狭国守護武田氏が請け負うこととなる。そして、その請負額は年間五貫文とされた。次に掲げる史料は、若狭武田氏が名田莊年貢を請け負っていたころの年貢錢運送に関するものである。

【史料2】

(封紙捻封ウハ書)

「(異筆)
永正十七辰」

笑鷗院

拝復徳禪寺 侍衣閣下

宗運」

「(備表切封)
(墨引)」

就名田庄本役之儀、又次郎被差下、自御代官、如近年五貫文分ニ料足貳貫文・綿五把九十目被上進候、委細

又次郎可申入候、拙者封を付候て進覧候、此状之判にて可有候、但老眼之事候間、可為不同候哉、恐惶頓首、

十月廿四日

宗運(花押)

徳禪寺

侍衣禪師

【史料2】は一〇月二四日付、笑鷗院宗運が徳禪寺側に宛てた書状で、年代は永正一七年(一五二〇)とされる。これによれば、又次郎の名田莊への下向にともない、「御代官」から名田莊本役として五貫文分(錢貨二貫文・綿五把)が上進されたこと、「拙者」つまり笑鷗院宗運が錢貨に封を付けたので徳禪寺側にその確認を求めている

ること、錢貨の封が書状「判」と同一のものであるが、笑鵬院宗運じしんが老眼のため、同じでない可能性を示唆していることがわかる。ここでの「御代官」とは関連史料から中村七郎勝吉であることが判明する。⁽¹⁴⁾ 先述したように、当該期の名田莊年貢は若狭武田氏が請け負っていた。その武田氏は栗屋氏に年貢調達を任せ、栗屋氏被官中村氏が現地代官を務めていた。笑鵬院宗運は栗屋氏の一族で、徳禪寺側の連絡役を担っており、又次郎は徳禪寺の寺使として年貢収納のために下向したと考えられる。なお、年貢錢運送には「若狭屋」という商人が携わっていた。⁽¹⁵⁾

ここで注目したいのは、宗運が封を付けたものが書状の「判」と同一のものであると断り書きされていることである。ここから、錢貨に封を付けることは錢貨に「判」を据えることで、錢貨の「判」は宗運によって据えられたことが判明する。この場合の「判」とは書判つまり花押のことである。

では、この場合の花押にはどのような意味をもっていたのであろうか。佐藤進一によれば、花押は自分と他者を区別する機能をもつものとされる。⁽¹⁶⁾ したがって、花押は自分自身が封を付けた錢貨ということを具現化したものと理解できる。また、徳禪寺側は運送された錢貨を受け取ったさい、錢貨に据えられた花押と書状の花押を照合していたと推測される。先に書状・送進状といった状と封を付けた錢貨が一对になっていたことを述べたが、その意味は錢貨授受時に、符号の役割を担うためであった。これらのことから、据えられた花押は宗運が封を付けた錢貨ということを確認するだけでなく、その錢貨が名田莊年貢錢であることを証明する意味をもっていたと考えてよいだろう。

この流れを整理してみると、以下の通りとなる。まず、笑鵬院宗運が錢貨に花押を据える。次に笑鵬院宗運が錢貨に封を付けたという内容の書状を作成し、その書状に花押を据える。錢貨と書状は若狭国名田莊から京都徳禪寺に輸送される。そして、徳禪寺側は錢貨と書状との花押を照合した上で、錢貨と書状を受領するという流れである。これが名田莊年貢錢運送における一連の過程である。

このように、封を付けるという行為は具体的には花押を据える行為であったが、封じられた錢貨はどのような状態であろうか。まず参考となるのは、上賀茂の社頭月行事算用状である。これは上賀茂における「社頭」の収支を示したものであるが⁽¹⁷⁾。例えば、時代は下るものの、慶長一七年（一六一二）三月二八日付け社頭月行事算用状では錢貨の注記として「符ノまく」という文言が確認できることから、錢貨が包まれていた様子がうかがえる。

また、封じられた錢貨の形態についてはその詳細を知ることができないが、当該期の錢貨の形態についてはこれまでの発掘成果から知ることができる。例えば、中世の港町の遺跡として知られている草戸千軒町遺跡からは、約五〇〇枚の錢の塊や錢貨に括りつけてあった木簡などが出土している。前者の錢の塊は、「むしろ」や「こも」で包んだり、藁紐で縛っていたと推測できること、後者の木簡は、長方形の木片の上部を山形に削り、その下に両側から切込みを付けて紐を巻き付け、切込みの付根には擦痕が確認できること、さらに、木簡の銘文には「伍貫文、拾貫文のうち」とあり、その反対側に「まつのした」とその人物と思われる花押が据えていることが指摘されている⁽¹⁸⁾。

以上の点から推察すると、錢貨を紙や藁などで包み、その上から花押を据えたのであろうか。また、開封による改変を防ぐ方法として花押が据えられたと考えられる。いずれにせよ、封じられた錢貨は包まれたままの状態であつた、そのまゝが同一種類の貨幣として認識されていたことはいえるだろう。

ところで、錢貨に封を付けるという行為に関連する史料をみると、撰錢と関連する事項が確認できるが、これについては錢貨に封を付ける行為の歴史的背景と密接に関わってくるので、節を改めて論じることにした。

第二節 錢貨に封を付けることと悪錢問題

前節では、錢貨に封を付けるという行為をみてきた。錢貨に封を付ける行為は、錢貨そのものに封を付けるこ

とで、具体的には、錢貨に花押を据える行為である。封を付けた錢貨には、封を付けた者の書状や送進状が添えられ、錢貨と状は一对の関係にあった。錢貨の受取人は、錢貨と書状に据えられた花押を照合した上で受領していた。封じられた錢貨はそのまとまりに意味があり、その状態が同一種類の貨幣として認識されていた。

このように概観すると、一つの特徴を有していることに気づく。それは、隔地間の年貢錢運送のさいに、現地の年貢収納・送進担当者が錢貨に封を付けていることである。

では、なぜ現地の年貢収納・送進担当者が錢貨に封を付けているのであろうか。錢貨に封を付けることが行われた時期をみると、管見の限り、その行為が史料上で確認できるのは、一五世紀以降であり、それ以前においては確認できない。例えば、運送途中における錢貨の抜き取り防止という理由ならば、すでに年貢の錢納が普及していた一三・一四世紀ごろにはその形跡がなければならない。この問題を考える上で重要なことは、一五世紀以降における隔地間の年貢錢運送の状況や問題点、その歴史的背景を探ることであり、錢貨に封を付けるという行為は当該期の隔地間年貢錢運送における特有の問題が背景にあったと考えられる。ここではさらに、近江国三村莊を例に、一五世紀前半における隔地間の年貢錢運送の状況を検討していこう。

三村莊に関しては三村莊とその代官を詳細に分析した村井祐樹の研究がある。²⁰村井によれば、三村莊は京都宝莊嚴院の所領の一つで、平治元年（一一五九）閏五月に史料上に初めて見え、成立当初は三百石の所領であった。また、元徳二年（一一三三〇）に宝莊嚴院自体が東寺に寄進されるが、本家職のみが東寺のものとなったとされる。さらに、三村莊の年貢収集は地頭方＝守護方が現地を掌握し、東寺は年貢を得るのみであったが、独自に代官を任命して、守護方や地下との交渉に当たらせ、年貢を確保を図っており、代官請という形態を当初から採っていたと指摘されている。

ところで、三村莊の代官を勤めた者に宇野教林（讃岐房・慈恩寺讃州）という人物が存在する。宇野教林は六角氏の私寺である慈恩寺の坊官で、応永一五年（一四〇八）正月五日に亡くなった前任者の明義の跡を継いで、

同年四月一五日に代官就任が決定した⁽²¹⁾。そして、史料上からも宇野教林が年貢錢の運送に携わった状況が確認できる。

応永一六年（一四〇九）、代官の宇野教林は東寺宝莊嚴院方に年貢錢四一貫五〇〇文を四度に渡って東寺に送進している⁽²²⁾。送進状には錢貨の額面が表示されるが、その表示の下に和市が注記されていることから、現地で米を錢貨に交換した上で送進していることが考えられる。送進された年貢錢は支配状を作成した上で配分されたが、それは諸経費が除かれた上で、勸学会学頭・籠衆・奉行人・公文の得分となる。その得分は、勸学会学頭に八分の三、籠衆に八分の三、奉行衆に一六分の三、公文に一六分の一、の割合であった。代官の宇野教林は年末に算用状を作成し、東寺宝莊嚴院方に送っている⁽²³⁾。これによれば、宇野教林の得分が全体の五分一であったこと、倉付米が五斗で、伊庭との契約米が一〇石であったこと、「京進」した年貢錢が五一石九斗（代錢四一貫五〇〇文）であったことがわかる。また、「京進」した年貢錢と送進状の合計の額面は一致することから、応永一六年の年貢錢は滞りなく授受されたと考えられる。

以上の経過をまとめると、まず、年貢錢が近江国三村莊から東寺宝莊嚴院方に送られ、その年貢錢は諸経費を差し引いた残りを得分として勸学会学頭や籠衆などに配分される。そして、年末に代官の宇野教林が近江国三村莊年貢を算用するのである。

さて、以上が年貢錢運送の流れであるが、応永二十一年（一四一四）の年貢錢運送で悪錢問題が確認できる。

【史料3】

〔三村^{（備前ウハ書）}〕 「支配状応永廿一」 □一 十八

【史料3—1】（傍線は筆者加筆）

送進 三村庄御年貢代錢事

合拾貫文者、<sup>和市貫別
壹石貳斗五升宛</sup>

右、所送進之状如件、

応永廿一年十一月十六日 御代官教林（花押）

京（郷）□「」悪銭とて、けしからず御ゑらみ候事、あきうとも、なけき申候、御心へ候て、よき程二も候ハんをハ、めされ候て、可給候、

【史料3-2】

注進 三村庄御年貢事、

合十貫七百度者、此内七百度者
先度悪銭不足分

除

百五十文

仏御料足、且分

六貫二百文

五方除、半分定

一貫文

雑掌給分、且分

百五十文

門指給

以上七貫五百文

残 三貫二百文之内

両学頭御分（吉祥園院融然・観智院宗海）

一貫二百文

口別六百文

籠衆四口御分

一貫二百文

口別三百文

御奉行分（金蓮院泉淳）

六百文

公文分

二百文

右、支配状如件、

応永廿一年十一月十八日

公文法橋（花押）

【史料4】

〔三村庄年貢支配状^{（端裏ウハ書）} 応永廿一 十二 廿九〕

【史料4―1】

送進 三村庄用米事、

合壺石伍斗 代錢壺貫參百陸拾文者

応永十八年未進「^{〇書き直}残」分

右、所送進之状如件、

応永廿一年十二月十九日

教林（花押）

【史料4―2】

送進 三村御庄御年貢代錢事、

合肆貫文者、<sup>（和市貫別
壺石宛）</sup>

右、所送進之状如件、

応永廿一年十二月廿五日

教林（花押）

【史料4―3】

註進 三村庄御年貢支配事

合五貫三百文、六十文惡錢^{（替）}贄未到定

除

六百五文

仏御料足

卅文

支具

以上

残定錢四貫六百六十二文内

(吉祥園院藏然、觀智院宗施)
兩学頭御分

一貫七百四十八文 口別八百七十四文

籠衆御分

一貫七百四十八文

〇書き直
「口」別四百卅七文

(金連院果淳)
御奉行分

八百七十四文

公文分

二百八十五文

以上

右、支配之状如件、

応永廿一年十二月廿九日

公文法橋(花押)

【史料3】は、応永二年一月一六日付の送進状と同年一月一八日付の支配状⁽²⁴⁾で、代官の宇野教林が錢貨一〇貫文を東寺宝莊嚴院方に送進し、東寺宝莊嚴院方が錢貨一〇貫七〇〇文を諸経費を差し引いた上で学頭・籠衆・奉行・公文に配分し、そのうち、錢貨七〇〇文が「先度悪錢不足分」であったことがわかる。

【史料4】は、応永二年二月一九日付及び同年二月二五日付の送進状と、同年二月二九日付の支配状⁽²⁵⁾で、代官の宇野教林が応永一八年(一四一一)の未進残分として錢貨一貫三六〇文と錢貨四貫文の合わせた錢貨五貫三六〇文を東寺宝莊嚴院方に送進し、東寺宝莊嚴院方が錢貨五貫三〇〇文を諸経費を差し引いた上で学頭・籠衆・奉行・公文に配分したが、そのうちの錢貨六〇文「悪錢替」であり、「未到」ということがわかる。

【史料3】・【史料4】ともに送進状と支配状とが貼り継がれており、その継目の裏には東寺宝莊嚴院方奉行である金連院果淳の花押が据えられていることから、送進された錢貨をもとに支配状が作成されていることがうかがえる。

ここでまず注目したいのは、送進状と支配状の錢貨の額が同じではないことである。【史料3】は支配状の錢貨の額が少なく、送進状の錢貨の額が多い。一方、【史料4】は、支配状の錢貨の額が多く、送進状の錢貨の額

が少ない。これは、前者が年貢錢と共に悪錢の代替錢を送っており、後者が年貢錢のなかから悪錢を撰び返却しているからである。すなわち、【史料3】は支払人が受取人に代替の錢貨を送る段階で、【史料4】は受取人が悪錢を支払人に返却する段階である。【史料3】と【史料4】は同じ悪錢問題を抱えているようにみえるが、実は二つの史料が置かれている状況は全く異なっていたのである。

さらに注目すべきは、【史料3】の傍線部にあるように、京都における撰錢が、代官の宇野教林だけでなく、「あきうと（商人）」の歎きにもなっていることである。京都において撰錢することは、すでに川戸貴史が指摘しているように、悪錢が京都と現地との認識の差異があつたからで、また、勸学会学頭・籠衆・奉行人・公文に配分するときに再び撰錢されなかつたのは、内部で受容する錢貨の合意ができていたからと考えられる。

では、この「あきうと（商人）」の歎きは何を指しているのであろうか。この問題を考える上で、「悪錢替」の仕組みが参考になるだろう。²⁷「悪錢替」とは撰錢された悪錢の対応の一つで、撰錢された悪錢は支払人に返却され、支払人から代替の錢貨が送られるという仕組みである。先ほど京都において撰錢された悪錢が近江国三村莊の代官宇野教林に返却され、近江国三村莊の代官宇野教林が代替の錢貨を京都東寺宝莊嚴院方へ送進することを述べたが、これは「悪錢替」にもとづいて行っていたと考えられる。また、この時に錢貨の運送に担っていたのが、「あきうと（商人）」であり、この悪錢を京都から近江国に運送するのも、代替の錢貨を近江国から京都に運送するのも「あきうと（商人）」であつたと推測される。隔地間の年貢錢運送において、運送先での撰錢は運送人へ「悪錢」という荷の負担を強いることを意味する。すなわち、隔地間における撰錢は受取人だけでなく、支払人、さらには運送人も含む問題なのである。いうまでもなく隔地間の年貢錢運送は、受取人と支払人との間に距離があり、その距離によって手間と時間がかかってしまう。したがって、悪錢という荷は運送人への負担となるだけでなく、支払人の負担となる。そうした負担を生じるのは、支払人との距離に関係なく、撰錢された悪錢は支払人

に返却されるという「悪銭替」の仕組みそのものにあった。

実は、銭貨に封を付けることが、こうした問題を未然にふせぐための一つの方法ではないだろうか。仮に現地で銭貨（精銭）に封を付ければ、京都などの運送先で撰銭する必要がなく、そのまま納入できるのではないか。そして、それを裏付けるかのように、実際に銭貨を撰銭した後に封を付けていることが確認できるのである。

では撰銭との関連について、眞珠庵末寺である山城国薪の酬恩庵が作成したつぎの史料から検討しよう。

【史料5】

巳年土貢算用

十一石七斗七合 延マテ

下行

十一月廿二日
四斗

宗東渡、

一石七斗八升五合 田地支配

四升五合 田邊雨請反米 カフラキ、フナキリ

二升 當所二堤料

二斗八升 中西方へノ本役

午四月
一斗二升一合 茶ソ、リ三斤

三石六斗 運上、五月兩度二、

四斗三升 右ノ駄賃

午八月
五石 五貫文二賣、

已上十一石六斗八升一合、此外二升六合減、

イツモノ如ク、納帳寫可進候へ共、路地已下如何、又宗俊急候間如此候、相違之事候ハ、重而可承候、五

貫文慥御請取状、後便ニ待申候、恐惶敬白、

天正十年九月廿四日

酬恩納所^(圖) 紹園(花押)

眞珠納所禪師

待司

其元料足撰候由、次郎申候間、随分エラミ、符ツケ上申候、有其心得、御ツカイ可被成候、かしく、
【史料5】は天正一〇年(一五八二)九月二十四日付、酬恩庵納所の紹圓が眞珠庵側に宛てた年貢算用状で、酬恩庵納所である紹圓が「巳年」つまり天正九年の年貢錢を算用したものである。⁽²⁹⁾これによれば、一一石七斗七合の内、天正一〇年(一五八二)四月と五月に三石六斗と天正一〇年八月に米五石を換算した錢貨五貫文を眞珠庵側に運上したことがわかる。そして、「其元料足撰び候由、次郎申し候間、随分エラミ、符ツケ上申候」とあるように、眞珠庵側の寺使である次郎がその錢貨に対して撰錢を要求したため、紹圓が錢貨五貫文を撰錢した後に符(封)を付けたのである。⁽³⁰⁾

では、錢貨を撰錢した後に符(封)を付けるという過程をどのように理解すればよいだろうか。前稿で明らかにしたように、当該期における錢貨はその評価がいまいでゆれ動くものである。⁽³¹⁾そのため、錢貨を使用するさい、常に精錢と悪錢との間、つまり錢貨のグレーゾーンをどのように扱うかという問題を抱えていた。撰錢という行為はそのグレーゾーンを区別する行為で、その行為によって錢貨が受容されるものとそうではないものに分別される。だが、注意すべきことは、撰錢の合意ができてない第三者の手に渡った場合、再び撰錢しなければならないことである。実は、錢貨に封を付けるという行為は、その問題を解決する要素を持っていた。

ここで注目すべきは、錢貨に封を付ける段階である。その段階は、錢貨が自身の手元から離れる時である。錢貨に封を付けることはその段階の現状を固定化でき、受領段階での判断材料となる。また、年貢錢を受領する眞珠庵と封を付けた酬恩庵紹圓との間では受容する錢貨を合意していたと推測される。封を付けた錢貨が保証され

るのは、花押が認識できる範囲であるため、広範囲にわたるとは考えにくく、ごく限定された範囲であろう。撰銭した銭貨に封を付けて、それをそのまま納入しているのは、受領する時にすでに撰銭された銭貨（精銭）であるということ判断していたと考えられる。精銭の状態を固定化し、そのまま受領しているように、限定的な空間のなかではあるが、封（花押）が銭貨受領のさいの証明となっていたのであろう。

銭貨は撰銭という行為によって精銭や悪銭という形で区別化されるようになる。銭貨には区別されたものとそうでないものとあるが、その現状を固定化する。これこそが銭貨に封を付けることの本質であり、銭貨の区別化を必要とする社会の要請にもとづいており、時代をあらわす一つの行為といえるだろう。

おわりに

本章では、銭貨に封を付ける行為について分析し、その歴史的背景を考察してきた。その結果、銭貨に封を付ける行為は、銭貨そのものに封を付けることで、具体的には、銭貨に花押を据える行為であること、銭貨に封を付けた場合、封を付けた方の書状や送進状が添えられ、銭貨と状は一对の関係にあり、銭貨の受取人は銭貨と書状に据えられた花押を照合した上で受領していたこと、封じられた銭貨はそのまとまりに意味があり、その状態が同一種類の貨幣として認識されていたこと、などが明らかになった。

また、銭貨に封を付けることは隔地間の年貢銭運送のさいに現地の年貢収納・送進担当者がおこなう点に特徴があり、運送先で撰銭した「悪銭」を現地（運送元）の支払人に返却し、代替の銭貨を送り返すのである。そのため、「悪銭」という荷の負担を強いるという問題があった。悪銭という荷の負担の問題は、支払人との距離に関係なく、撰銭された悪銭は支払人に返却されるという「悪銭替」の仕組みそのものにあった。銭貨に封を付けることが、こうした問題を未然にふせぐための一つの方法であったといえる。撰銭後に銭貨に封を付けるという行為は撰銭した者の間の合意上で成り立つものであり、第三者の手に渡った場合、再び撰銭しなければならない

という問題を有しており、錢貨に封を付ける行為がその問題を解決する要素を持っていた。つまり、撰錢した後
に錢貨に封を付けることによって、撰錢した状態を固定化を維持できたのである。ただし、封を付けた錢貨が保
証されるのは、花押が認識できる限定的な範囲であり、花押が錢貨受領のさいの証明となっていた。

錢貨は撰錢という行為によって精錢と悪錢に区別されるようになり、錢貨に封を付けることによってその現状
が固定化されるようになる。このような行為がみられる背景には、錢貨の評価があいまいでゆれ動くもので、そ
の錢貨の区別化を必要とする社会があった。

註

(1) 当該期における貨幣や商品流通の概要については、桜井英治・中西聡編『新体系日本史12 流通経済史』(山
川出版社、二〇〇二年)があげられる。

(2) 小宅莊の概要については、今井林太郎「大徳寺領播磨国小宅莊」(『大手前女子大学論集』七号、一九七三年)、
『龍野市史』第一卷(一九七八年)を参照。

(3) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』一六六号。

(4) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』三四号。

(5) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』二五号。

(6) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』一九二号。

(7) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』七一二号。

(8) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』七一一・八四六号。

(9) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』七〇〇号、八四四―二号など。

(10) この送進状がどのようなものであったかという問題を考えるには、次の史料が参考になる。

送進上申請水庄春成銭事

合貳貫文者、付符

右、所進納申之状如件、

長享貳年卯月 日

多賀遠江守

忠親（花押）

進上 養徳院納所禪師

（『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』一二四三号）

この史料は、長享二年（一四八八）卯月付けの近江国清水庄春成銭の送進状である。すなわち、多賀遠江守忠親が大徳寺養徳院側に対して近江国清水庄春成銭の二貫文を送進した内容である。注目すべきは、「合貳貫文者、付符」という文言で、金額表示の下に「付符」と注記されている。この場合の「付符」は封を付けることを意味し、多賀近江守忠親が春成銭二貫文に封を付けたことが想像できよう。

(11) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』六七二号、七一〇号。

（封紙捻封ウハ書）

「（小毛也）三職政所

徳禅寺納所禪師 宗能」

（端裏切封）
「（墨引）」

改年之御吉兆、御満足不可有盡期候、仍而御年貢銭伍貫文運上申候、贈状別紙進之候、（送）封付候、能々御請取可在候、如何様、罷上可致物語候、恐惶謹言、

正月廿六日

宗能（花押）

徳禅寺

納所禪師

- (12) 名田莊については、清水三男「若狭国名田莊」(同『日本中世の村落』日本評論社、一九四二年)、渡辺澄夫「徳禪寺領若狭国名田莊」(同『増訂 畿内庄園の基礎構造』上巻、吉川弘文館、一九六九年)、『福井県史 通史編 2』(福井県、一九九四年)、杉山巖「名田莊の伝領と関係文書群の形成 ―付 名田莊関係文書目録(稿)―」(『東京大学日本史学研究室紀要』一〇号、二〇〇六年)、同「若狭国名田莊の形成と伝領―徳禪寺襖裏文書の検討を通じて―」(『遙かなる中世』二二号、二〇〇六年)を参照。
- (13) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』六八六号。
- (14) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』六八五号。
- (15) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』四二一号。
- (16) 佐藤進一『増補 花押を読む』(平凡社、二〇〇〇年)。
- (17) 上賀茂については、須磨千穎『莊園の在地構造と経営』(吉川弘文館、二〇〇五年)、大山喬平監修、石川登志雄・宇野日出生・地主智彦編『上賀茂のもり・やしろ・まつり』(思文閣出版、二〇〇六年)などを参照。
- (18) 慶長一七年(一六一二)三月二八日付け「社頭月行事算用状」(「賀茂別雷神社文書」)。なお、「賀茂別雷神社文書」は、京都市歴史資料館架蔵の紙焼写真を使用した。
- (19) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『広島県草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ 北部地域南半分の調査』(一九九四年)、福島政文「錢の流通―「ひとさし」は九七枚―」(網野善彦・石井進・福田豊彦監修、松下正司編『よみがえる中世8―埋もれた港町 草戸千軒・輛・尾道―』平凡社、一九九四年)、渡政和「中世文献史料における「緡錢」表現について」(『出土錢貨』五号、一九九六年)、同「錢貨―考古・文献・絵画資料からみた緡錢の表現―」(『歴史手帖』二四巻七号、一九九六年)を参照。
- (20) 村井祐樹「東寺領近江三村庄とその代官」(東寺文書研究会編『東寺文書と中世の諸相』思文閣出版、

二〇一一年。

(21) 「寶莊嚴院方評定引付」応永一五年(一四〇八)四月一五日程(『大日本古文書 家わけ第十 東寺文書』
た函四二号)、前掲註(20) 村井論文を参照。

(22) 「東寺百合文書」ハ函一二二号―一、ハ函一二三―一、ハ函一二四号―一、ハ函一二四号―三(京都府
立総合資料館編『東寺百合文書』思文閣出版)。

(23) 「東寺百合文書」ハ函一一七号(京都府立総合資料館編『東寺百合文書』思文閣出版)。

(24) 「東寺百合文書」ハ函一二六号(京都府立総合資料館編『東寺百合文書』思文閣出版)。

(25) 「東寺百合文書」ハ函一二八号(京都府立総合資料館編『東寺百合文書』思文閣出版)。

(26) 川戸貴史『戦国期の貨幣と経済』(吉川弘文館、二〇〇八年)。

(27) 「悪銭替」の詳細については、第二章を参照。

(28) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』六〇六号。

(29) 紹圓は算用状とともに次のような書状を眞珠庵納所禅師に宛てている。

尚々態御音信本望候、必々罷上、萬事可申承候、返々五貫文慥御請取專一候、

信長御忌中、於貴山被執行付、各致上洛、可令馳走之由、則衆中へ披露申候、必各可罷上由候、如承候、

貴寺御繁栄、諸末庵迄之大慶、不過之候、誠御用多中、火番態御下、相心得可申上候由、衆議候、

一、當庵ナトヨリ、漸寫ナト、式送候テ、可然候ハんカ、其元立御聞候て、「御」便宜ニ御指南頼申候、

一、土器アイ物^(間物)五十計、大チウ百計、被買置可給候、後便ニ取可申候、其方ヨリ便宜候ハ、少成共御下候

て、可給候、

一、貴庵去年分御土貢米下行運上之残、五貫文ニ賣置、此次郎ニ只今上申候、和市安候へ共、爰元皆悉其分
ニ候つる間、無了簡候、今ワ少高ク成申候へトモ不及力候、料足ニ符付申候、算用状慥御請取專一候、後

便ニ五貫文ノ御請取頼申候、恐々謹言、

九月廿四日

紹圓（花押）

「^{（封ウハ書）}（墨引）」

酬納所

眞珠納^{（所）}□禪師

圓

貴報

」

（『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 眞珠庵文書』九〇八号（八））

右の史料は、九月二四日付の紹圓が眞珠庵納所禪師に宛てた書状である。年代については、「信長御忌中、於貴山被執行付、各致上洛、可令馳走之由、則衆中へ披露申候」という内容から、天正一〇年（一五八二）と推測される。ここで注目したいのは、第三条目である。すなわち、去年分の「御土貢米」を五貫文で売却し、寺使の次郎に渡しており、また「料足ニ符付申候」とあるように、その錢貨に符（封）を付けていることがこの史料からも明らかである。

（30） 同様の事例は他にも確認できる。その一例としてつぎの史料がある。

当村之御年貢、只今百貳貫文京着申候、四所浦の事ニ、其まで付申しきよし、名主御百姓等申候間、不可申候ハ、使なんともつて、付進上申候、料足者よみゑらせて、封を付候て上申候、此ま、可有御納候、

一、四所浦之御年貢正米の事、国にてとかく無正体事申候、定其正躰事を可申候、昔之古帳「^{（をもち）}」つてしる^{（証）}したる事にて候を、本所よりちきに目^{（直）}をみせられ候品、か^{（我意）}いいにまかせ候て、加様之事を申候、相講^{（講）}く、御承引あるましく候、

一、西連寺へ混布一束数百五把同状を進上申候、其より御と、^{（届）}け候て可給候、
一、乏少二候へ共混布一束数五把御内へ進上申候、御賞翫候者、所仰候、

猶々、御年貢百弍貫文京着申候、御請取を下可給候、相殘候分、地下二も更々成候はす候、米なんとや^(金)す

く候て、まい候物もなく候之間、計会可有御推量候、^(付)者不可等閑存候、何事も重而可申承候、恐々謹言、

十一月廿六日

^(通書)
□□ (花押)

西大寺納所代まいる人々御中

〔宮津市史〕資料編 第一卷、別掲三五〇号)

右の史料は「西大寺文書」の年未詳道西書状である。「当村之御年貢、只今百弍貫文京着申候、四所浦の事二、其まで付申しきよし、名主御百姓等申候間、不可申候ハ、使なんともつて、付進上申候、料足者よみゑらせて、封を付候て上申候、此ま、可有御納候」とあるように、「当村之御年貢」一〇二貫文を京都に運送するのにあたり、名主百姓等が錢貨に封を付けることに対して、抵抗をみせているものの、使者が錢貨に封を付けて進上し、そのまま納入している。すなわち、錢貨は撰錢され封を付けられた上で運送され、そのまま納入されるのである。なお、西大寺は現在の京都府舞鶴市に比定される志楽莊を領しており、四所浦はその一つと推定される。ここでの「当村之御年貢」は具体的にはわからないが、丹後国志楽莊に関する年貢錢と考えられる。

(31) 第二章を参照。

第四章 緡銭慣行

はじめに

本章では、緡銭について検討する。緡銭とは錢貨の中央の孔に紐を通したもので、いわば錢の集合体である。緡銭が用いられたのは、中国や日本など錢を貨幣としていたところであった。そのまともりは各々の国によって異なっていた。例えば中国の緡銭は、六世紀末以後一〇〇文を一貫に統一し、一緡Ⅱ一貫となった。それに対して、日本の緡銭は百文を基本構成とした。また日本では、一貫文の緡銭を表現する「結」や百文の緡銭を表現する「連」という単位が存在していた。

中世日本における緡銭の研究は、主に短陌（省陌）の問題として取り上げてきた。小葉田淳による基礎的な研究を契機に、^①錢百文は何枚かという問いを文献史料と出土錢から分析した石井進の研究、^②考古・文献・絵画資料から緡銭の表現方法を明らかにした渡政和の研究、^③実枚数と名目額の差に着目し、目錢の意味を考察した伊藤俊一の研究、^④伊勢神宮地域における「特殊省百法」の実相を明らかにした千枝大志の研究などがある。^⑤先学の研究は、緡銭のありようや短陌（省陌）の意味を検討したものであるが、緡銭がどのように歴史的変容をとげてゆくのか、この点については必ずしも明確にされていない。また、そもそも短陌（省陌）とは何か、という問題も不明瞭のままである。

そこで本章では、緡銭を値と比率に区別した上で、その特質について解明してみたい。なお、短陌という言葉は、ほかにも省百や省陌などが存在するが、ここでは短陌に統一する。

第一節 緡銭の比率

中世後期において異なる銭種をある一定の比率で混用した緡銭が存在した。桜井英治は「複数の銭種を合成して別の新しい銭種カテゴリーを構成しようとする発想ないし方法」または「精銭もしくは基準銭に一定量の明銭や低銭を混入してサシ銭をつくる慣行」を「組成主義」と称している^⑥。すでに先学によって明らかにされているように、その事例は永楽銭などの明銭を混用する緡銭と荒銭を混用する緡銭が存在する。以下、史料を掲げながら、その実態を確認してみよう。まず、永楽銭などの明銭を混用した緡銭に関する史料をみてみよう。

【史料1】

四月廿七日、局就歸参、大もん恩借之事、

大もん御くらに御かりの物三百疋こし候て、うけとりまいらせ候、めてたくやかて／＼返しうかわされ候、かしく、

ゑい正十二ねん四月廿七日

をし判 うきやう

ひろはし殿令申給

永正十二年四月廿七日 (花押^(守光))

此要脚、局借渡之間、永楽二十宛分可申付之云々、

【史料2】

「(切封) 木本殿 (浦東書) 渡瀬与四郎信重」

昨日ハ料足事色々御身^(幸)勞中々難申尽存候、昨日壹貫六百五十文請取申、残分此升に可渡給候、然者百文ニ永楽^(金貲)甘さし分御渡候て可給候、返々畏存候、趣まいり御礼を可申候、恐々謹言、

十二月十六日

信重 (花押)

【史料3】

為御公錢從佐田大膳亮殿被預ケ分配当帳之事

合壹貫五百文者清目足

但永樂廿さし

二百文

自見

太郎右衛門

二百文

自見

次郎右衛門

二百文

助部村

清右衛門

二百文

矢部

長興寺

二百文

円通寺

二百文

安門坊

百五十文

益永平太郎方

百五十文

標村

孫右衛門

百文

益永方之内

小七

以上

右、配符如件、

永正八年 (ママ) 午庚

正月十一日

重幸 (番長) (花押)

【史料1】は「守光公記」永正二年（一五一五）四月二七日条である。⁽⁷⁾ 廣橋守光が禁裏御倉の立入宗康から要脚三〇〇疋（三貫文）を借用したが、それが「永樂二十宛分」つまり緡銭の中に永樂錢二〇文が混用していたことがわかる。

【史料2】は渡瀬与四郎信重が木本に宛てた書状である。⁽⁸⁾ 年代については定かではないものの、永正七年

(一五一〇)一二月の目代重増日記紙背文書であることから、それ以前であることは確かであろう。これによれば、

渡瀬与四郎信重が一貫六五〇文を受け取ったが、その錢貨は「百文ニ永樂廿さし分」とあるように、百文のうち永樂錢二〇文の緡錢であったことがわかる。

【史料3】はすでに本多博之や川戸貴史によつて検討されている史料で、永正八年(一五一一)正月一日、佐田大膳亮から預けられた「御公錢」一貫五〇〇文の配当を示したものである。⁹⁾「永樂廿さし」とあるように、永樂錢二〇枚が混在した「清」錢の緡錢であったことがわかる。付言するならば、「目足」は百枚で百文の緡錢を意味しており、百枚の内永樂錢二〇枚を混用した足百の緡錢であった。

ほかにも、『鹿苑日録』明応八年(一四九九)十二月二十八日条に「自北鹿苑寺、眞如寺作州豊田年貢錢拾貫文持来、但永樂十文指也」とあるように¹⁰⁾、眞如寺領美作国豊田莊年貢錢一〇貫文が到来したが、緡錢の中に永樂錢一〇文を混用していることがわかる。

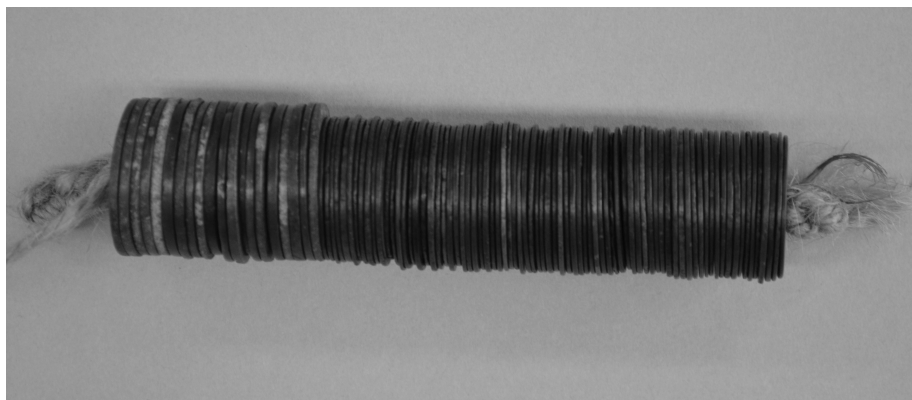
明錢を混用した緡錢の場合、緡錢じたいが精錢として扱われており、明錢と他の錢貨との比価は一对一(等価)である。また、明錢が「永樂」といった固有の名称で表示されており、北宋錢とは異なる錢貨と認識されていた。次に、荒錢を混用した緡錢をみてみよう。

【史料4】

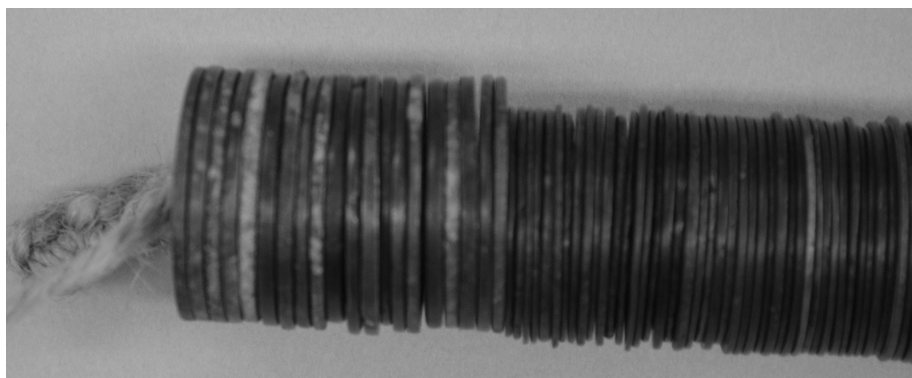
借用申料足事

合式貫文者

右、百文仁荒錢參拾文指の並錢也、今月より加六文子返弁可申候、若無沙汰候者、彼料足本子返弁申する間、寺家分宮時之内、六郎名并貞末名正税錢壹貫九百文、当年十二月までの利平本子式貫六百文ニ成候、悉皆済可申候、万一候者、彼両名正税錢可有御進退候、残而未進七百文ニハ、又正月より加利分来年収納時分皆々納可申候、如此申談候上者、御徳政興行、又者如何躰なる新御法共、不可有相違之状、如件、



【写真1】 北宋銭八〇枚と永楽銭二〇枚で構成された緡銭（復元）



【写真2】 【写真1】の拡大写真

永正拾六年 卯巳八月三日

大畠大膳亮殿

御供所番長大犬

重行（花押）

これによれば、永楽銭を混用した緡銭が精銭として扱っているのに対して、荒銭を混用した緡銭は並銭として扱っていることがわかる⁽¹⁾。緡銭のまとまり方によって、精銭か並銭かを判断している。緡銭のまとまりが一つの貨幣として扱われていたととらえることができるだろう。

では、このような緡銭はどのように判別していたのであろうか。荒銭に関しては、具体的にどの銭を指しているか明らかでないことから、その詳細を知ることができない。だが北宋銭と永楽銭の構成による緡銭に関しては、実物資料からその様相をうかがうことができる。

【写真1・2】は、北宋銭八〇枚と永楽銭二〇枚で構成された緡銭である。

【写真1・2】から、北宋銭と永楽銭の錢径の違いから段差になっていることに気づく。北宋銭が錢径二四ミリメートル前後、永楽銭は錢径二六ミリメートル前後と一般的な北宋銭より錢径二ミリメートルほど大きい。北宋銭と永楽銭の錢径差から判断できたと推測できる。

以上、緡銭のなかに永楽銭や荒銭などを混用して使用していたことが確認できたが、当該期においてこのような緡銭が滞りなく使用されていたかという実はそうでもなかった。【史料5】をみてみよう。

【史料5】

（端裏内封ウハ書）

「^{（異筆）}延徳三年七月三貫文」

近聴院納所

橘坊 若狭殿進之

公維」

返々、あく錢百文別二十文あて御入候、可為如何候哉、此事者不及申候、已後者御せん／＼候て可給候、又請取別紙ニ進候、

五智輪院より之御料足、只今参貫文請取申候、いまと成少事給候、迷惑此事候、相残分堅御申候て可給候、尾籠なから其様の御無沙汰と存候、仍御借状之事心得申候、更々此方之非如在候、到来候者可進候、返々彼方へ御催促之儀不可有由断候、此由私より可申候由、坊主被申候、恐惶謹言、

七月廿一日

納所

公維（花押）

橘坊

若狭殿

進之候

【史料5】は七月二一日付け近聴院納所公維が橘坊若狭に宛てた書状である。^{（註）}これによれば、近聴院納所公維

が五智輪院からの料足三貫文を受け取り、残分の返済を催促していることがわかる。鍛代敏雄によれば、橘坊は五智輪院と近聞院との間で借錢問題があり、文明期以後、橘坊は近聞院から「度々借錢」にかかる借状六通五〇貫文の紛失状を得ており、長享三年（一四八九）には近聞院側から返済を迫られてた¹³。ここでの料足三貫文は近聞院側から返済を迫られた借錢の一部と思われる。

ここで注目すべきは、悪銭が百文に一〇文づつ入ったことを問いただし、今後は撰銭して受け取るとした点である。受け取った銭貨は二種類から構成された緡銭であり、その内の一〇枚を「悪銭」と認識していることがわかる。また、ここでは撰銭されていないものの、仮に撰銭されたならば悪銭は支払人に返却されたと考えられる。

では、緡銭のなかの悪銭ばどのように返却されるのだろうか。悪銭の返却はつぎの二方法が想定できる、ひとつは、緡銭のなかの悪銭だけを返却する場合である。この場合、緡銭のなかの一枚ごとが悪銭として認識されていると理解できる。いまひとつは、悪銭が混在している緡銭ごと返却する場合である。この場合、緡銭ごと悪銭として扱われたと理解できる。いづれにせよ、二種類とも使用できる範囲でなければ銭貨として使用できないことがいえるだろう。

第二節 緡銭の値

ここでは、足陌と短陌について確認したい。短陌（省陌）とは、百枚未満の銭を百文とみなすことである（以下、引用部分を除き、用語を短陌に統一する）。それに対して、百枚の銭を百文とみなすことを足陌（調百・丁百）という。また目銭とは、足陌と短陌との差をあらわしたものであり、目銭を加えた場合を「目足」・「加目銭」といい足陌を意味し、目銭を引いた場合を「目引」といい短陌を意味する¹⁴。

まず、緡銭の値についてみてみよう。文明一二年（一四八〇）二月二日、大乘院門跡の尋尊は楠葉西忍が

語った遣明船の利益について記した後に料足について次のように記している。⁽¹⁵⁾

料足アカマカ関ヨリ西ハ百文、東ハ九十七文目、^也

これによれば、料足は赤間関より西は「百文」、東は「九十七文」とのことである。ここでの「百文」は一〇〇枚で「百文」の足陌の緡銭を指し、「九十七文」は九十七枚で「百文」の短陌の緡銭を指していると考えられ、足陌と短陌の存在を尋尊が認識していたことがわかる。ただし、当該期における緡銭が足陌と短陌の地域に区別されたかは定かではない。だが、緡銭の枚数が確認できる出土銭貨を分析した嶋谷和彦によれば、本州の東国から中国地方では九六〜九八枚の緡銭になっているのに対して、太宰府条坊跡では一〇〇枚の緡銭となっていることを指摘しており、九州地域において足陌の緡銭の存在が確認できる。⁽¹⁶⁾

また、本多博之が銭貨流通の実態を明らかにした豊前国においては、足陌の緡銭を示す「目足」が史料上で確認できる。

【史料6】

送進料物之事

合陸貫文定<sup>清銭
目足</sup>

右、為 当社下宮去大永六年十一月廿一日御堅柱上棟御供副料物代并木屋入・木口祓、^(年替)到今□□造祓料物也、
任浅略之旨所進、如件、

永松新右衛門

享祿元年十二月廿日

泰廣（花押）

賀来新右衛門

泰宗（花押）

賀来采女允

惟教

番長大夫殿

【史料7】

□^(下)宮堅柱上棟請取案文

「申料物之事」

合六貫文^{清銭目足}

「物者、去大永六十一月廿一日」「宮御堅柱上棟御供」「物并木屋入祝物」「御造祓料、
当時御」「請取申所、如件、

下宮社司兼番長大夫

享「^(禄元年十二カ)」月廿二日

通忠

【史料6】は永松新右衛門泰廣ら三人が下宮社司兼番長大夫の永弘通忠に宛てた御堅柱棟御供副料物代に関する送進状で、【史料7】はその請取状案である。⁽¹⁷⁾ここでは送進状に「合陸貫文定^{清銭目足}」と、請取状案に「合六貫文^{清銭目足}」とみえ、六貫文は「清銭」の「目足」つまり足陌であったことがわかる。さらに、大内氏が段銭納入のさいに精銭納を強く義務づけたことが本多博之によつて明らかにされているが、そうした史料には「清目足」、「清目足者」といった文言が確認でき、⁽¹⁹⁾それが精銭かつ足陌であったと理解できる。

このように、足陌の緡銭について確認した。つぎに、短陌がいかに存在していたのかを、当該期における短陌に関する史料から検討してみよう。

【史料8】

うけとり申代の事

合八百文定、但九十七文銭

右まへの与右衛門尉方ニあつけをかれ候代の残也、以上、

天正十九

安富

壬正月廿八日

源二郎（花押）

しふや与右衛門尉殿

まいる

【史料9】

新町替之畠

宇野令之内坪付之事

合

はやまた

畠半

代三百文

藤左衛門

同所

畠半卅分

代三百五十文

新兵衛

同所

散司

畠半

代三百文

新左衛門

柿木ノもと

畠壹反小

代八百五十文

同人

畠敷三反六十歩

以上

鍛壹貫八百八十文

当料ニして五貫九百十六文 目銭共

但九十六文銭

右之前為新町替畠打渡如件、

文禄五年

三浦

正月廿日

内左衛門尉在判

善福寺

右式通繼立之裏ニ

今度御究相澄畢

文禄五年五月廿五日

國司備後守

小林寺

山田吉兵衛在判

【史料8】は、安富源二郎が渋谷与右衛門尉に宛てた代物請取状である。⁽²⁰⁾渋谷氏は毛利氏の御用商人として活動していたことが知られているが、⁽²¹⁾ここでは安富源二郎が渋谷与右衛門尉に預け置いていた残り分の銭貨八〇〇文を受け取ったことがわかる。また、「合八百文定、但九十七文銭」とみえるように、受け取った銭貨の緡銭状況を注記しており、この「但九十七文銭」という文言は短陌の値を示していると考えられる。すなわち、受領した銭貨は九七枚で百文とみなす緡銭であった。

【史料9】は三浦内左衛門尉が善福寺に宛てた打渡状である。⁽²²⁾これによれば、文禄五年（一五九六）正月二十日に新町替として畠が善福寺に打ち渡されたことがわかる。畠数は三反六〇歩で、その分銭は「鍛」一貫八八〇文を基準とし、「当料」に換算して五貫九一六文と表示されている。すでに本多博之が明らかにしたように、「鍛」

は毛利氏領国内で広く流通していた錢貨で、畠分錢の基準錢として「鍛」が採用されており、また「当料」は実際の通用錢で、その額は「鍛」を基準として換算された⁽²³⁾。この「鍛」や「当料」については重要な問題の一つであるが、ここでは「当料」五貫九一六文が「九十六文錢」である点に注目したい。ここでの「九十六文錢」は短陌の値と考えられる。すなわち、この「当料」五貫九一六文は九十六枚で百文とみなす緡錢であつた。

このように、同時期に「九十七文錢」と「九十六文錢」の短陌が存在したのである。すなわち、「九十七文錢」から「九十六文錢」へと単純に変化していくのではなく、「九十七文錢」と「九十六文錢」の短陌が同時期に併存していたのであつた。

さらに、千枝大志の研究によれば、錢七二枚で百文とみなす「七十二文錢」という緡錢も存在するという⁽²⁴⁾。他にも千枝は、「七十二文錢」に「悪錢三十文サシ」や「悪錢三十二文サシ」といった緡錢の存在についても明らかにしている。

以上のように、中世後期の日本では、「九十七文錢」や「九十六文錢」、「七十二文錢」といった様々な値の短陌が併存していた状況であつた。先行研究において短陌の意味は錢を数える手間賃と緡繩の代価と理解されてきた⁽²⁵⁾。だが、錢七二枚で「百文」とみなす緡錢の存在は、先行研究の理解では説明できない。

では、「九十七文錢」や「九十六文錢」さらには「七十二文錢」の値を取るのどのような意味があるのだろうか。改めて千枝大志が明らかにした「七十二文錢」の緡錢をみると、この緡錢に悪錢を指していることに気づく。ここでの悪錢は精錢を基準錢とした通用錢と考えられ、精錢と悪錢との間に比価がたつていたと推測される。では、異なる比価の錢を指して緡錢をつくることはできるのだろうか。

【表】は、異なる比価の錢を混用した緡錢について表示したものである。精錢と悪錢の比価を一对二、一对三、一对四の場合に区別したうえで、「九十六文錢」、「九十七文錢」、「七十二文錢」の緡錢を構成できるものを表示した。比価がとれる条件は、精錢と悪錢の間で簡単な正数値がとれることである。また、比価の値は必ず簡単な

正数値である。精銭と悪銭の枚数は一から短陌値までの間をとる。

【表】から、「九十七文銭」の場合には異なる比価を持つ銭貨（精銭と悪銭）の混用ができないことがわかる。たとえ異なる種類の銭貨が混合しても比価が一对一となるだろう。それに対して、「九十六文銭」や「七十二文銭」の場合には、銭貨間の比価（精銭と悪銭）が一对二、一对三、一对四など簡単な正数比の値をとることができる。

また、【表】から「九十六文銭」と「七十二文銭」は悪銭の枚数が同じとき、精銭と悪銭との比価がとれる値も同じであることが判明する。例えば、銭緡の中に悪銭を三〇文混用した場合、九十六文銭も七十二文銭も比価が一对二、もしくは一对三の比価をとっていたこととなる。これは区別立ての比価が同一空間で同じであることを示しており、異なる種類の銭として区別するために、九十六文銭や七十二文銭という値がとられたと考えられる。さらに千枝によれば、「七十二文銭」の「悪銭三〇文さし」の緡銭から「七十二文銭」の「悪銭三二文さし」に変更していることを指摘している。では、これはどのような意味を持つのであろうか。

【表】は「七十二文銭」の「悪銭三〇文さし」と「七十二文銭」の「悪銭三二文さし」が表現できる比価について表示したものである。これによれば、「七十二文銭」の「悪銭三〇文さし」は比価一对二と一对三が表現できるのに対して、「七十二文銭」の「悪銭三二文さし」は比価一对二と一对四が表現できる。ここから、「七十二文銭」の「悪銭三〇文さし」の緡銭から「七十二文銭」の「悪銭三二文さし」の変更はつぎの二つの解釈ができるだろう。ひとつは、比価一对二の場合で、この場合は比価が同じ空間のなか悪銭の枚数を変更したという解釈である。いまひとつは比価を一对三から一对四へと変更したため、「七十二文銭」の「悪銭三十文さし」から「七十二文銭」の「悪銭三十二文さし」へと変更したという解釈である。これは悪銭の枚数の変更が比価の変更を示すこととなる。

このように、短陌の意味は、短陌と足陌との差額にあるのではなく、短陌そのものの値にあったと考えてよいだろう。そして、「九十七文銭」と「九十六文銭」、「七十二文銭」の違いには、銭貨の区別立て（階層化）が背

$a x + b y = c$ $X + Y = c$ $X = a x$ $Y = b y$
 x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価
 x 、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価 1 対 2、96 文銭

① $a = 1$ $b = 1/2$ $c = 96$

② $a = 2$ $b = 1$ $c = 96$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/2 y = 96$

$x + 1/2 \times 1 = 96$ $x = 95.5$

② $2x + y = 96$

$2x + 1 = 96$ $2x = 95$ $x = 47.5$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/2 y = 96$

$x + 1/2 \times 2 = 96$ $x = 95$

② $2x + y = 96$

$2x + 2 = 96$ $2x = 94$ $x = 47$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/2 y = 96$

$x + 1/2 \times 3 = 96$ $x = 94.5$

② $2x + y = 96$

$2x + 3 = 96$ $2x = 93$ $x = 46.5$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/2 y = 96$

$x + 1/2 \times 4 = 96$ $x = 94$

② $2x + y = 96$

$2x + 4 = 96$ $2x = 92$ $x = 46$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

$x \cdot X$	y	Y	x	X	$y \cdot Y$
96	0	0	48	96	0
95	2	1	47	94	2
94	4	2	46	92	4
93	6	3	45	90	6
92	8	4	44	88	8
91	10	5	43	86	10
90	12	6	42	84	12
89	14	7	41	82	14
88	16	8	40	80	16
87	18	9	39	78	18
86	20	10	38	76	20
85	22	11	37	74	22
84	24	12	36	72	24
83	26	13	35	70	26
82	28	14	34	68	28
81	30	15	33	66	30
80	32	16	32	64	32
79	34	17	31	62	34
78	36	18	30	60	36
77	38	19	29	58	38
76	40	20	28	56	40
75	42	21	27	54	42
74	44	22	26	52	44
73	46	23	25	50	46
72	48	24	24	48	48
71	50	25	23	46	50
70	52	26	22	44	52
69	54	27	21	42	54
68	56	28	20	40	56
67	58	29	19	38	58
66	60	30	18	36	60
65	62	31	17	34	62
64	64	32	16	32	64
63	66	33	15	30	66
62	68	34	14	28	68
61	70	35	13	26	70
60	72	36	12	24	72
59	74	37	11	22	74
58	76	38	10	20	76
57	78	39	9	18	78
56	80	40	8	16	80
55	82	41	7	14	82
54	84	42	6	12	84
53	86	43	5	10	86
52	88	44	4	8	88
51	90	45	3	6	90
50	92	46	2	4	92
49	94	47	1	2	94
48	96	48	0	0	96

【表】異なる比価の銭を混用した緡銭

第4章 緡銭慣行

$$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$$

x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価

x 、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価1対3、96文銭

① $a = 1$ $b = 1/3$ $c = 96$

② $a = 3$ $b = 1$ $c = 96$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/3y = 96$

$$x + 1/3 \times 1 = 96 \quad x = 95.666\cdots$$

② $3x + y = 96$

$$3x + 1 = 96 \quad 3x = 95 \quad x = 31.666\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/3y = 96$

$$x + 1/3 \times 2 = 96 \quad x = 95.333\cdots$$

② $3x + y = 96$

$$3x + 2 = 96 \quad 3x = 94 \quad x = 31.333\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/3y = 96$

$$x + 1/3 \times 3 = 96 \quad x = 95$$

② $3x + y = 96$

$$3x + 3 = 96 \quad 3x = 93 \quad x = 31$$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/3y = 96$

$$x + 1/3 \times 4 = 96 \quad x = 93.5$$

② $3x + y = 96$

$$3x + 4 = 96 \quad 3x = 92 \quad x = 30.666\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

$x \cdot X$	y	Y	x	X	$y \cdot Y$
96	0	0	32	96	0
95	3	1	31	93	3
94	6	2	30	90	6
93	9	3	29	87	9
92	12	4	28	84	12
91	15	5	27	81	15
90	18	6	26	78	18
89	21	7	25	75	21
88	24	8	24	72	24
87	27	9	23	69	27
86	30	10	22	66	30
85	33	11	21	63	33
84	36	12	20	60	36
83	39	13	19	57	39
82	42	14	18	54	42
81	45	15	17	51	45
80	48	16	16	48	48
79	51	17	15	45	51
78	54	18	14	42	54
77	57	19	13	39	57
76	60	20	12	36	60
75	63	21	11	33	63
74	66	22	10	30	66
73	69	23	9	27	69
72	72	24	8	24	72
71	75	25	7	21	75
70	78	26	6	18	78
69	81	27	5	15	81
68	84	28	4	12	84
67	87	29	3	9	87
66	90	30	2	6	90
65	93	31	1	3	93
64	96	32	0	0	96

$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$
 $x、y$ は枚数 $X、Y$ は価値 $a、b$ は比価
 $x、y、X、Y、$ は正数値 $1 \leq x < c \quad 1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価 1 対 4、96 文銭

① $a = 1 \quad b = 1/4 \quad c = 96$

② $a = 4 \quad b = 1 \quad c = 96$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/4 y = 96$

$x + 1/4 \times 1 = 96 \quad x = 95.75$

② $4x + y = 96$

$4x + 1 = 96 \quad 4x = 95 \quad x = 23.75$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/4 y = 96$

$x + 1/4 \times 2 = 96 \quad x = 95.5$

② $4x + y = 96$

$4x + 2 = 96 \quad 4x = 94 \quad x = 23.5$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/4 y = 96$

$x + 1/4 \times 3 = 96 \quad x = 95.25$

② $4x + y = 96$

$4x + 3 = 96 \quad 4x = 93 \quad x = 23.25$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/4 y = 96$

$x + 1/4 \times 4 = 96 \quad x = 95$

② $4x + y = 96$

$4x + 4 = 96 \quad 4x = 92 \quad x = 23$

・ $x、y、X、Y、$ の値が正数であるので、成立する。

$x \cdot X$	y	Y	x	X	$y \cdot Y$
96	0	0	24	96	0
95	4	1	23	92	4
94	8	2	22	88	8
93	12	3	21	84	12
92	16	4	20	80	16
91	20	5	19	76	20
90	24	6	18	72	24
89	28	7	17	68	28
88	32	8	16	64	32
87	36	9	15	60	36
86	40	10	14	56	40
85	44	11	13	52	44
84	48	12	12	48	48
83	52	13	11	44	52
82	56	14	10	40	56
81	60	15	9	36	60
80	64	16	8	32	64
79	68	17	7	28	68
78	72	18	6	24	72
77	76	19	5	20	76
76	80	20	4	16	80
75	84	21	3	12	84
74	88	22	2	8	88
73	92	23	1	4	92
72	96	24	0	0	96

第4章 緡銭慣行

$$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$$

x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価

x 、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価 1 対 2、97 文銭

① $a = 1$ $b = 1/2$ $c = 97$

② $a = 2$ $b = 1$ $c = 97$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/2y = 97$

$$x + 1/2 \times 1 = 97 \quad x = 96.5$$

② $2x + y = 97$

$$2x + 1 = 97 \quad x = 46$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/2y = 97$

$$x + 1/2 \times 2 = 97 \quad x = 96$$

② $2x + y = 97$

$$2x + 2 = 97 \quad 2x = 95 \quad x = 47.5$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/2y = 97$

$$x + 1/2 \times 3 = 97 \quad x = 95.5$$

② $2x + y = 97$

$$2x + 3 = 97 \quad 2x = 94 \quad x = 47$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/2y = 97$

$$x + 1/2 \times 4 = 97 \quad x = 95$$

② $2x + y = 97$

$$2x + 4 = 97 \quad 2x = 93 \quad x = 46.5$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

$$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$$

x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価

x 、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価 1 対 3、97 文銭

① $a = 1$ $b = 1/3$ $c = 97$

② $a = 3$ $b = 1$ $c = 97$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/3y = 97$

$$x + 1/3 \times 1 = 97 \quad x = 96.666\cdots$$

② $3x + y = 97$

$$3x + 1 = 97 \quad 3x = 96 \quad x = 32$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/3y = 97$

$$x + 1/3 \times 2 = 97 \quad x = 96.333\cdots$$

② $3x + y = 97$

$$3x + 2 = 97 \quad 3x = 95 \quad x = 31.666\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/3y = 97$

$$x + 1/3 \times 3 = 97 \quad x = 94$$

② $3x + y = 97$

$$3x + 3 = 97 \quad 3x = 94 \quad x = 31.333\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/3y = 97$

$$x + 1/3 \times 4 = 97 \quad x = 94.5$$

② $3x + y = 97$

$$3x + 4 = 97 \quad 3x = 93 \quad x = 31$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

第4章 緡銭慣行

$$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$$

x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価

$$x$$
、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価1対4、97文銭

① $a = 1$ $b = 1/4$ $c = 97$

② $a = 4$ $b = 1$ $c = 97$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/4y = 97$

$$x + 1/4 \times 1 = 97 \quad x = 96.75$$

② $4x + y = 97$

$$4x + 1 = 97 \quad x = 24$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/4y = 97$

$$x + 1/4 \times 2 = 97 \quad x = 96.5$$

② $4x + y = 97$

$$4x + 2 = 97 \quad 4x = 95 \quad x = 23.75$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/4y = 97$

$$x + 1/4 \times 3 = 97 \quad x = 96.25$$

② $4x + y = 97$

$$4x + 3 = 97 \quad 4x = 94 \quad x = 23.5$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/4y = 97$

$$x + 1/4 \times 4 = 97 \quad x = 96$$

② $4x + y = 97$

$$4x + 4 = 97 \quad 4x = 93 \quad x = 23.25$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

$a x + b y = c$ $X + Y = c$ $X = a x$ $Y = b y$
 x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価
 x 、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価 1 対 2、72 文銭

① $a = 1$ $b = 1/2$ $c = 72$

② $a = 2$ $b = 1$ $c = 72$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/2 y = 72$

$x + 1/2 \times 1 = 72$ $x = 71.5$

② $2x + y = 72$

$2x + 1 = 72$ $2x = 71$ $x = 35.5$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/2 y = 72$

$x + 1/2 \times 2 = 72$ $x = 71$

② $2x + y = 72$

$2x + 2 = 72$ $2x = 70$ $x = 35$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/2 y = 72$

$x + 1/2 \times 3 = 72$ $x = 70.5$

② $2x + y = 72$

$2x + 3 = 72$ $2x = 69$ $x = 34.5$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/2 y = 72$

$x + 1/2 \times 4 = 72$ $x = 71$

② $2x + y = 72$

$2x + 4 = 72$ $2x = 68$ $x = 34$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

$x \cdot X$	y	Y	x	X	$y \cdot Y$
72	0	0	36	72	0
71	2	1	35	70	2
70	4	2	34	68	4
69	6	3	33	66	6
68	8	4	32	64	8
67	10	5	31	62	10
66	12	6	30	60	12
65	14	7	29	58	14
64	16	8	28	56	16
63	18	9	27	54	18
62	20	10	26	52	20
61	22	11	25	50	22
60	24	12	24	48	24
59	26	13	23	46	26
58	28	14	22	44	28
57	30	15	21	42	30
56	32	16	20	40	32
55	34	17	19	38	34
54	36	18	18	36	36
53	38	19	17	34	38
52	40	20	16	32	40
51	42	21	15	30	42
50	44	22	14	28	44
49	46	23	13	26	46
48	48	24	12	24	48
47	50	25	11	22	50
46	52	26	10	20	52
45	54	27	9	18	54
44	56	28	8	16	56
43	58	29	7	14	58
42	60	30	6	12	60
41	62	31	5	10	62
40	64	32	4	8	64
39	66	33	3	6	66
38	68	34	2	4	68
37	70	35	1	2	70
36	72	36	0	0	72

第4章 緡銭慣行

$$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$$

x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価

x 、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価1対3、72文銭

① $a = 1$ $b = 1/3$ $c = 72$

② $a = 3$ $b = 1$ $c = 72$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/3y = 72$

$$x + 1/3 \times 1 = 72 \quad x = 71.666\cdots$$

② $3x + y = 72$

$$3x + 1 = 72 \quad 3x = 71 \quad x = 23.666\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/3y = 72$

$$x + 1/3 \times 2 = 72 \quad x = 71.333\cdots$$

② $3x + y = 72$

$$3x + 2 = 72 \quad 3x = 70 \quad x = 23.333\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/3y = 72$

$$x + 1/3 \times 3 = 72 \quad x = 71$$

② $3x + y = 72$

$$3x + 3 = 72 \quad 3x = 69 \quad x = 23$$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/3y = 72$

$$x + 1/3 \times 4 = 72 \quad x = 70.666\cdots$$

② $3x + y = 72$

$$3x + 4 = 72 \quad 3x = 68 \quad x = 22.666\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

$x \cdot X$	y	Y	x	X	$y \cdot Y$
72	0	0	24	72	0
71	3	1	23	69	3
70	6	2	22	66	6
69	9	3	21	63	9
68	12	4	20	60	12
67	15	5	19	57	15
66	18	6	18	54	18
65	21	7	17	51	21
64	24	8	16	48	24
63	27	9	15	45	27
62	30	10	14	42	30
61	33	11	13	39	33
60	36	12	12	36	36
59	39	13	11	33	39
58	42	14	10	30	42
57	45	15	9	27	45
56	48	16	8	24	48
55	51	17	7	21	51
54	54	18	6	18	54
53	57	19	5	15	57
52	60	20	4	12	60
51	63	21	3	9	63
50	66	22	2	6	66
49	69	23	1	3	69
48	72	24	0	0	72

$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$
 $x、y$ は枚数 $X、Y$ は価値 $a、b$ は比価
 $x、y、X、Y、$ は正数値 $1 \leq x < c \quad 1 \leq y < c$

◎精銭と悪銭の比価 1 対 4、96 文銭

① $a = 1 \quad b = 1/4 \quad c = 72$

② $a = 4 \quad b = 1 \quad c = 72$

○ $y = 1$ の場合

① $x + 1/4 y = 72$

$x + 1/4 \times 1 = 72 \quad x = 71.75$

② $4x + y = 72$

$4x + 1 = 72 \quad x = 17.75$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 2$ の場合

① $x + 1/4 y = 72$

$x + 1/4 \times 2 = 72 \quad x = 71.5$

② $4x + y = 72$

$4x + 2 = 72 \quad 4x = 70 \quad x = 17.5$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 3$ の場合

① $x + 1/4 y = 72$

$x + 1/4 \times 3 = 72 \quad x = 71.25$

② $4x + y = 72$

$4x + 3 = 72 \quad 4x = 69 \quad x = 17.25$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○ $y = 4$ の場合

① $x + 1/4 y = 72$

$x + 1/4 \times 4 = 72 \quad x = 71$

② $4x + y = 72$

$4x + 4 = 72 \quad 4x = 68 \quad x = 17$

・ $x、y、X、Y、$ の値が正数であるので、成立する。

$x \cdot X$	y	Y	x	X	$y \cdot Y$
72	0	0	18	72	0
71	4	1	17	68	4
70	8	2	16	64	8
69	12	3	15	60	12
68	16	4	14	56	16
67	20	5	13	52	20
66	24	6	12	48	24
65	28	7	11	44	28
64	32	8	10	40	32
63	36	9	9	36	36
62	40	10	8	32	40
61	44	11	7	28	44
60	48	12	6	24	48
59	52	13	5	20	52
58	56	14	4	16	56
57	60	15	3	12	60
56	64	16	2	8	64
55	68	17	1	4	68
54	72	18	0	0	72

第4章 緡銭慣行

$$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$$

x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価

$$x$$
、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎ 72 文銭、悪銭 30 文さし

○精銭と悪銭の比価が 1 対 2 の場合

$$\textcircled{1} a = 1 \quad b = 1/2 \quad c = 72$$

$$x + 1/2 y = 72$$

$$x + 1/2 \times 30 = 72 \quad x = 57$$

$$\textcircled{2} a = 2 \quad b = 1 \quad c = 72$$

$$2x + y = 72$$

$$2x + 30 = 72 \quad 2x = 42 \quad x = 21$$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

○精銭と悪銭の比価が 1 対 3 の場合

$$\textcircled{1} a = 1 \quad b = 1/3 \quad c = 72$$

$$x + 1/3 y = 72$$

$$x + 1/3 \times 30 = 72 \quad x = 62$$

$$\textcircled{2} a = 3 \quad b = 1 \quad c = 72$$

$$3x + y = 72$$

$$3x + 30 = 72 \quad 3x = 42 \quad x = 14$$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

○精銭と悪銭の比価が 1 対 4 の場合

$$\textcircled{1} a = 1 \quad b = 1/4 \quad c = 72$$

$$x + 1/4 y = 72$$

$$x + 1/4 \times 30 = 72 \quad x = 64.5$$

$$\textcircled{2} a = 4 \quad b = 1 \quad c = 72$$

$$4x + y = 72$$

$$4x + 30 = 72 \quad 4x = 42 \quad x = 10.5$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

$$a x + b y = c \quad X + Y = c \quad X = a x \quad Y = b y$$

x 、 y は枚数 X 、 Y は価値 a 、 b は比価

x 、 y 、 X 、 Y 、は正数値 $1 \leq x < c$ $1 \leq y < c$

◎ 72 文銭、悪銭 32 文さし

○精銭と悪銭の比価が 1 対 2 の場合

$$\textcircled{1} a = 1 \quad b = 1/2 \quad c = 72$$

$$x + 1/2 y = 72$$

$$x + 1/2 \times 32 = 72 \quad x = 56$$

$$\textcircled{2} a = 2 \quad b = 1 \quad c = 72$$

$$2x + y = 72$$

$$2x + 32 = 72 \quad 2x = 40 \quad x = 20$$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

○精銭と悪銭の比価が 1 対 3 の場合

$$\textcircled{1} a = 1 \quad b = 1/3 \quad c = 72$$

$$x + 1/3 y = 72$$

$$x + 1/3 \times 32 = 72 \quad x = 71.333\cdots$$

$$\textcircled{2} a = 3 \quad b = 1 \quad c = 72$$

$$3x + y = 72$$

$$3x + 32 = 72 \quad 3x = 40 \quad x = 13.333\cdots$$

・ x の値が正数でないので、成立しない。

○精銭と悪銭の比価が 1 対 4 の場合

$$\textcircled{1} a = 1 \quad b = 1/4 \quad c = 72$$

$$x + 1/4 y = 72$$

$$x + 1/4 \times 32 = 72 \quad x = 64$$

$$\textcircled{2} a = 4 \quad b = 1 \quad c = 72$$

$$4x + y = 72$$

$$4x + 32 = 72 \quad 4x = 40 \quad x = 10$$

・ x 、 y 、 X 、 Y 、の値が正数であるので、成立する。

景にあったといえよう。

おわりに

以上のように、中世日本の緡銭を使用するさいの特徴について分析した。緡銭を使用するさいの特徴は、二つ存在する。ひとつは異なる銭種をある一定の比率で混用する緡銭であり、いまひとつは百枚未滿の銭を百文として使用する短陌である。両者は併存でき、それを組み合わせた緡銭も存在した。

前者は混在している銭が特定の支払共同体でないと銭貨として使用できなかった。後者は中世後期において「九十七文銭」や「九十六文銭」など様々な値をとっていたことが確認できる。これは短陌が銭を数える手間賃や緡縄の代価という意味では理解できないことを示唆している。一緡のなかに異なる銭種を含み、しかも異種銭貨の間に比価が立つ場合（たとえば精銭と悪銭のように）、短陌の値は「九十七文銭」をとることはできない一方、「九十六文銭」や「七十二文銭」の値はとることができる。つまり、「九十六文銭」や「七十二文銭」が存在する背後には、異種銭貨の間に比価が存在していたのである。

註

- (1) 小葉田淳『日本貨幣流通史』（刀江書院、一九六九年、初版一九三〇年、以下小葉田淳著書A）。同『日本歴史新書 日本の貨幣』（至文堂、一九五八年、以下小葉田淳著書B）。
- (2) 石井進「銭百文は何枚か」（『石井進著作集 第十巻』岩波書店、二〇〇五年、初出一九八八年）。
- (3) 渡政和「絵画資料に見る中世の銭―緡銭の表現を中心に―」（『埼玉県立歴史資料館 研究紀要』一五・一六号、一九九三・一九九四年）、同「中世文献史料における「緡銭」表現について」（『出土銭貨』五号、

- 一九九六年）、同「錢貨―考古・文献・絵画資料からみた緡錢の表現―」（『歴史手帖』二四卷五号、一九九六年）。
- （4）伊藤俊一「省陌法をめぐって」（同『室町期荘園制の研究』塙書房、二〇一〇年）。
- （5）千枝大志「十五世紀末から十七世紀初頭における貨幣の地域性」（同『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』岩田書院、二〇一〇年）。
- （6）桜井英治「錢貨のダイナミズム」（鈴木公雄編『貨幣の地域史―中世から近世へ―』岩波書店、二〇〇七年）。
- （7）「守光公記」永正一二二年四月二七日条（『大日本史料』第九編之五）。
- （8）「目代重増日記紙背文書」（北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 古文書』北野天満宮、一九七八年）。
- （9）「永弘文書」一四八一号（『大分県史料』、本多博之「錢貨通用の実態」（同『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、二〇〇六年）、川戸貴史「地域的錢貨流通秩序の形成と大名権力」（同『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館、二〇〇八年）。
- （10）『鹿苑日録』明応八年二月二八日条（続群書類従完成会）。
- （11）「永弘文書」一七七八号（『大分県史料』、前掲（9）本多論文、前掲註（9）川戸論文。永楽錢と「荒錢」に関しては、本多博之と川戸貴史の間で解釈がわかれている。本多博之は、「荒錢」は永楽錢を指すものではなく、永楽錢は一定の条件下において精錢に位置づけられていたと述べている。一方、川戸貴史は、「荒錢」の史料と大内氏撰錢令の規定とが対応していることから、永楽錢は明らかに「荒錢」と呼ばれる錢貨に含まれていたのであると述べている。筆者の見解であるが、管見の限り、永楽錢と「荒錢」を直接的に結びつける史料は確認できなく、大内氏撰錢令の規定だけで、永楽錢が「荒錢」に含まれていたことを示すのは難しいと考えている。よって、本多博之の解釈に従いたい。
- （12）『大日本古文書 家わけ四 石清水文書』八〇二号。
- （13）鍛代敏雄『戦国期の石清水と本願寺―都市と交通の視座―』（法蔵館、二〇〇八年）を参照。

- (14) 註(1) 小葉田著書Bを参照。
- (15) 『大乘院寺社雜事記』文明十二年十二月二日条。
- (16) 嶋谷和彦「出土銭貨の語るもの」(小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『モノとココロの資料学―中世史料論の新段階―』高志書院、二〇〇五年)。
- (17) 「永弘文書」二〇〇〇号(『大分県史料』)。
- (18) 「永弘文書」二〇〇二号(『大分県史料』)。
- (19) 前掲註(9) 本多論文。
- (20) 「渋谷文書(渋谷謹次所蔵)」五号(『広島県史 古代・中世資料編Ⅳ』)。
- (21) 及川亘「中・近世移行期の都市商人と町」(勝俣鎮夫編『中世人の生活世界』山川出版社、一九九六年)を参照。
- (22) 「善福寺文書」(『防長風土注進案 第十三卷 山口宰判 下』)。
- (23) 本多博之「南京銭と鍛」(同『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、二〇〇六年)。
- (24) 前掲註(5) 千枝論文。
- (25) 前掲註(4) 伊藤論文。

第五章 計算方法

はじめに

中世日本において、錢貨はどのように計算されていたのであろうか。本章では、短陌（省陌）の計算方法について、歴史的変化に着目して考察する。中世日本における短陌（省陌）の計算方法については、伊藤俊一が目錢の意味を論じるなかでその存在についてふれる程度で、その歴史的な意味はあまり論じられていない。^①

一方、中国における短陌の計算方法についてをみると、宮澤知之が宋代における短陌の問題を論じるなかで、短陌の計算方法を分析の組上にのせ、宋代における貨幣経済の特質を明らかにしている。^② 宮澤は、中国宋代における短陌の問題を財政上の短陌、銅錢と紙幣の交換レートとしての短陌、商品流通にかかわる短陌に分類した上で、その具体的内容を検討し、そのなかで短陌の計算方法には二つの方式が存在することを明らかにした。ひとつは短陌の値を位取りとして用いる位取り方式であり、^③ 価格は財貨の交換価値と一対一で対応するものの、これを比例的に表示できないとする。いまひとつは短陌の値を比例定数として用いる比例定数方式であり、価格は銅錢の実数で示される財貨の交換価値を比例的に表示できるとする。これら二方式は位取り方式が銅錢と紙幣の換算や商品流通にかかわる短陌で使用され、比例定数方式が国家の財政上、省錢に換算するときに用いられた。そして、宋代の商品市場における価格の形成が位取り方式をとる短陌の存在によって商品が本来もっている交換価値を正しく反映しないこと、異なる短陌の存在によって当時の市場の流通は孤立的であったこと、孤立的ではあっても一応独立した生産流通の機構が形成され、国家の直接的、統率的な商業政策を後退させたこと、などを指摘した。

さらに宮澤は、六朝時代における短陌の問題を取り上げたなかで、宋代の短陌と比較検討し、その内容と意義を明らかにした。⁽⁴⁾ すなわち、六朝時代の短陌が宋代の商品経済に関わる短陌と基本的に同種であると仮定した上で、宋代の短陌と異なる点は、短陌の値の違いが業種別ではなく、地域的な差異であること、「長銭」と「短陌」の取引が成立したように、名目一陌銭は実質が異なっても等価であること、などを指摘した。

こうした点を踏まえると、短陌(省陌)の計算方法は中世日本においても有効な分析方法の一つと考えられる。つまり、中世日本の緡銭を論じるなかで、短陌(省陌)の計算方法を分析し、それを歴史的に位置づけることは、緡銭の様相が明らかになるだけでなく、当該期における貨幣の特質を追究できると思われる。

そこで本章では、短陌の計算方法について、位取り方式と比例定数方式の二方式に分類し、その使用実態を検討することによって、中世日本における計算方法の特質を明らかにしたい。

第一節 位取り方式

第一の短陌の計算方法は位取り方式である。位取り方式とは、短陌値を位取りとする計算方法で、【表1】は位取り方式の計算式である。例えば、短陌値が「九六」の場合は、銭一枚Ⅱ一文、二枚Ⅱ二文……九五枚Ⅱ九五文、九六枚Ⅱ一〇〇文となり、「九六」の時に位を変更する。以降、九七枚Ⅱ一〇一文、九八枚Ⅱ一〇二文……一九一枚Ⅱ一九九文、一九二枚Ⅱ二〇〇文と数えていく。実枚数は、緡銭と短陌値をかけた上で、バラ銭を足してあらわせる。(但しバラ銭数は短陌値未満となる)。価格は、緡銭数に一〇〇を掛けた上で、バラ銭を足してあらわせる。実枚数と価格との関係を見てみると、価格は一〇〇から短陌値を引いた数を緡銭数を掛けた上で、実枚数を足すと表示される。

ところで、中世日本における銭貨使用の場では、位取り方式の計算方法が用いられていたが、史料上その様相は短陌の緡銭をバラすときやそれとは逆に短陌の緡銭をつくるときに表面化する。

【表1】 位取り方式の計算方法	
実枚数	実枚数 = (緡銭数 × 短陌値) + バラ銭 (0 ≤ バラ銭数 < 短陌値)
価格	価格 = 緡銭数 × 100 + バラ銭数
実枚数と価格との関係	価格 = 実枚数 + 緡銭数 × (100 - 短陌値)

まず、短陌の緡銭をバラした事例として【史料1】をみてみたい。

【史料1】

一、同日、西京よりの能信取沙汰にて料足壹貫文、是を能忠三百卅二文、目代三百卅二文、能信三百卅二文つ、分候て給御法也、百卅二文未進也、

【史料1】は「目代日記」永禄三年（一五六〇）九月九日条である。^⑤これによれば、「西京」から届く銭一貫文は、能忠・目代（慶世）・能信の三人に三三二文づつ分配する「御法」であったことがわかる。当該期の「西京」は、北野社の御供所である「八嶋屋」に御供・餞供を貢納していた。^⑥それは月三度（毎月一日・一日・二日）の御供と年三度（毎年三月三日・五月五日・九月九日）の餞供を基本とし、定期的に行われていた。^⑦よって、「西京」から届く銭一貫文は九月九日の餞供として納められるものと考えられる。

ここで注目したいのは、一貫文を三人で分けた結果が一人あたり三三二文となっていることである。たとえば、一貫文が一〇〇〇枚の現銭と想定して、三人に分配すると、

$$1,000 \text{ 枚} \div 3 \text{ 人} = 333 \text{ 文余り } 1 \text{ 文}$$

となり、実際の三三二文とは異なってしまう。この場合の計算式は、

$$1 \text{ 貫文} = 10 \text{ 緡}$$

$$10 \text{ 緡} \div 3 \text{ 人} = 3 \text{ 緡余り } 1 \text{ 緡}$$

$$1 \text{ 緡} \div 3 \text{ 人} = 32 \text{ 文}$$

$$3 \text{ 緡} + 32 \text{ 文} = 332 \text{ 文}$$

となる。一貫文は一〇〇〇枚の現銭ではなく、一〇個の緡銭であり、それを三人で分けて一人あたり三緡となる。余った一緡をバラして三人で分けると三三二文づつ受け取っており、一緡が

九六枚であったことが判明する。能忠・目代（慶世）・能信の三人が受け取った三三二文の内実は三緡と三二枚であり、緡銭（名目額）とバラ銭（実枚数）の組み合わせであった。なお、三三二文の銭の実枚数は三二〇枚（三緡×九六文銭+三二枚＝三二〇枚）となる。次に短陌の緡銭をつくって計算した事例として【史料2】をみる。

【史料2】

（端裏ウハ書）

「 當庵へ之

長芦寺より之算用状共也、色々日記在之」

永正十六年

如意庵施食小日記

棚盛内

廿五文 茄子汁菜共

廿五文 瓜

三文 水向米

三文 落葉

卅文 虫火

廿文 油ランタウ迄

六十五文 幡帟色々

百廿四文 米七升五合
内八合河原者

在 根芋

在 枚大豆

在	大角豆
以上	
同酒并肴之入目	
六百卅二文	酒
貳百文	餅
卅五文	白瓜
七十八文	増 <small>棚汁菜共</small>
廿文	薪
六十文	桃果子
三文	筋
五文	大根
三文	酢
十文	夕顔
十二文	引合踵帋
在	梅干
在	干薇

以上壹貫三百六十五文

【史料2】は、永正一六年（一五一九）の如意庵施食小日記である。⁽⁸⁾これは、施食に必要な材料や酒・肴の費用が記されているが、ここではその合計金額が「壹貫三百六十五文」であったことに注目したい。仮に短陌の緡錢を前提とせずに合計金額を計算してみると、

$$25 \text{ 文} + 25 \text{ 文} + 3 \text{ 文} + 3 \text{ 文} + 30 \text{ 文} + 20 \text{ 文} + 65 \text{ 文} + 124 \text{ 文} + 632 \text{ 文} + 200 \text{ 文} + 35 \text{ 文} + 78 \text{ 文} + 20 \text{ 文} + 60 \text{ 文} + 3 \text{ 文} + 5 \text{ 文} + 3 \text{ 文} + 10 \text{ 文} + 12 \text{ 文} = 1353 \text{ 文}$$

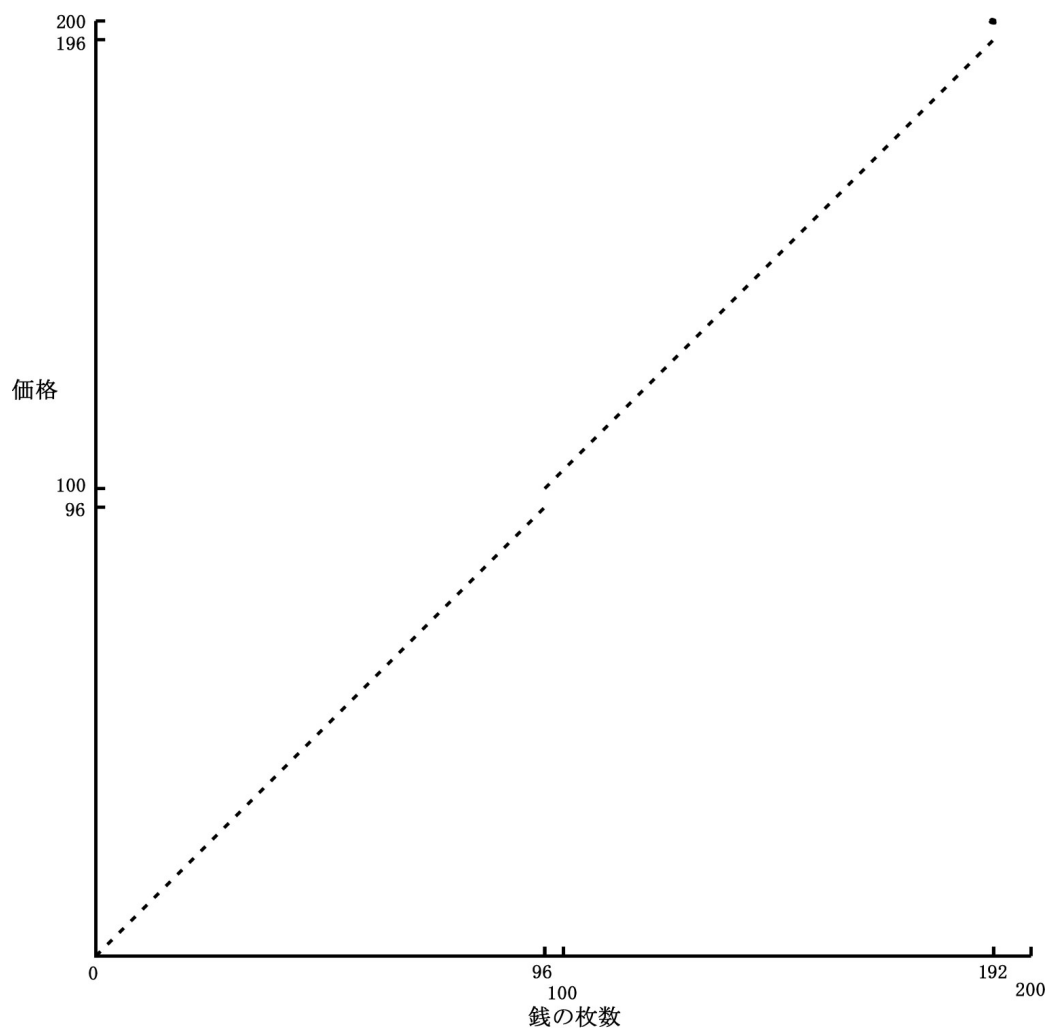
となる。計算した一三五三文と史料上にみえる「壹貫三百六十五文」と間には一二文の誤差が生まれる。この場合、短陌の緡銭とバラ銭を考慮とした上で、合計金額を計算する必要がある。その計算式は、

$$\begin{aligned} & (1 \text{ 緡} + 6 \text{ 緡} + 2 \text{ 緡}) + (25 \text{ 枚} + 25 \text{ 枚} + 3 \text{ 枚} + 3 \text{ 枚} + 30 \text{ 枚} + 20 \text{ 枚} + 65 \text{ 枚} + 24 \text{ 枚} + 32 \text{ 枚} + 35 \text{ 枚} + 78 \text{ 枚} + \\ & 20 \text{ 枚} + 60 \text{ 枚} + 3 \text{ 枚} + 5 \text{ 枚} + 3 \text{ 枚} + 10 \text{ 枚} + 12 \text{ 枚}) = 9 \text{ 緡} + (453 \text{ 枚}) = 9 \text{ 緡} + (97 \times 4) \text{ 枚} + 65 \text{ 枚} = 13 \text{ 緡} \\ & + 65 \text{ 枚} = 1365 \text{ 文} \end{aligned}$$

となる。緡銭とバラ銭を区別して数えたと緡銭九緡とバラ銭四五三枚であったことがわかる。短陌値「九十七文銭」と設定した上で、バラ銭四五三枚から緡銭をつくると四緡でき、残り六五枚となる。とすれば、一三緡の緡銭と六五枚のバラ銭（＝一貫三六五文）であり、合計金額が一致する。すなわち、ここでの「壹貫三百六十五文」とは、一三緡の緡銭と六五枚のバラ銭であったことが判明する。銭がある一定の枚数（短陌値）に達した時に緡銭ができ、それを切った時にバラ銭になる。つまり、位取り方式は短陌の値に達していないと実枚数、短陌の値になった場合に名目額で表される。これは、位取り方式の価格が実枚数と名目額の組み合わせによって構成されていたことを意味している。

位取り方式による価格表示のさい、こうした点が大きな意味を持つ。【図1】は、短陌値九六のとき、位取り方式の価格と銭の関係を示したものである。縦軸が価格、横軸が銭の枚数を表す。

まず、位取り方式によって価格を表現するとき、価格に空白が生じる点（例えば、九六文から九九文、一九六文から一九九文の価格が存在しない）に注目したい。すでに宮澤知之が指摘しているように、位取り方式の価格が、銭の個数で示される財貨の交換価値と比例しない⁹⁾。すなわち、位取り方式の価格は商品の価値と不一致であることを示しているのである。



【図 1】 短陌値 96 の位取り方式の価格

次に、位取り方式の価格は必ず正数値をとり、端数の値が存在しない点に注目したい。これは、位取り方式の価格が、連続的な値ではなく、離散的な値で表現していることを示している。すなわち、位取り方式の価格は銅銭のような個数を正しく表現できるが、銀といった量を正しく表現できないことになる。

以上、位取り方式について検討してきた。中世日本における錢貨使用の現場では、位取り方式が用いられていた。現実の緡銭（名目額）とバラ銭（実枚数）の組み合わせであり、商品の価値と価格は一致しなかった。位取り方式による価格の値は、必ず正数値をとり、端数の値をとらない。そのため、銅銭によって価格を表現できるが、銀によって価格を表現できないのである。

第二節 比例定数方式

第二の短陌の計算方法は比例定数方式である。比例定数方式とは、短陌の値を比例定数として用いる計算方法で、【表2】は比例定数方式の計算式を示したものである。例えば、九六文銭の場合、一枚は一・〇四一六六……文、二枚は二・〇八三三三三……文、九五枚は九八・九五八三三三……文、九六枚は一〇〇文となり、以降、九七枚は一〇一・〇四一六六……文、九八文は一〇二・〇八三三三三……と数えていき、一九二枚＝二〇〇文となる。実枚数は、位取り方式と同じように、緡銭と短陌値をかけた上で、バラ銭を足してあらわせる。（但しバラ銭数は短陌値未満となる）。価格は実枚数を短陌値で割った上で、百を掛けることで表現できる。

さて、中世日本（少なくとも錢貨使用の場合）において比例定数方式の計算方法を用いた事例は管見の限り存在しない。しかし、江戸初期の和算書には位取り方式と比例定数方式の換算が確認できる。そのひとつが『因帰算歌』^⑩という和算書である。これは寛永一十七年（一六四〇）に今村知商が著したものであるが、その例題には位取り方式と比例定数方式との換算が記されている。

【表2】 比例定数方式の計算方法	
実枚数	実枚数 = (緡銭数 × 短陌値) + バラ銭 (0 ≤ バラ銭数 < 短陌値)
価格	価格 = (緡銭数 × 短陌値 + バラ銭数) × $\frac{100}{\text{短陌値}}$
実枚数と価格との関係	価格 = 実枚数 × $\frac{100}{\text{短陌値}}$

【史料3】

(a)

又銭百と数六十六文あり、但数九十六文を百にして此数を百位になをして百六八七五
 二成

此式モ帰両直同意

百と文あるは文はかり 九六わり

幾百幾幾 幾と知なり

(b)

又銭百六八七五あり 但百は数九十六文二して此幾幾を文になをして百六十六文二成

此式モ因両直同意

幾百幾 幾幾はかり 九六かけ

幾百幾十 幾文とする

(a) は「数」を「百位」に換算する例題である。「銭百と数六十六文」とあるのは、名目額「百文」と実枚数「六十六文」の組み合わせで、これは位取り方式の値を意味する。また、「但数九十六文を百にして」とあるのは、実枚数から名目額にすることを指し、その時の短陌値は九六ということがわかる。そして、「百六八七五」はこの式の答えで、名目値を表示している。「百と文あるは文はかり九六わり」は計算方法を表しており、この計算式は、

$$100 \text{ 文} + (66 \text{ 文} \div 96 \times 100) = 168.75$$

となる。「百六八七五」とは比例定数方式で計算した結果の値を意味する。したがって、

この計算式は、位取り方式から比例定数方式に換算することを示している。

(b) は「百位」以下の値の「幾々」を「文」に換算する式の例題である。「銭百六八七五」とあるのは銭の名目額を表し、これは比例定数方式での名目額を意味する。また「但百は数九十六にして」とあるのは、名目額から実枚数への換算であり、短陌値が九六ということがわかる。「百六十六文」がこの問の答えで、名目額と実枚数を表示している。「幾百幾、幾幾はかり九六かけ」は計算方法を表し、この計算式は、

$$100 \text{ 文} + (68.75 \times 96 \div 100) = 166 \text{ 文}$$

である。「百六十六文」とは位取り方式で計算した結果の値を意味する。したがって、この計算式は比例定数方式から位取り方式に換算することを示している。

では、位取り方式と比例定数方式の換算はいかなる場合に用いたのであろうか。この問題を考えるには江戸初期の和算書である『塵劫記』が参考になるだろう。^①

【史料4】

(a)

▲銀貳百拾貳匁五分有時、壹貫匁に付十七匁にして右之かねにハ、せになにほとそといふ時に
せに拾貳貫五百文といふ

銀貳百貳匁五分と右におき、さうば拾七匁をもつてわる時に、拾貳貫五壹百匁としるゝなり、

(b)

▲せにかはゞ、さうはでかねをわりてよし、百よりうちハ四をかけてひく

銀七拾六匁七分有時、せに壹貫文二付、十六匁にして、右之かねにハ、せに、な程そといふ時、^(に脱カ)

せに四貫七百九十文といふ、

右にかね七十六匁七分を置、十六匁にてわる、百よりうちにハ、しもより四をかけて引也、

(c)

▲せに六貫八百匁有時、壹貫文二付十七匁にして、右之せにのかねなにほとそといふ時
銀百拾五匁六分といふ也

先六貫八百匁と右におき、左に拾七匁を置、右之せにさうば十七匁をもつてかける也、

(d)

▲せに七貫三百七拾貳文有時、一貫文二付十八匁にして、右之せにのかねなにほとそといふ時に、
銀百三拾貳匁七分五りといふ、

せにを右に置、先七十貳文に目をいたして置時、七貫三百七十五文と成、これに十八匁をかける也、

【史料4】は吉田光由が著した『塵劫記』の第十四「せにうりかひの事」の一部である。初版の刊行年はわかっていないが、『塵劫記』の序文に寛永四年（一六二七）とあることから、寛永四年（一六二七）またはそれ以前とされる⁽²⁾。

まず、(a)と(b)は銀を銭に交換するときの例題である。

(a)は銭一貫文につき銀一七匁であるとき、銀二一二匁五分は銭ではいくらかという問題であり、その答えは銭一二貫五〇〇文である。計算式は、

$$212 \text{ 匁 } 5 \text{ 分} = 2125 \text{ 匁}$$

$$1 \text{ 貫文} = 17 \text{ 匁}$$

$$2125 \text{ 匁} \div 17 \text{ 匁} = 125 \text{ 貫文} = 12 \text{ 貫 } 500 \text{ 文}$$

となる。「銀貳百貳匁五分と右におき、さうば拾七匁をもつてわる」とあるように、銀を銭に交換するときは、銀を銀相場で割る計算方法である。すなわち、銀二一二匁五分を一七匁で割ると一二貫五〇〇文となる。

(b)は銭一貫文につき銀一六匁であるとき、銀七六匁七分は銭ではいくらかという問題で、その答えが四貫

七九〇文である。計算式は、

$$76\text{ 匁}7\text{ 分} = 76.7\text{ 匁}$$

$$1\text{ 貫文} = 16\text{ 匁}$$

$$76.7\text{ 匁} \div 16\text{ 匁} = 4.79375\text{ 貫文} = 4.793.75\text{ 文} = 47\text{ 緡}93.75\text{ 文}$$

$$93.75\text{ 文} \times 1.04 = 97.5\text{ 文}$$

$$97.5\text{ 文} - 93.75\text{ 文} = 3.75\text{ 文}$$

$$4.793.75\text{ 文} - 3.75\text{ 文} = 4.790\text{ 文}$$

となる。まず、「かね七十六匁七分を置、十六匁にてわる」とあるように、七六匁七分を一六匁でわると銭四貫七九三文七五となる。「百よりうちにハ、しもより四をかけて引也」とあるように、九三文七五に一・〇四をかけて九七文五となり、九七文五を九三文七五で引くと三文七五となる。さらに銭四貫七九三文七五を三文七五で引くと四貫七九〇文となる。

以上の計算式は『塵劫記』に記されたものをそのまま数式で表したものである。非常に複雑であるが、実はこの場合、【史料3】の計算式を用いて、「百」以下を「九六かけ」でも表すことができる。計算式は、

$$76.7\text{ 匁} \div 16\text{ 匁} = 4.79375\text{ 貫文} = 4.793.75\text{ 文} = 47\text{ 緡}93.75\text{ 文}$$

$$1\text{ 貫文} = 16\text{ 匁}$$

$$93.75\text{ 文} \times 0.96 = 90$$

$$4.700\text{ 文} + 90\text{ 文} = 4.790\text{ 文}$$

となる。この計算は比例定数方式から位取り方式に換算することを意味しており、ここでの短陌の値は九六である。

次いで(c)と(d)は銭を銀に交換するときの例題である。

(c) は、錢六貫八〇〇文は銀でいくらほどかという問題で、その答えが銀一一五匁六分である。計算式は

$$1 \text{ 貫文} = 17 \text{ 匁}$$

$$6 \text{ 貫} 800 \text{ 文} = 6.8 \text{ 貫文}$$

$$6.8 \text{ 貫文} \times 17 \text{ 匁} = 115.6 \text{ 匁}$$

となる。「先六貫八百匁(文)と右におき、左に拾七匁を置、右之せにさうば十七匁をもつてかける也」とあるように、錢を銀に交換するときは、錢を錢相場で掛ける計算方法である。すなわち、錢六貫八〇〇文に一七匁を掛けて銀一一五匁六分となる。

(d) は錢一貫文につき銀一八匁であるとき、錢七貫三七二文は銀でいくらほどかという問題で、その答えが銀一三二匁七分五厘である。計算式は

$$\text{錢} 7.372 \text{ 文} = 7.372 \text{ 貫文} = 73 \text{ 緡} 72 \text{ 文}$$

$$1 \text{ 貫文} = 18 \text{ 匁}$$

$$72 \text{ 文} \div 0.96 = 75 \text{ 文}$$

$$7.375 \text{ 貫文} \times 18 \text{ 匁} = 132 \text{ 匁} 7 \text{ 分} 5 \text{ 厘}$$

となる。「七十式文に目をいたして置時」とあるのは位取り方式から比例定数方式に換算(七二文 \div 〇・九六 \parallel 七五文)を意味する。換算すると、「七貫三百七十五文」となり、これに一八匁をかけると一三二匁七分五厘となる。

ここで注目すべきは、錢と銀の交換のさいに計算方式を変えていることである。銀を錢に交換する場合は比例定数方式から位取り方式に変換し、それとは逆に、錢を銀に交換する場合、位取り方式から比例定数方式に変換している。緡錢の価値を錢で価格表示するときは位取り方式を用いるのに対して、緡錢の価値を銀で価格表示するときは比例定数方式を用いる。これは銀が比例定数方式で、錢が位取り方式で、価格表示していることを意味する。

【図2】は、比例定数方式の価格と銭の枚数との関係を示したものである。短陌値九六の場合縦軸は価格、横軸は銭の枚数を表す。

比例定数方式の価格は、比例的に価格を表現でき、正数値だけでなく、端数の値も表現できる。先にみた位取り方式が離散的な値をとるのに対して、比例定数方式は連続的な値をとることを示している。比例定数方式の価格は銀といった量を正しく表現できるのである。

このように計算方式を変換することは、『因帰算歌』や『塵劫記』といった和算書だけでなく、「年行事帳」といった当該期の勘定記録などでも確認できる。

【史料5】

(a)

万遣方覚

(中略)

已上

一、惣請取方

五百四十式匁七分六厘九モ

一、遣方

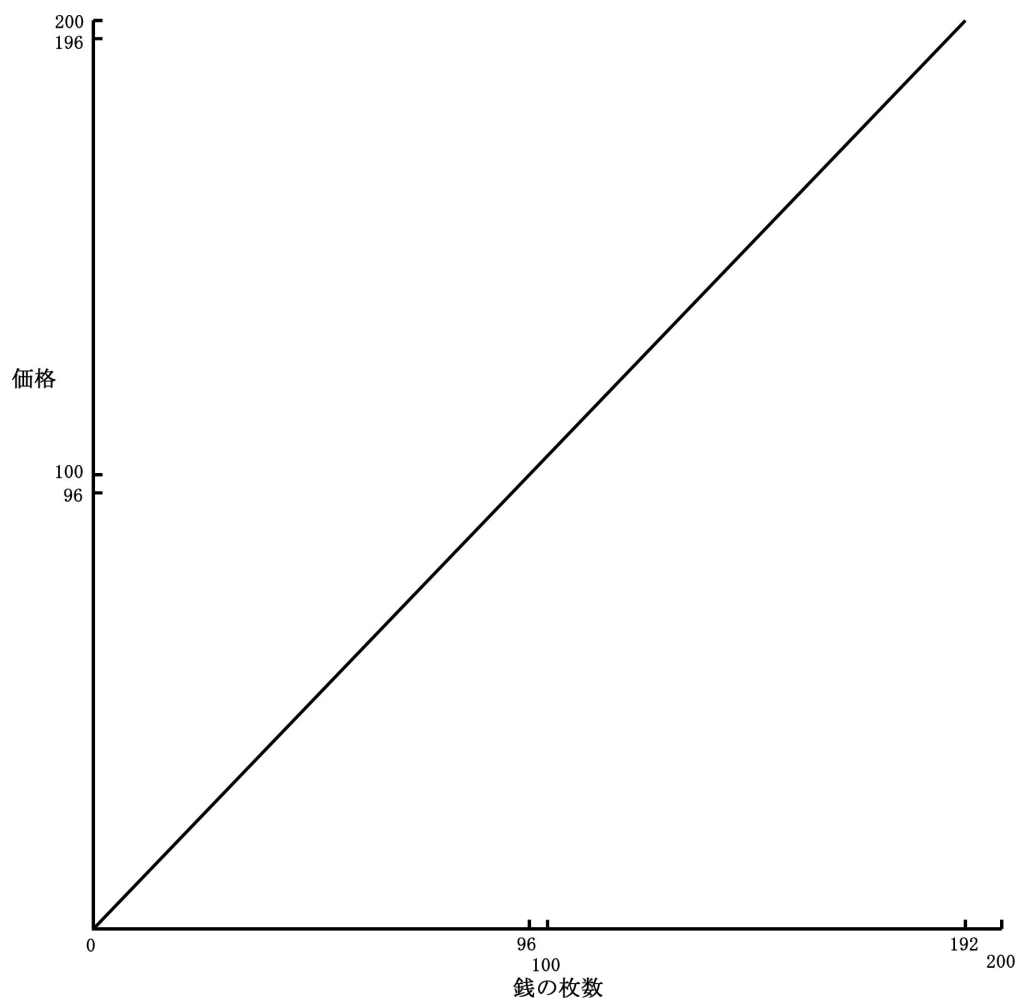
四百九十三式分七リン

一、料足遣方

壹貫四百六十三文、十八匁五分銀二直シテ

此銀廿七匁壹分壹リン

遣方



【図 2】 短陌値 96 の比例定数方式の価格

二口合五百貳拾目三分八リン
引残而廿貳匁三分八リン九毛、

(b)

遣方覚

(中略)

右之帳面銀子払方

壹貫六百五拾六匁八分八リン三毛

錢之払方三貫貳百七拾八文ヲ十六匁ノさん用ニ銀ニ直シ五拾貳匁五分也、

右惣高合払方壹貫七百九匁三分八リン三毛也、

右指引残而卅壹匁參分九リン五毛也、

(c)

錢銀払方覚

(中略)

右払方之銀、都合六百六拾三匁七分七リン

同払方之錢、都合二貫八百九十文

右十六匁錢^(銀)ニ直シ、四拾六匁三分

右貳口合七百拾匁七リン

【史料5】は「年行事帳」と題する北野社宮仕「衆中」の勘定記録である。(a)は寛永七年(一六三〇)一月、寛永八年(一六三一)一月の「万遣方覚」⁽¹³⁾で、(b)は慶安二年(一六四九)二月、慶安三年(一六五〇)二月の「遣方覚」⁽¹⁴⁾で、(c)は寛文二年(一六六二)二月、寛文三年(一六六三)二月の「錢銀払方覚」で

ある。⁽¹⁵⁾これらによれば、銀と銭の支出をそれぞれ表示したうえで、銭を銀に換算していることがわかる。

ここで注目すべきことは、支出の銭を銀に換算する方法である。

(a) の場合、銭一貫文につき銀「十八匁五分」のとき、銭「壹貫四百六十三文」を銀に換算すると「廿七匁分壹リン」となる。短陌の計算方式を変換しないで、つまり足陌で計算すると、

$$1 \text{ 貫 } 463 \text{ 文} = 1.463 \text{ 貫文}$$

$$\text{銭 } 1 \text{ 貫文} = \text{銀 } 18.5 \text{ 匁}$$

$$1.463 \text{ 貫文} \times 18.5 \text{ 匁} = 27.0655 \text{ 匁}$$

となり、銀「廿七匁分壹リン」にはならない。そこで短陌値を九六と仮定し、計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換したうえで計算すると、

$$1 \text{ 貫 } 463 \text{ 文} = 14 \text{ 繕 } 63 \text{ 文}$$

$$\text{銭 } 1 \text{ 貫文} = 18.5 \text{ 匁}$$

$$63 \text{ 文} \div 0.96 = 65.625 \text{ 文}$$

$$1.465625 \text{ 貫文} \times 18.5 \text{ 匁} = 27.114062 \text{ 匁}$$

となり、毛の位を四捨五入すれば、銀「廿七匁分壹リン」と一致する。

(b) の場合、銭一貫文につき銀「十六匁」のとき、銭「三貫貳百七拾八文」を銀に換算すると「五拾貳匁五分」となる。短陌の計算方式を変換しないで足陌で計算すると、

$$3 \text{ 貫 } 278 \text{ 文} = 3.278 \text{ 貫文}$$

$$\text{銭 } 1 \text{ 貫文} = \text{銀 } 16 \text{ 匁}$$

$$3.278 \text{ 貫文} \times 16 \text{ 匁} = 52.448 \text{ 匁}$$

となり、銀「五拾貳匁五分」にはならない。そこで (a) と同様に、短陌値を九六と仮定し、計算方式を位取り

方式から比例定数方式に変換したうえで計算すると、となり、銀「五拾貳匁五分」にはならない。そこで（a）と同様に、短陌値を九六と仮定し、計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換したうえで計算すると、

$$3\text{貫}278\text{文} = 32\text{緡}78\text{文}$$

$$\text{錢}1\text{貫文} = \text{銀}16\text{匁}$$

$$78\text{文} \div 0.96 = 81.25\text{文}$$

$$3.28125\text{貫文} \times 16\text{匁} = 52.5\text{匁}$$

となり、銀「五拾貳匁五分」と一致する。

（c）の場合、錢一貫文につき銀「十六匁」のとき、錢「二貫八百九十文」を銀に換算すると「四拾六匁三分」となる。短陌の計算方式を変換しないで足陌で計算すると、

$$2\text{貫}890\text{文} = 2.890\text{貫文}$$

$$\text{錢}1\text{貫文} = \text{銀}16\text{匁}$$

$$2.890\text{貫文} \times 16\text{匁} = 46.24\text{匁}$$

となり、銀「四拾六匁三分」にはならない。ここでも（a）や（b）と同様に、短陌値を九六と仮定し、計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換したうえで計算すると、

$$2\text{貫}890\text{文} = 28\text{緡}90\text{文}$$

$$\text{錢}1\text{貫文} = \text{銀}16\text{匁}$$

$$90\text{文} \div 0.96 = 93.75\text{文}$$

$$2.89375\text{貫文} \times 16 = 46.3\text{匁}$$

となり、銀「四拾六匁三分」と一致する。

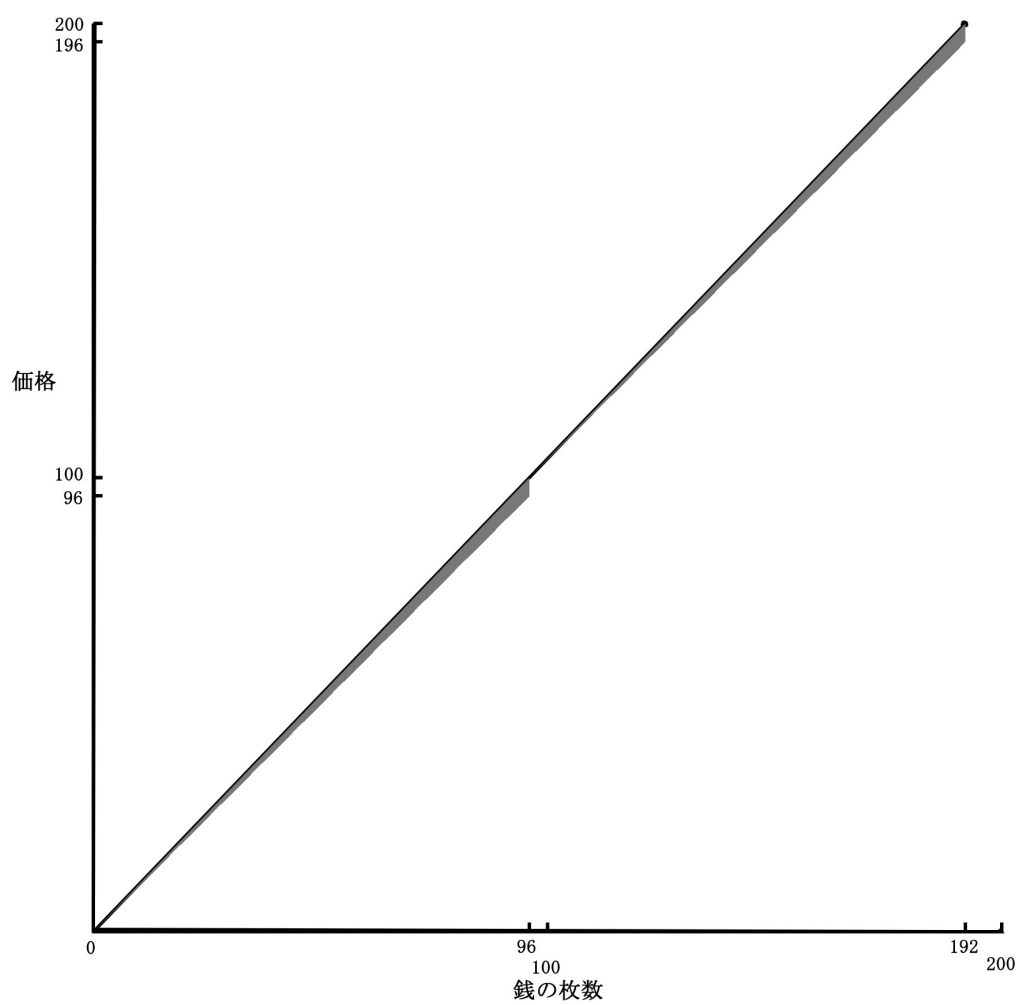
このように、錢から銀に換算するときに計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換していることが明らか

であろう。

では、なぜ短陌の計算方式を変換したのであろうか。この問題は位取り方式と比例定数方式の価格表示の方法に要因があると考えられる。実は、銭百枚を「百文」とする足陌では、位取り方式と比例定数方式の価格は一致するが、銭百枚未満を「百文」とする短陌では、位取り方式と比例定数方式の価格が違ってくる。【表3】は、短陌値九六のとき、位取り方式と比例定数方式の価格を示したもので、【図3】が位取り方式と比例定数方式の価格差を図示したもので、縦軸が価格、横軸が銭の枚数を表す。これによれば、「百文」・「二百文」といった場合を除いて、位取り方式と比例定数方式の価格が違っていることがわかる。位取り方式は名目額と実枚数の組み合わせで、比例定数方式は名目額で、価格表示している。そのため、名目額と実枚数による価格の相違が生じる

実枚数	比例定数方式	位取り方式
192 枚	200 文	200 文
191	198.958333·····	195
190	197.916666·····	194
189	196.875	193
188	195.833333·····	192
187	194.791666·····	191
186	193.75	190
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
166	172.916666·····	170
165	171.875	169
164	170.833333·····	168
163	169.791666·····	167
162	168.75 文	166 文
161	167.708333·····	165
160	166.666666·····	164
159	165.625	163
158	164.583333·····	162
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
100	104.166666·····	104
99	103.125	103
98	102.083333·····	102
97	101.041666·····	101
96	100 文	100 文
95	98.958333·····	95
94	97.916666·····	94
93	96.875	93
92	95.833333·····	92
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
7	7.291666·····	7
6	6.25	6
5	5.208333·····	5
4	4.166666·····	4
3	3.125	3
2	2.083333·····	2
1	1.041666·····	1

【表3】 短陌値 96 の場合の価格



【図3】 短陌値 96 の位取り方式と比例定数方式の価格差

こととなる。

また、銭と銀とは価格体系の原理が異なっている。なぜなら、銭は計数貨幣であるから枚数を数えるが、緡銭が短陌のとき、緡銭による価格は名目価格で（たとえば九六枚で一〇〇文というように）、端数は実枚数の価格（たとえば九五枚で九五文）であって正比例しないのに対して、銀は重量がそのまま価格をあらわす秤量貨幣であり、銀の量と価格は正比例するからである。

さらに、銭はその個数を価格として表示することによって、その値は正数値をとり、小数点以下の端数が存在しない。それに対して、銀は重さを価格として表示するため、その値は正数かとれるのはいうまでもなく、小数点以下の端数も表現できる。言い換えれば、銭は離散的な値で価格を表現しているのに対して、銀は連続的な値で価格を表現しているのである。

つまり、銭から銀、銀から銭への換算方法は価格体系の変換を意味する。これは短陌が存在する場合、銭と銀の価格表示が対称的でないことを示している。

位取り方式だけで計算する銭単独の世界に、比例定数方式の銀が登場すると、銭と銀との二つの方式が混ざることになる。日本における比例定数方式の登場は、銀による価格計算が普遍化し銭と銀がリンクするにいたった貨幣経済の段階を表現する。

以上のように、短陌の計算方法を検討した。短陌の計算方式は、位取り方式と比例定数方式に二分できる。中国宋代では国家財政における比例定数方式と商品流通の使用の位取り方式とにわかれた。それに対して、日本では位取り方式のみの使用が銭単独使用の世界であり、比例定数方式の登場が銭と銀がリンクした世界と区別できる。二種類の短陌計算は、日本では時間的な差であるのに対して、中国では同時併存であることは史料上からいえる。このことから、貨幣慣行の違いは商品経済に直接対応するとは論理的にはいえない。社会構造・商品経済の段階の違いなどの条件に加えて、貨幣慣行の違いが説明できる。無媒介に商品経済と結びつけるのが近代主義

そのものである。

おわりに

本章では、中世日本における短陌の計算方法について検討した。

短陌の計算方法は、短陌の値を位取りとして用いる位取り方式と短陌の値を比例定数として用いる比例定数方式の二方式が存在する。中世日本（少なくとも銭貨使用の場合）では、位取り方式のみ用いており、比例定数方式を用いた事例は存在しない。日本において比例定数方式を用いるようになるのは、銭から銀、銀から銭に交換するときである。短陌を前提とするとき、銭と銀の価格体系は同じではない。そのため、銀の価格を表示するには、短陌の計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換する必要があった。つまり、比例定数方式の登場が、銭単独の世界から、銭と銀がリンクした世界へと転換したことを意味しているのである。

註

- (1) 伊藤俊一「省陌法をめぐって」(同『室町期荘園制の研究』塙書房、二〇一〇年)。
- (2) 宮澤知之「唐宋時代の短陌と貨幣経済的特質」(同『宋代中国の国家と経済―財政・市場・貨幣―』創文社、一九九八年、初出一九八八年)。
- (3) 伊藤俊一が前掲註(1)論文のなかで取り上げている加減乗減という計算方法は、位取り方式のことを指していると思われる。
- (4) 宮澤知之「魏晋南北朝時代の貨幣経済」(『鷹陵史学』二六号、二〇〇〇年)。
- (5) 「目代慶世引付」永祿三年(一五六〇)九月九日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』

北野天満宮、一九七五年）。

- (6) 八嶋屋については、高橋大樹「中世北野社御供所八嶋屋と西京」(日次紀事研究会編『年中行事論叢―日次紀事』からの出発―) 岩田書院、二〇一〇年) を参照。

- (7) 西京からの貢納については、貝英幸「中世末期村落の変質と祭礼―西京を中心に―」(『京都民俗』第二〇・二一号、二〇〇四年) を参照。

- (8) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』三一七〇号。

- (9) 前掲註(2) 宮澤論文。

- (10) 『因帰算歌』(『江戸初期和算選書』第二卷―二、研成社)。

- (11) 『塵劫記』(『江戸初期和算選書』第一卷―三、研成社)。

- (12) 下平和夫『江戸初期和算書解説』(『江戸初期和算選書』第一卷―一、研成社、一九九〇年)。

- (13) 「寛永八年年行事帳」(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 宮仕記録』北野天満宮、一九八一年)。

- (14) 「慶安三年年預帳」(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 年行事帳』北野天満宮、二〇〇四年)。

- (15) 「寛文三年年預帳」(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 年行事帳』二〇〇四年)。

第六章 銀の浸透と貨幣使用

はじめに

本章では、一六世紀後半から一七世紀前半における貨幣使用状況の変化を、相場の問題を留意しながら論じる。一六世紀後半、中国銅銭を中心とした錢貨使用のなかに、金・銀が貨幣として浸透し始め、米といった実物貨幣が場合により貨幣として使用されたことはよく知られている。特に銀の浸透は、日本だけでなく、中国や朝鮮においても同様の流れとしてとらえられており、それぞれの国の貨幣使用の仕組みに大きな影響を与えている。

さて、銀の浸透に関する研究を概観してみると、大きく二つの視点から論じている。ひとつは、銀の浸透を商品流通の視点から論じたもので、いまひとつは、地域の視点から銀の浸透をとらえたものである。前者は浦長瀬隆の土地売券の分析や、⁽¹⁾盛本昌広の豊臣期⁽²⁾の金銀遣い、中島圭一⁽³⁾の金銀贈答の分析から「銀貨」の成立を論じたものがある。後者は本多博之⁽⁴⁾の毛利領国内の分析や高木久史⁽⁵⁾の『信長公記』の検討、鈴木敦子⁽⁶⁾の肥前国の検討や千枝大志⁽⁷⁾の伊勢地域の検討、川戸貴史⁽⁸⁾の『兼見卿記』、⁽⁹⁾『鹿苑日録』の検討や桐山浩一⁽¹⁰⁾による京都における銀の貨幣化の検討などがある。

その結果、銀の浸透については、一五九〇年代ごろに銀が貨幣として「普及」・「本格化」したということが明らかにになった。こうした研究では、数量分析を中心に、交換手段・支払手段の変化を明らかにし、貨幣に対応する土地売券や商品、取引内容に焦点をあてて論じている。つまり、銀の貨幣機能の獲得過程を説明することを課題としていた。だが、方法論上の限界点も少なからず存在する。

まず第一に、使用した貨幣の種類や量的増減によって評価する点である。何をもって多いとするのか、明確な

基準がなく、数量が多いか少ないかの評価が曖昧となっている。また、数量分析で、個々の事例が抱える背景を捨象して検討するため、具体的な実態が不明瞭となっている。たしかに先行研究では、銀が浸透した要因として、石見銀山等の鉱山開発、銭不足による金・銀の参加、悪銭問題、豊臣政権の政策等が上げられている。しかし、その実態が欠如しているため、直接的な因果関係については、不明と言わざるをえない。さらに金・銀の使用について、社会集団や階層、地域等の段階差があったと想定されており、質的差異を考慮した分析が求められるだろう。

第二点目は、銀の浸透にともなう貨幣使用における銭と銀の問題である。川戸貴史は、貨幣の選択について、貨幣の「分水嶺」（使い分け）を分析し、『兼見卿記』では銭一貫文、『鹿苑日録』では銭三貫文を「分水嶺」としているとし、金額による区別があったと指摘している。⁽¹⁰⁾ 従来の研究の多くが銀の貨幣機能獲得過程を主眼とする中で、川戸の研究は貨幣使用の選択を含めて言及した研究として重要と考えられる。ただし、高木久史は、『信長公記』の検討から、高額な銭貨使用の事例を紹介している。⁽¹¹⁾ また、桐山は京都に銀の貨幣機能獲得の分析から、「上位貨幣としての銀」、「小額貨幣としての銭・米」といったように、貨幣の役割を単純に分けられるものではなかった、と指摘している。⁽¹²⁾ 貨幣使用の選択が金額による区別だけでなく、他の要因はあるのか、実証の蓄積が必要となろう。

右の課題を克服するため、北野社における諸職補任料の授受について検討する。

留意すべきは、建値と支払を区別することである。従来の研究では、支払いに使用する貨幣に注目したものが中心であったが、高木久史が米使用の問題について、売券の価格表記と実際の交換手段を検討し、売券の価格表記と交換手段が必ずしも一致しない場合があることを指摘している。⁽¹³⁾ 米だけでなく、金・銀・銭の間でも同様の状況が想定され、建値と支払の区別は必要であろう。そして、注視すべき点は、銀が社会に浸透していく状況のなか、人々が建値と支払をいかに選択しているのか、具体的に明らかにすることである。表面的な現象変化だ

けでなく、内実に迫ることによって、貨幣使用の特質を垣間見ることができるよう。

そこで本章では、銀使用の性格を確認した上で、北野社における諸職補任料をめぐる貨幣使用を検討し、当該期における貨幣使用の変容を明らかにしたい。

第一節 諸職補任料の支払い状況

本節では、北野社における諸職補任料のうち、三職（神事奉行職・公文職・御殿大預職）と宮仕職の補任料の支払い状況を確認し、そこにみられる貨幣使用の実態を検討する。

北野社の組織は、曼殊院門跡（竹内門跡）である別当大僧正に総括され、その下に松梅院・徳勝院・妙藏院等の祠官や宮仕、主典等の職があったこと、その諸職は北野社別当の曼殊院門跡が政所を介して補任したことが知られている。⁽¹⁴⁾ 補任者は、政所を介して曼殊院門跡に任料を支払っており、たとえば永正四年の政所の記録には、曼殊院門跡に支払う諸職の補任料額が記されている。⁽¹⁵⁾

北野社の諸職補任料に関する事例のなかでも、比較的事例数の多い宮仕職をみてみよう【表1】。宮仕とは、神殿の奉仕や神前の掃除などの雑役に従事した下級の社家のことである。⁽¹⁶⁾ 延徳三年（一四九一）九月五日付けで補任された松菊丸の例としてみると、宮仕職の補任に関する手続きは、つぎのように行われていた。①能喜（松菊丸の親）が目代のもとに出向き、子（松菊丸）が入公する案内を披露される（延徳三年九月三日）。②目代から能喜（松菊丸の親）へ補任状（同年九月五日付）が渡される⁽¹⁸⁾（同年九月六日）。補任状には政所が袖判を据えられており、政所が補任状を発給し目代を介して宮仕に渡されたと考えられる。③新承仕（松菊丸）が礼として政所へ出向く⁽¹⁹⁾（同年九月七日）。④能喜が松梅院へ宮仕職の補任状を持参し、松梅院がその補任状に神判を捺す⁽²⁰⁾（同年九月八日）。『北野社家日記』には、補任状に「天満宮印」が捺された様子が記されている。⁽²¹⁾ また、細川涼一は、京都橘大学所蔵「北野社宮仕沙汰承仕家文書」の宮仕職補任状には「天満宮印」印文の朱印が捺されていること

慶長 5			(能作子)	宮仕職	松梅院	一石	
慶長 6	9	10	(能舜)	宮仕職	松梅院	一石	
元和 5	9	29	松十丸(能泉子)	宮仕職	政所	(米) 5 石分の銀子 125 匁	
					目代	(米) 1 石 1 斗 6 升 4 合分の銀子 29 匁	
元和 5	10	7	熊夜叉丸(能由弟)	宮仕職	政所	(米) 5 石分の銀子 125 匁	任料は能泉子と同じ
					目代	(米) 1 石 1 斗 6 升 4 合分の銀子 29 匁	
元和 5	10	10	亀靄丸(能舜子)	宮仕職	政所	(米) 5 石分の銀子 125 匁	
元和 5	10	15	松靄丸(能満子)	宮仕職	政所	(米) 5 石分の銀子 125 匁	
元和 9	11	19	千代松(能舜子)	宮仕職	政所	(米) 5 石分の銀子 155 匁	
					目代	(米) 1 石 1 斗 6 升 4 合分の銀子 36 匁 2 分	
寛永 5	5	15	雄槐(能円子)	宮仕職	政所	(米) 5 石分の銀子 155 匁	
					目代	(米) 1 石 1 斗 6 升 4 合分の銀子 36 匁 1 分	
寛永 5	7	18	竹千代丸(能範子)	宮仕職	政所	(銀) 165 匁 (1 石 = 33 匁)	
					目代	(米) 1 石 1 斗 6 升 4 合分の銀子 38 匁 4 分 2 厘	
寛永 5	7	25	広満丸(能松子)	宮仕職	政所	(銀) 165 匁 (1 石 = 33 匁)	任料は能範子と同じ
					目代	(米) 1 石 1 斗 6 升 4 合分の銀子 38 匁 4 分 2 厘	
寛永 5	7	27	土松丸(能与子)	宮仕職	政所	(銀) 165 匁 (1 石 = 33 匁)	任料は能範子と同じ
					目代	(米) 1 石 1 斗 6 升 4 合分の銀子 38 匁 4 分 2 厘	
寛永 5	8	10	千代鶴丸(能良子)	宮仕職	政所	(銀) 165 匁 (1 石 = 33 匁)	
					目代	(銀) 38 匁 4 分 2 厘	

第6章 銀の浸透と貨幣使用

【表1】宮仕職の補任料

年	月	日	人名	職掌名	受取人	金額	備考
長享2	9	26	菊夜叉丸（能喜子）	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
長享3	正	11	虎夜叉丸（随栄子）	宮仕職	松梅院	百疋	
長享3	正	13	松千代丸（随栄子）	宮仕職	松梅院	百疋	
延徳元	12	13	松夜叉丸	宮仕職	松梅院	百疋	
延徳2	3	6	岩夜叉丸（能俊子）	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
					松梅院	百疋	
延徳2	3	6	松菊丸（能喜子）	宮仕職	政所	三貫文	
延徳3	9	6			目代	七百文	
延徳3	9	11			松梅院	百疋	
永正6	3	13	岩松丸（能玉子）	宮仕職	政所	三貫文	任料3貫文のうち1貫文を免除とし2貫文となる
					目代	七百文	
永正6	12	7	梅千代丸（能遵子）	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
					衆中	十五貫文	
永正10	12	12	竹夜叉丸（成充養子・目代渡瀬実子）	宮仕職	松梅院	百疋	
永正13	正	12	乙寿丸	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
永正13	2	1	千代叉丸	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
天文22	4	21	千松丸（能音子）	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
天文22	5	15	虎松丸（能伝子）	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
元亀元	12	21	楠菊丸（能音子）	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
永禄5	10		能堯子	宮仕職	政所	三貫文	目代、悪銭のため能堯を呼び出して撰銭する
					目代	七百文	
永禄6	閏12		乙楠丸（能音子）	宮仕職	政所	三貫文	
					目代	七百文	
永禄10	5	12	能重子	宮仕職	政所	三貫文	補任料、悪銭のため返却
					目代	七百文	
天正16	11	15	梅夜叉丸（能林子）	宮仕職	衆中	七十五貫文	
慶長3	10	16	能金（能源子）	宮仕職	松梅院	一石	
慶長3	11	15	（能松子カ）	宮仕職	松梅院	米一石分の銀子十匁	

を指摘している。⁽²²⁾ここから、松梅院が補任状に捺した神判は「天満宮印」印文の朱印であったとわかる。⁽²³⁾

宮仕職に補任されるには、政所を介して曼殊院に補任料、目代に得分、松梅院に神判料、宮仕中に新入料を支払う必要があった。

文龜三年（一五〇三）卯月付の宮仕衆中における「入公」（宮仕新入）に関する定書の第一条に「一、れうそ^(料足)く拾五貫文にてたうにちこせん当さ分二ゑりせん^(撰銭)にてさたの事^(沙汰)」とある。⁽²⁴⁾ここでの「錢一五貫文」は、宮仕衆中に支払う新入料を指すと考えられ、新入料は撰銭した上で授受する規定となっていたことがわかる。撰銭した上で授受する点は、曼殊院の補任料や目代の得分においても同様であった。

永禄五年（一五六二）一〇月、能堯の子が宮仕職に補任されるさいに、親の能堯は補任料三貫文を曼殊院に支払った。目代も得分として受け取ることとなっていたが、『目代日記』永禄五年（一五六二）一〇月日条に「一、我等も料足七百文取申候御法也、あく錢^(悪)にて候間能堯^(呼)よゑり^(撰)申候也」とあるように、⁽²⁵⁾その七〇〇文が悪錢であったために目代は能堯を呼び出し、撰銭したことがわかる。第二章において明らかにしたように、撰銭のさいに支払人を呼び出して両者の合意のもと撰銭（精銭と悪銭の区別化）⁽²⁶⁾している。

また、『目代日記』永禄一〇年（一五六七）五月一二日条には、「一、補料^(任脱カ)悪銭之由候て御返候也、何もゑり可申候之由被仰出也、我等七百給御法也、是も悪銭不取候也」とあり、⁽²⁷⁾曼殊院は悪銭のため補任料を返却し、撰銭するようにと命じており、目代も悪銭のため受け取らなかった。こうした事例から、諸職補任料は撰銭したうえで授受しており、精銭納を原則とした。

さて、金・銀が社会に浸透した天正期は、⁽²⁸⁾また米も貨幣として使用する事例が史料上でよく確認できる。そして、天正期以降の諸職補任料をみると、貨幣使用に変化がみられる。これについて、まず松梅院禪永への三職の補任を例にみてみよう。

天正一七年（一五八九）四月二八日、松梅院禪永が三職（神事奉行職・公文職・御殿大預職）に補任される。

三職のうち、神事奉行職は松梅院の「家」にかかる職として補任料を必要とせず、松梅院禪永は公文職と御殿大預職の「両職」の補任料を政所に支払うこととなった。任料の額は前田玄以によって米三石か料足一〇〇〇疋(一〇貫文)と定められたが、ここでは錢貨にて授受することとなった。⁽²⁹⁾その錢貨について『目代日記』では、つぎのように記載している。⁽³⁰⁾

此料足ハ関白殿ヨリ諸社へ壹万石ツ、参候内之金、小野細川より買二来候錢にて候ま、一段とせい^(精)錢にて候間、上様にもゑらすに御取候、

これによると、松梅院禪永が補任料として支払った錢は「関白殿ヨリ諸社へ壹万石ツ、参候内之金」を「小野細川」に売却したことによって獲得した錢であり、それは「一段とせい(精)錢」であった。そのため、曼殊院門跡も撰錢せずに受け取ったことがわかる。ここで注目すべきは、金との売買によって「せい(精)錢」を手に入れていることである。つまり、錢と金・銀といった諸貨幣との売買は精錢獲得方法の一つであったと考えられる。さて、このように諸職の補任料が精錢での授受していたことが確認できたが、他にも「上錢」による授受が確認できる。つぎの史料をみてみよう。

【史料1】

一、御補任目代持来也、目代使仕徳分二職六百文鳥目ニて小島七右衛門尉^御○渡申事候へ共、夜中ニよひよセ急度申付、其分通也、○目代二二職二六百文と申切^{別ニ}○さセ置候、小島七右衛門方までノ様ニさセ申候、目代ハ二職ニ壹貫二百の由申、色々七右衛門を以申候へ共、当坊前々書物之ことくと申六百文渡、夜五ツ時ニ渡、目代ニ渡鳥目散々悪を遣^{候へ者}也迷惑之由申故、上錢遣者也、

【史料1】は『北野社家日記』慶長三年(一五九八)一〇月一六日条⁽³¹⁾で、松梅院から目代に支払う補任料に関する内容である。松梅院は小島七右衛門尉を通じて目代に得分を渡した。そのさい、目代側は二職で一貫二百文と主張したが、松梅院側は「当坊前々書物之ことくと述べ、得分を六百文とした。そして、松梅院は目代に「散々

悪」の錢を渡そうとしたが、目代側が「迷惑」と述べたため、結局、「上錢」を渡した。

「上錢」については、先学では、精錢より減価な通用錢（ビタ）として理解され、精錢の三分の一程度の価値とされる。³²しかし、当該期における「上錢」という言葉に注目してみると、実際には「上錢」Ⅱ「ビタ」とは認識されていない事例が確認できる。

【史料2】

當社之内末社辨才天之社御公用錢之事、雖為往古八百文之通、御佗言申上候付、向後五百文ニ被相究候段、忝存入候、然上者、毎年正月中ニ以撰錢進納可申上候、若於無沙汰儀者、彼社可被召上候、此等之趣 御社家様へ御披露所奉仰御座候、以上、

天正拾六年十二月廿二日

幸圓判

新御坊

【史料3】

當社之内末社夷之小社、御公用錢御目錄、年中ニ七百文つ、在之由被仰出候處ニ、只今建立仕候ニ付、御佗言申上、五百文ニ相定られ候段、忝畏入存候、然上者毎年正月中ニ以上錢進納可申候、若於無沙汰之儀ハ、彼小社可被召放候、此旨可然様ニ御社家様へ御披露所奉仰御座候、以上、

天正十九年

片羽屋

八月十七日

久左衛門判

新御坊

【史料2】と【史料3】は、祇園社の公用錢に関するものである。【史料2】は幸圓が新御坊に対して祇園社末社辨才天社の公用錢を八百文から五百文に変更し、毎年正月中に納入することとしたもので、³³【史料3】は片羽屋久左衛門が新御坊に対して、祇園社末社夷社の公用錢を七百文から五百文に免除され、正月中に納入する内容

のものである。⁽³⁴⁾【史料2】では「撰銭」した上で納入する、とあるのに対して、【史料3】では「上銭」で納入する、となっている。このことから「撰銭」は「上銭」と同義であったことが判明する。右の史料のほかに、「上銭」と記されているものは、天正一九年・慶長二年・慶長四年・慶長六年・慶長八年（四例）・慶長九年・慶長一〇年（三例）の事例が確認でき、「撰銭」と記されているものは、天正二〇年の事例が確認できる。⁽³⁵⁾したがって、祇園社の公用銭にみえる「上銭」は「撰銭」した銭、つまり精銭を示すものといえるだろう。

また、天正四年から七年かけての慈濟院納下帳は、長福寺塔頭の慈濟院の収支を示した史料であるが、上銭や悪銭に関する比価を知ることができる。⁽³⁶⁾たとえば、天正四年七月四日の祇園会出銭の六〇文は実際には上銭一二銭を出しており、同年七月一二日の釘代五四〇文は上銭一〇八文、釘代・肘壺の八五〇文は上銭一七〇文で算用している。同年八月五日、二条妙顕寺之内仙妙坊に納めた四二文は実際には悪銭三〇〇文で納入し、同年八月二〇日、下京三条野口与介に納めた二八文は、悪銭二〇〇文であった。ここから、「上銭」と銭の比価が一对五、銭と「悪銭」の比価が七対五〇、ということが判明する。ここでの「銭」が具体的にどのような銭を指しているのかは不明であるが、少なくとも「上銭」・「銭」・「悪銭」の階層となっていることはいえよう。

このように「上銭」＝精銭という等式が成り立っており、決して精銭より低い価値される銭として認識していなかった。このことは、諸職補任料の精銭納が少なくとも慶長期までは継続していたことと理解できるだろう。そして、「上銭」という言葉は銭の階層化にともなって使用されたものと考えてよいだろう。

北野社の諸職補任料が精銭納であったことは、銀や米を貨幣として使用するさいにも意識していたようで、貨幣使用の選択方法に影響を及ぼした。

【史料4】

一、能松入公新丞^(承)仕つれて来、能隆も来、陣判料一石新丞仕来ぬ先ニ当坊へ渡、当坊ノ升ニて当坊ノ者はかり請^取〇也、八木も悪ハ不請取候也、八木少次ニて候間、銀子ニて請取候ハんと申候て銀子にて請取也、

世上米サウハ一石一斗銀子にて仕候へ共、斗米ノ算用ニ請取也、銀子十匁上々を請取、

【史料4】は、『北野社家日記』は慶長三年（一五九八）十一月一五日条である。³⁷これによれば、能松は新承仕「入公」の神判料一石を松梅院に渡したが、そのさい、松梅院は松梅院の升で松梅院の関係者が計量して受け取るとし、米も「悪」ならば受け取らないとしている。その結果、松梅院は神判料一石を米ではなく、銀子十匁で受け取ったことがわかる。すなわち、価格表示は米であるが、支払う貨幣が米から銀へと変更されており、それが悪米によつて判断されたのである。したがつて、すでに高木久史が指摘しているように、米の価格表示は必ずしも米そのもので支払うことを示すのではなく、³⁸支払う貨幣は選択されていたといえる。そして、ここでの判断要因は貨幣そのものが「悪」か否かによるものであった。

ただし、支払う貨幣の選択は貨幣じたいが「悪」か否かに起因するだけではなかった。実は各貨幣間の相場を意識して選択していたのである。この点については、節を改めて述べていきたい。

第二節 貨幣使用と相場

一六世紀後半以降、金・銀が社会に浸透し、実物貨幣たる米の貨幣使用が多く見受けられるようになると、金・銀・銭・米といった各貨幣間に相場が立つようになった。京市中の米屋での取引を相場の基準とし、金・銀・銭・米の交換が盛んに行われていたこと、豊臣期の人々が相場の変動に敏感になっていたことは、すでに盛本昌広によつて明らかにされている。³⁹

では相場は、当該期における貨幣使用にどのような影響をもたらしたのだろうか。本節では、北野社における諸職補任料の検討から、この点について明らかにしたい。まずは、松梅院禅昌の三職（神事奉行職・公文職・御殿大預職）補任について具体的にみることにする。

慶長三年（一五九八）一〇月一五日、松梅院禅昌が曼殊院門跡から三職に任じられる。だが、その補任にあたつ

ては、松梅院禪昌と曼殊院門跡との間で、三職の補任料をめぐる争いが生じていた。

松梅院禪昌が三職に任じられる四日前の慶長三年（一五九八）一〇月一日、曼殊院門跡と松梅院との間で、三職の補任料をめぐる折衝が行われた。

【史料5】

□竹内門跡と我等間三職之事二付、菊亭殿内一安あつかい被申候也、門跡からハ三職二十五貫文と御申、此方家ノ書付ニハ三職一職ニハ任料不出、二職ニ六百疋出申候由申遣也、禪興・禪永代其分ニて候也、

【史料5】は『北野社家日記』慶長三年（一五九八）一〇月一日条である。⁽⁴⁾これによれば、菊亭殿の内衆一安を介して曼殊院側が三職の補任料として銭貨一五貫文を求めたことがわかる。しかし、松梅院は三職のうち一職には補任料を必要とせず、二職で六百疋を支払うことを返答した。補任料をめぐる曼殊院側と松梅院側の相違点は、一職あたりの補任料と補任料を要する職である。前者については、曼殊院側が一職あたり五貫文に対して、松梅院側が一職あたり三貫文としている。後者については、曼殊院側が三職に補任料を必要とする一方、松梅院側が「此方家ノ書付」と禪興・禪永代の事例を根拠に三職のうち一職の補任料を出さないと主張している。

同月一四日、三職の補任料について、曼殊院側と松梅院側との間で再び折衝が行われた。

【史料6】

一、今朝一安へ小島遣、三職之補任ノ儀也、三職之内、神事奉行職ハ家ニ付たる儀候間、任料不出候、二職ニ六百疋出、補任頂戴仕旧例ニ候間、其通ニて候ハ、何さま追而補任可申請由、一安を以竹門様へ返答申候、只今鳥目百疋^世ノ代銀三匁二分仕候間、六貫ノ代銀子ニて算用仕可渡由申遣也、但鳥目六貫御請取あるへきかと申遣之、とかく任料之儀ハ六百疋ニ相定候、

【史料6】は『北野社家日記』慶長三年（一五九八）一〇月一四日条である。⁽⁴⁾松梅院側は、三職のうち神事奉行職は家に付いたものとして、その分の補任料を支払わず、二職で六百疋を支払うことを松梅院側が曼殊院側に

返答している。ここから、松梅院が補任料を支払わないとする一職が神事奉行職であることが判明する。それに對して曼殊院側は、「世上」の錢銀相場が「鳥目」百疋（一貫文）⁴³ 銀三匁二分を理由に六貫の代を銀子で算用して渡すように要求している。世上の錢銀相場から受け取る貨幣を曼殊院側が選択していることがうかがえる。このように、両者の主張に相違の部分があるものの、補任料は「六百疋」と定められた。

同月一六日、先述したように、松梅院禪昌が目代に得分として「上錢」一貫二〇〇文を支払った一方で、曼殊院門跡側は、一安を通じて「竹門様へ任料は此度鳥目遣し成らざる故、銀子六十目渡し候はんと申すなり」と、松梅院に曼殊院門跡への補任料を、錢貨ではなく銀子六〇匁で渡すよう要求している。⁴⁴ここから、曼殊院門跡側が補任料六百疋を銀子六〇匁に相当すると認識していたことが判明する。

かくして、曼殊院門跡から三職（神事奉行職・公文職・御殿大預職）に補任された松梅院禪昌は、補任から一ヶ月後の十一月二三日に補任料六百疋分を渡した。

【史料7】

一、竹内門跡へ公文職・御殿職任料六百疋分今日遣也、一安取次故一安方まで渡、去月補任頂戴申候へ共、任料只今出、只今鳥目ノね壹貫ニ付〇三匁三分仕故、銀子にて御取候ハんと御申候を鳥目にて渡候ハんと申候へ共、一安被仰候ハ、例ニハ成シ申間敷候間、此度計ハ銀子ニて渡候へと被仰候、色々申一安書物を取、則只今計銀子ニて渡也、只今銀子にて米ノ相場十匁ニ付九斗五升ノ賣賣也、⁴⁵

【史料7】は『北野社家日記』慶長三年（一五九八）十一月二三日条である。⁴³松梅院側は錢銀相場が錢一貫文⁴⁶ 銀三匁三分なので、補任料を銀子ではなく錢で渡そうとしたところ、曼殊院門跡側は先例にならないとし、銀子での受け取りを求めた結果、松梅院側は曼殊院門跡側に補任料六百疋分を銀子によって渡した。なお、この時の銀米相場は銀一〇匁⁴⁷ 米九斗五升であった。

以上、補任料をめぐる松梅院禪昌と曼殊院門跡の争いを検討してきた。貨幣使用の角度から注目すべき点を指

摘しておこう。

それは曼殊院門跡側が補任料六百疋を銀子六〇匁と認識している点である。すなわち、曼殊院側が錢と銀子のレートを一貫文 \parallel 一〇匁と結びつけているのである。このことは世上の錢銀相場（錢一貫文 \parallel 銀三匁三分）とは異なる固定した比価として存在していることを示している。こうした固定した比価は、米と錢の間にも存在していたことが確認できる。たとえば、天正三年（一五七五）『大外中原師廉記』には、錢（基準額）一貫文 \parallel 米一石 \parallel 「御あし」（通用錢）五貫文（「五文たて」）の比価に基づいた収支記事が多く散見できる。⁽⁴⁴⁾このことをふまえると、錢一貫文 \parallel 米一石 \parallel 銀一〇匁で結びつけた比価が、価格表記上の慣行として存在していたといえよう。

一方、市場の動きによって絶えず変動する世上の相場が存在していた。『北野社家日記』慶長三年（一五九八）一〇月一四日では一貫文 \parallel 三匁二分の錢銀相場であったのに対して、同月二三日では一貫文 \parallel 三匁三分の錢銀相場であったことがわかる。つまり慶長三年（一五九八）一〇月一四日の錢銀相場は、同月二三日に比べて、一分ほど銀高錢安の相場になっているのである。

このように、当該期における錢銀比価は、固定レートと変動レートが併存している状況であった。曼殊院は一貫文 \parallel 一〇匁を基準として、錢銀相場が錢高銀安（一貫文が一〇匁以上）で錢を、錢安銀高（一貫文が一〇匁以下）で銀を要求したと思われる。

錢と銀が一貫文 \parallel 一〇匁で結びついた比価は、銀が一般的に浸透したとされる一五九〇年代ごろの錢銀相場と近い値であったと考えられる。たとえば、『鹿苑日録』慶長四年（一五九九）五月一日条に「五百文、藤九郎二遣、瑞雲院之時ハ弍百文遣、其時ハ錢一貫カ十文め也、只今ワ一貫ガ上錢ハ參匁五分スル、此故弍弍百文ニテ不点頭故ニ、後ニ三百添テ遣也、此例後日ニ不入之間、先五百文遣也」とみえる。⁽⁴⁵⁾瑞雲院の葬礼の時は錢一貫文 \parallel 銀一〇匁の錢銀相場であったのに対して、「只今」つまり慶長四年（一五九九）は上錢一貫文 \parallel 銀三匁五分の錢銀相場であったことがわかる。また、すでに高木久史が明らかにしているように、慶長八年（一六〇三）五月

に瑞雲院の一三回忌法要が行われ、同一二年（一六〇七）五月には一七回忌法要が行われていることから、瑞雲院は天正一九年（一五九一）に没していたことになる。⁽⁴⁶⁾ここから天正一九年（一五九一）の錢銀相場が錢一貫文Ⅱ一〇匁であったことが判明する。これは慶長四年（一五九九）の錢銀相場上錢一貫文Ⅱ銀三匁五分と比べて、六匁五分ほど錢安の相場である。

このように、固定した比価と変動する相場が大きく乖離すると、支払い方法に影響を与えた。天正期ごろの錢銀相場は一貫文Ⅱ一〇匁と近い値であったが、慶長期に入ると銀高錢安の相場になり、それが固定する比価と変動する相場の乖離につながった。そしてこのような銀高錢安の状況が、さらに貨幣使用の問題を招いた。

【史料8】

入公分錢之事

七拾五貫文ニ相定處、能閑一人号本錢、八木にても料足にても、さうば^(相場)のかつてよき物にて取来候とて、文祿四年已来者、銀子世間之さうば^(相場)宜ニよつて壺貫文ニ付拾式匁ツ、被取候、此時料足さうば^(相場)上錢壺貫文四匁仕候、如此之上者、只今能閑入公之分錢八木にて請取可申候、但鳥目壺貫之方ニ壺石式斗ツ、各請取可申者也、右之旨限親子、兄弟一切用捨仕ましく候、仍而如件、

慶長八年 十一月廿八日 能秀（花押）

（後欠）

（裏書）

「能金（花押）

預能運（花押）」

【史料8】は、慶長八年（一六〇三）一月二八日付、入公の分錢に関するものである。⁽⁴⁷⁾宮仕の入公のさいは、衆中に七五貫文を支払いになっていた。ところが、能閑なる宮仕が「本錢」と号して、米でも錢でも、相場の勝

手の良い方で授受するものとした。銀錢相場は「文禄四年以来」で（錢）一貫文Ⅱ（銀）一二匁、「此時」（慶長八年）の相場が上錢一貫文Ⅱ（銀）四匁であった。したがって、能閑の入公分錢は米で授受された。この内容は、能閑親子に限り、兄弟への適用を禁止するとしている。

差出・宛所については後欠のため詳しく知ることができないが、少なくとも預の能運、能金、能秀が差出人であることがわかる。また、「北野光乗坊文書」に残されていることをふまえると宮仕連中に宛てたものと推測できる。また、錢だけでなく米も支払手段の選択肢のなかに加わっていることが指摘できよう。

ここで注目すべきは、入公分錢の貨幣を相場によって判断していることである。【史料8】では、文禄期の銀相場が一貫文Ⅱ一二匁であるのに対して、「此時」（慶長八年）の錢・銀相場が上錢一貫文Ⅱ四匁とあるように、文禄期よりも慶長期のほうが、銀高錢安の状況になっていることがわかる。また、錢米相場についてみると、『北野社家日記』慶長三年（一五九八）二月二十八日条に「鳥目十疋二付八木三升五合ノ算用也」とみえ、⁽⁴⁸⁾ 錢一〇〇文Ⅱ米三升五合（錢一貫文Ⅱ米三斗五升）であった。⁽⁴⁹⁾ さらに盛本昌広は、「米の値段は年や季節により変動が大きいため、単純に比較できないが、文禄年間と慶長年間の交換レートを比較すると、慶長年間の方が銀安米高となっており、慶長三年と文禄二年の銀と錢の交換レートを比較すると、慶長三年の方が銀高錢安となっている」と指摘している。⁽⁵⁰⁾

このように慶長期は文禄期に比べて、総じて錢安傾向にあったといえる。このような相場状況をふまえて、錢建てで価格表示している入公分錢は「料足」（錢）ではなく「八木」（米）で授受されたのである。相場の状況に応じて授受方法を選択していた点は注視すべきであろう。

一方、受取人は、入公文錢について「八木」（米）よりも「料足」（錢）のほうを望んでいただろう。能閑の行動について、能閑親子に限り、兄弟においては認めてないことから、預の能運らはあくまでも例外として取り扱おうとしていることがうかがえる。錢建ての価格表示しているものについて、どの貨幣で支払うのか。支払人

と受取人の間には支払方法をめぐる問題が生じていたのである。その背景には、慶長期に銀高銭安の状況があったといえよう。

では、このような問題をどのように解決したのであるか。宮仕衆中は入公の分銭に関する決まりを作り上げた。その内容は価格表示と支払い方法の規定である。

【史料9】

入公七拾五貫之分銭事、年来我等不混自余、銀子・米・銭勝手ノよき方ニテ請取申候、然故只今我等岩夜叉丸入公仕候処ニ、今以勝手よき方ニテ御請取可被成候由、各被仰候、迷惑之間、舜性坊一運左右之御衆を以御侘事申候処ニ、壹貫文ニ付八木壹石ツ、御請取可被成由忝存候、然上ハ、向後入公之時モ、壹貫文ノ方ニ上々ノ八木、九月晦日までハ古米、十月朔日よりハ新米之代、双方ヨリ人を出し、町ノ米屋三間を相尋、其上弐間ノ方へ付、壹石ノ代ヲ上々丁銀ニテ取やり可仕事勿論候、少々モ各ノなミにもれ、違乱非分ノ儀御座有リ間敷候、仍後日之状如件、

元和元年十一月九日

能栢（花押）

能範（花押）

能琢（花押）

岩夜叉丸（略押）

傍輩殿御中

【史料9】は、元和元年（一六一五）十一月九日、能栢ら四名が傍輩殿に宛てた書状⁽⁹⁾で、入公の配分と入公の納入方法について規定している。『年行事帳』元和元年（一六一五）一〇月二一日条に「右者入公法度御談合之時ノ入目也」とあり、同年霜月九日条に「右者御神前ニテ入公之御定之時、御三寸皆灯入目也」とあり、入公法度を規定したことがうかがえる⁽¹⁰⁾。まず、前半部分の入公七五貫文の配分の事について指摘しており、年来銀子・米・

錢の「勝手ノよき方」で受け取っていたが、岩夜叉丸が宮仕に入公するのところ、「勝手よき方」にて受け取ることを各自が主張したが、「迷惑」なので、舜性坊の通じて錢一貫文 \parallel 米一石で結びつけた比価の受け取ることになったことがわかる。ここでの「壹貫文ニ付八木壺石ツ、」は錢一貫文 \parallel 米一石 \parallel 銀一〇匁という固定した比価を示していると考えられる。

ついで後半部分では、今後の入公の納入について規定していることがわかる。ここで注目すべきは、入公の価格表示と支払方法を変化している点である。すなわち、錢建て価格に対する銀子・米・錢による支払いであったのが、錢建て価格から米建て価格に換算したうえで、丁銀による支払いに変化しているのである。

米価格の算出方法は「九月晦日までハ古米、十月朔日よりハ新米之代、双方ヨリ人を出し、町ノ米屋三間を相尋、其上式間ノ方へ付」とみえる。米価格は九月晦日まで古米、十月朔日から新米の価格とし、その方法は受取・支払の双方から人を出し、町の米屋三軒を尋ねたうえで二軒の価格を選択するとしている。清水克行によれば、中世における古米価格と新米価格を比較すると、古米のほうが新米よりも高価であり、古米と新米の価格差は近世まで共通するものとされる⁽³³⁾。したがって、時期によって古米価格と新米価格と決めているのは、古米と新米の価格差を考慮したものと考えられる。

このように宮仕衆中は入公の価格表示と支払い方法を変更した⁽³⁴⁾。変更後の入公は表記上では米建て価格を銀支払いのようにみえるが、実際には、錢建て価格を米建て価格に変換した上で銀支払いであった。この変更は慶長期における錢安傾向を背景に、相場をめぐる問題がみられたことが要因といえる。その問題を解決するために、宮仕衆の間で価格表示方法と支払い手段をめぐる合意形成をおこなったのである。

一六世紀後半に銀は貨幣としての機能を果たす一方で、貨幣使用の現場では相場の影響を直接的に受けるようになった。そうした状況のなかで、貨幣使用の選択を支払人と受取人の間で合意するのは、中近世移行期における貨幣使用の特徴の一つといえるだろう。

おわりに

以上、北野社における諸職補任料を事例として貨幣使用状況の変化と相場の問題を検討してきた。北野社の諸職に補任される時は、補任料・得分などといった形で、諸職に依じて一定額を支払う必要があった。それらは精銭納（撰銭したうえでの授受）を原則としており、金・銀が社会に浸透した天正期以降も継続していた。諸職補任料が精銭納であることは、銀や米を貨幣として使用するさいにも影響を及ぼした。すなわち、貨幣使用のさいには銭だけでなく、銀や米においても「精」と「悪」に区別しているのである。

さて、銀が社会に浸透すると、銀・銭・米の間に相場が立つようになった。また、それとは別に銭一貫文＝米一石＝銀一〇匁で結びつけた比価が存在し、市場と連動する世上の相場が併存状況にあった。固定した比価は一五九〇年代の銭銀相場と近い値であったが、慶長期ごろに銀高銭安の傾向となり、固定した比価と変動する相場が大きく乖離してしまった。そのため、諸職補任料の支払い方法をめぐる問題が起こったのである。

こうした問題を解決するために、宮仕衆中は価格表示方法と支払い手段について規定するようになる。つまり、宮仕衆中の間で価格表示方法と支払い手段をめぐる合意形成をおこなったのである。

銀が社会に浸透し、貨幣使用の現場では、相場の影響を直接的に受けるため、価格表示方法と支払い方法の問題を抱えるようになる。そうした問題を限定された空間のなかで自律的に合意を形成する動きは、当該期の貨幣使用の特質である。

本章の検討を通じて、慶長期に銀高銭安傾向であったことが確認できたが、ではなぜ慶長期ごろに銀高銭安の傾向になったのか、この問題については今後の課題としたい。

註

- (1) 浦長瀬隆『中近世日本貨幣流通史』（勁草書房、二〇〇一年）。
- (2) 盛本昌広「豊臣期における金銀遣いの浸透過程」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第八三集、二〇〇〇年）。
- (3) 中島圭一「京都における「銀貨」の成立」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一三集、二〇〇四年）。
- (4) 本多博之「銀の海外流出と国内浸透」（同『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、二〇〇六年）。
- (5) 高木久史「信長期の金銀使用」（同『日本中世貨幣史論』校倉書房、二〇一〇年）。
- (6) 鈴木敦子「肥前国内における銀の「貨幣化」」（同『戦国期の流通と地域社会』同成社、二〇一一年）。
- (7) 千枝大志「神宮地域における銀の普及と御師の機能」（同『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』岩田書院、二〇一一年）。
- (8) 川戸貴史「一六世紀後半京都における貨幣の使用状況——『兼見卿記』の分析から——」（『東京大学史料編纂所研究紀要』第二〇号、二〇一〇年）、同「銀貨普及期京都における貨幣使用——『鹿苑日録』の分析を中心に——」（天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』日本史史料研究会、二〇一二年）。
- (9) 桐山浩一「一六世紀後半の京都における銀の貨幣化」（『ヒストリア』二三九号、二〇一三年）。
- (10) 前掲註（8）川戸貴史論文。
- (11) 前掲註（5）高木久史論文に、「三千貫という高い価値の移動に際して金や銀ではなく、銭が使用された」と指摘されている。
- (12) 前掲註（9）桐山論文。
- (13) 高木久史「売券の価格表記の意味」（同『日本中世貨幣史論』校倉書房、二〇一〇年）。
- (14) 細川涼一「中世の北野社と宮仕沙汰承仕家——京都橋大学所蔵「北野社宮仕沙汰承仕家文書」の補任状から

―(同『日本中世の社会と寺社』思文閣出版、二〇一三年)。

(15) 高橋大樹「中世北野社御供八嶋屋と西京」(日次紀事研究会編『年中行事論叢―『日次紀事』から出発―』

岩田書院、二〇一〇年)。「永禄四年古記録甲」永禄四年七月九日条(『北野天満宮史料 古記録』)。なお、

諸職の補任料は左の表の通りである。

no	職名	補任料
1	執行	1貫文
2	御殿預	3貫文
3	公文職	3貫文
4	阿闍梨并上座	2貫文
5	都維那并寺主	1貫文
6	宮仕新入	3貫文
7	八嶋職	3貫文
8	主典	2貫文
9	沙汰承仕	3貫文
10	小預職	5貫文

(16) 前掲註(14) 細川論文。

(17) 「目代盛増日記」延徳三年九月三日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年)。

(18) 「目代盛増日記」延徳三年九月六日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年)。

(19) 「目代盛増日記」延徳三年九月七日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年)。

(20) 『北野社家日記』延徳三年九月八日条(続群書類従完成会)。

(21) 前掲註(20)。

- (22) 前掲註(14) 細川論文。
- (23) 三枝暁子は「中世寺社の公人について」(同『比叡山と室町幕府―寺社と武家の京都支配―』東京大学出版会、二〇一一年)において、宮仕職補任状の発給を「政所の許可を要するとはいえ、実際には公文所松梅院が補任状を発給していた様をうかがうことができる。」と指摘している。しかし、実際には補任状を発給していたのは政所であり、松梅院は神判を捺していた。ただし、松梅院禪興が政所を務めていた時期は、政所代として松梅院禪興が宮仕職補任状を発給していた。
- (24) 文亀三年卯月「定 入公条々之事」(東京大学史料編纂所蔵 北野光乗坊文書、請求記号・貴四〇―一―二)。東京大学史料編纂所公開用データベースの画像を利用した。
- (25) 「目代慶世引付」永禄五年一〇月日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年)。
- (26) 本論文第二章。
- (27) 「目代慶世引付」永禄一〇年五月二二日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年)。
- (28) 前掲註(2) 盛本論文。
- (29) 「目代昭世日記」天正一七年四月二七日条、同月二十八日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年)。
- (30) 「目代昭世日記」天正一七年四月二八日条(北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮、一九七五年)。
- (31) 『北野社家日記』慶長三年一〇月一六日条(続群書類従完成会)。
- (32) 小葉田淳『日本貨幣流通史』(刀江書院、一九六九年、初出一九三〇年)。前掲註(8) 川戸論文。川戸は『鹿

苑日録』慶長四年（一五九九）五月一日条にある錢一貫文＝銀一〇匁、上錢＝銀三匁五分を根拠に、上錢は基準錢の三分一程度の通用錢（ビタ）と解釈している。しかし、この解釈には当該期の錢銀相場の状況という視点が欠如している。前者が天正一九年の錢銀相場で、後者が慶長四年の錢銀相場である。錢と上錢の価値関係を表したのではなく、あくまでも錢と銀の等式を表したものである。したがって、上錢が錢の三分の一価値を示しているのではなく、錢銀相場が動いたと解釈すべきであろう。

(33) 「祇園社記」第十九（「八坂神社記録」3『増補続史料大成』二五二～二五三頁）。

(34) 「祇園社記」第十九（「八坂神社記録」3『増補続史料大成』二五三～二五四頁）。

(35) 「祇園社記」第十九（「八坂神社記録」3『増補続史料大成』二五四～二六一頁）。

ここで注意すべき点は、時期によって「撰錢」から「上錢」へと変化しているわけではないことである。

「祇園社記」第十九（「八坂神社記録」3『増補続史料大成』（上八〇四）

當社之内末社大將軍之小社、今後我等建立仕候ニ付、棚守職之事被仰付候、忝存候、就其御公用錢之儀、往古七百文之通在之旨被仰出候處、御侘言申上候ニ付、向後五百文ニ被相究候段、是又畏入存候、然上者毎年正月中ニ以撰錢進納可申上候、若於無沙汰者、彼小社可被召放候、此等趣御社家様へ御披露所奉仰候、恐々謹言

天正貳拾年卯月廿六日

やまもとと大蔵大輔
安吉判

新坊

右の史料は、【史料2】や【史料3】と同じく祇園社の公用錢に関するものである。これによれば、「毎年正月中ニ以撰錢進納可申上候」とあるように、公用錢を「撰錢」したうえで納入することがわかる。天正二〇年卯月二六日付の史料であるように、「上錢」と記されている【史料3】より後に発給されている。ここから、時期によって「撰錢」から「上錢」へと変化したのではなく、「撰錢」と「上錢」が同義であると理解でき

るだろう。

- (36) 石井進編『長福寺文書の研究』（山川出版社、一九九二年）一一九二号。
- (37) 『北野社家日記』慶長三年二月一五日条（続群書類従完成会）。
- (38) 高木久史「価値尺度としての米の使用の成立」（同『日本中世貨幣史論』校倉書房、二〇一〇年）。
- (39) 前掲註（2）盛本論文。
- (40) 『北野社家日記』慶長三年一〇月二一日条（続群書類従完成会）。
- (41) 『北野社家日記』慶長三年一〇月一四日条（続群書類従完成会）。
- (42) 『北野社家日記』慶長三年一〇月一六日条（続群書類従完成会）。
- (43) 『北野社家日記』慶長三年一月二三日条（続群書類従完成会）。
- (44) 金子拓・遠藤珠紀・久留島典子・久水俊和・丸山裕之「史料編纂所所蔵『大外記中原師廉記』の『大外記中原師廉記』解題」（『東京大学史料編纂所研究紀要』第二三号、二〇一三年）を参照。『大外記中原師廉記』天正三年卯月二八日条、同年七月一四日条、同年七月二一日条、同年九月九日条、同年九月一五日条、同年十一月五日条など。
- (45) 『鹿苑日録』慶長四年五月二一日条（続群書類従完成会）。
- (46) 高木久史「16世紀第4四半期四国の銭使用秩序に関するノート」（『安田女子大学紀要』三九号、二〇一一年）。
- (47) 東京大学史料編纂所所蔵 北野光乗坊文書、請求記号・貴四〇―一―二六。
- (48) 『北野社家日記』慶長三年二月二八日条（続群書類従完成会）。
- (49) 米相場の性格を考慮すると比較できないが、文禄期の銭米相場を『多聞院日記』からみると、銭一貫文Ⅱ米一石六斗（文禄二年十一月）だったとされる。京都大学近世物価史研究会編『一五―一七世紀における

る物価変動の研究』（読史会、一九六二年）を参照。ここからも慶長期が文禄期に比べて、米高銭安の傾向にあったことがわかるだろう。

(50) 前掲註(2) 盛本論文。

(51) 東京大学史料編纂所蔵 北野光乗坊文書、請求記号・貴四〇―一―四二。

(52) 「元和元年年行事帳」（北野天満宮史料刊行会編『北野天満宮史料 宮仕記録』北野天満宮、一九八一年）。

(53) 清水克行『大飢饉、室町社会を襲う！』（吉川弘文館、二〇〇八年）。

(54) 【表1】の宮仕職補任料について、価格表示と支払い手段に着目してみると、それぞれ時期によって変化していることに気づく。曼殊院への補任料は菊夜叉丸（長享二年）から能堯子（永禄五年）まで銭建て価格であったのに対して、松十丸（元和五年）以降は、米建て価格の銀支払いになっている。ただし、正確には銭建て価格から米建て価格に換算したうえでの銀支払いと考えられる。宮仕衆中による入公（宮仕新入）の価格表示方法と支払い方法の変更を考慮すると、この変化は入公（宮仕新入）の価格表示方法と支払い方法の変更と同時に与えられるべきだろう。

付論 私札と木綿売買

はじめに

河内国若江郡今井村（八尾市南本町）庄屋文書である「小川家文書」に天和四年（一六八四）二月二六日付「御領分八尾今井村札遣申覚」がある。これは、今井村庄屋庄右衛門と又左衛門が幕府代官小堀仁右衛門の役人である高田三郎右衛門・香川弥右衛門に宛てて出した覚である。この史料から、今井村の庄屋が発行した私札の「札遣い」や木綿売買についてわかる。ここで注目したのは、私札を使用する目的が木綿売買であったことである。では、なぜ木綿売買に銀や銭貨ではなく、私札が使用されたのだろうか。ここではこの問題関心から、私札と木綿売買についてみていきたい。

第一節 私札の構造

近世前期、畿内や伊勢国の各地において私札が流通していた。一般に、伊勢国山田地域で流通していた「山田羽書」が私札の起源とされる。伊勢国では山田地域のほかに射和・松坂・丹生地域などで私札が流通していた。また、畿内では大和下市銀札や木地屋銀札などの私札が確認され、河内国八尾・久宝寺地域では八尾御堂札・久宝寺御堂札と呼ばれる私札があったとされる⁽¹⁾。しかし、近世前期に畿内や伊勢国で私札が流通していたことは確認されるものの、その私札がどのように使用されていたのかという点については、必ずしも明らかにされていない。

そこでここでは、天和四年（一六八四）二月二六日付「御領分八尾今井村札遣申覚」の検討を通じて、私札の

構造を明らかにすることとする。

御領分八尾今井村札遣申覚

庄屋

一、銀三貫目之札

庄右衛門出シ申候、

一、銀壹貫目之札

又左衛門出シ申候、

右之札者銀貳歩より壹匁迄之札ニ而御座候、札仲間成法寺・別宮村・今井村三ヶ村ニ而一ヶ月代りニ札場究置、札持参仕候者ニ銀子相渡し札ニかへ申候御事

一、右之札を以村々ニ而もめん買申候ニ百姓ハ銀之よしあしも不存、其上秤目かるきおもきと申僉議も無御座候故、勝手ニ罷成候ニ付而、商人も百姓も望申事ニ御座候、

一、札主方より札仲間へ銀壹貫目ニ上田四反余ツ、質物ニ入置申候、札主勝手ハ銀壹貫目之札を出し申候へハ、銀子五百目ハ不断、手前ニ置、札持参仕候へハ、早速銀子ニかへ遣し申候、残五百目ハ当分手前ニ銀子無御座候而もつかい申候故、五百目之銀「子」^(墨線)ハ利分札主勝手ニ而御座候、

一、右之札銀壹貫目ニ紙代彼是ニ銀六拾目程之造作入申候、是も札主より仕候、札かへ申候儀ハ銀「子」^(墨線)百目分之札持参仕候へハ銀子も百目相渡し申候、

右之通少も相違無御座候、札仕初候ハ拾五年已前鈴木三郎九郎様御代官之時分御断も不申上遣申候、其已後御代官五味藤九郎様・御代官小堀仁右衛門様より今年迄何も申分も無御座候、八尾近在之村々・久宝寺・平野其外もめん仕候村々へハ右之札遣申候、已上、

天和四甲子年二月廿六日

庄右衛門

又左衛門

右の史料は、は天和四年（一六八四）二月二六日付「御領分八尾今井村札遣申覚」で、庄屋庄右衛門と又左衛

門の「覚」である。各条をみると、まず、第一条・第二条には、私札の発行数と札主が記されている。札には銀二分から一匁の札があり、札仲間の成法寺・別宮村・今井村にて一ヶ月代わりに札場をとりきめて、札を持参した者に銀子を渡して札にかえるとしている。

第三条には、私札使用とその理由が記されている。それによれば、札の使用は村々にて木綿を買うときで、百姓は銀の良し悪しが判断できず、そのうえ秤目の軽き重きといった詮議もないので、勝手になり、商人も百姓も望んでいるとある。

第四条には、札主と札仲間について記している。札主方から札仲間へ銀一貫目につき上田四反余りづつ質物に入れる。札主の勝手は銀一貫目の札を発行した場合は銀子五〇〇目は手前に置き、札を持参した者に対して、すぐに銀子とかえる。残り銀五〇〇目は、当分手前に銀子がなくても使用できるので、五〇〇目の銀子の利分は札主の勝手である。

第五条には、札発行の費用と札と銀の交換について記している。札は銀一貫目に紙代などもろろ六〇匁程の費用で、これは札主の負担である。札の交換については銀一〇〇目分の札を持参したならば、銀子も一〇〇目を渡すこととしている。

そして各条のあとに、私札発行の始まりを記している。札を始めたのは一五年前の鈴木三郎九郎が代官の時で、断りを言わずに使用した。それ以後、代官五味藤九郎・代官小堀仁右衛門から今年迄何も申し分もなかった。八尾近在の村々・久宝寺・平野其の外木綿を仕る村々へ札を遣わしている。

ここから私札の構造について整理すると、つぎのようになるだろう。

まず、私札が使用し始めたのは、「御領分八尾今井村札遣申覚」によれば、天和三年の一五年前の鈴木三郎九郎の代官時代、つまり、寛文一〇年（一六七〇）ごろとされる。また、私札は当初から代官に報告せずに使用し、それ以後も代官に報告せずに使用していることから、私札は代官といった権力に関係なく使用していたといえる

だろう。

つぎに、私札の発行・使用・回収の過程をみてみる。

私札の発行は、庄屋庄右衛門と又左衛門が札主となり、庄右衛門が銀三貫目文分の札を、又左衛門が銀一貫目分の札を発行した。私札の額面は銀二分から一匁までの銀札で、私札を発行する諸費用は札主が負担し、札銀一貫目を発行するのに銀六〇目ほど、つまり、私札の制作費は額面の六パーセントほどであった。発行された私札は、札場において銀と交換された。私札と銀との交換場所である札場は札仲間によって定められた。札場は成法寺・別宮村・今井村の三ヶ村を一ヶ月ごとに交代している。札主は私札発行額の半分にあたる銀を札場に置き、私札と銀が交換された。なお、札主が故障した場合は、質入された土地が売却され、その代金で補填されたと考えられる。

発行された私札を銀と交換して入手したのは商人であった。ここでの商人は、八尾寺内町・久宝寺寺内町・平野郷町などに居住する在方商人と考えられる。私札を手に入れた商人は、その私札で百姓から木綿を購入していた。なぜ木綿売買に私札が使用されたのかという点については、後述したい。

私札を手に入れた百姓は銀を使用しないため、私札を札場に持参し銀に兌換することなく、日常品や綿栽培による年貢の米の購入などに使用していたと考えられる。私札の使用範囲は八尾寺内町・久宝寺寺内町・平野郷町のほか、木綿を織る村々であった。私札は限定された地域で流通していたといえるだろう。

このように私札は限定された地域の中で流通したが、地域外での取引などで銀を必要とする場合は、私札を札場に持参し、銀と交換されたと推測される。私札と銀との交換は、銀子一〇〇目分の札を持参した場合、銀子一〇〇目と交換である。

札場で回収された私札は、札仲間から札主に返されていたと考えられる。札場は、先述したように、成法寺・別宮村・今井村の三ヶ村を一ヶ月ごとに交代している。札場が定められた三ヶ村（成法寺・別宮村・今井村）は、

長八尾と呼ばれる街道に面した一本街村からなった⁽²⁾。成法寺・別宮村・今井村の三ヶ村の詳細についてはわからないものの、札場に定められていることから、地域の中で大きな役割を果たしていたと考えてよいだろう。以上、私札の発行から回収までの一連の流れである。

なお、私札は使用される中でしみや破れが生じることが推測でき、新たな私札との交換や銀との兌換により、数年でその使用を終えていたと考えられる。

第二節 私札の使用と木綿売買

さて、それではなぜ木綿売買に私札が使用されたのであろうか。

木綿を織るためには綿の栽培が前提となる。河内国八尾・久宝寺地域でいつごろから綿が栽培されたかは定かではないが、近世前期には栽培されていただろう。栽培された綿から織った木綿は百姓から商人へ売買されたと考えられる。また、寛永一五年（一六三八）ごろに作られた『毛吹草』によれば、河内の名産として「久宝寺木綿」と記される。さらに、元禄期に貝原益軒が著した『南遊紀行』によれば、「山根木綿とて、京都の人、是を良しとす。」とあり、山根木綿が京都で評判になっていることが記され、河内国八尾・久宝寺地域の綿の栽培・木綿生産が広く知れ渡っていたことがうかがえる。したがって、木綿売買を通じて商人と百姓との間で取引が頻繁に行われるようになったと考えられる。

木綿は高価なものであったため、農村で木綿売買が行われることにより、百姓は多額な貨幣のやりとりをする存在となった。そのため、銭の使用では、銭を大量に用意する必要があり、かなりの重量となるので、不便であったと推測される。

一般に「東の金遣い、西の銀遣い」といわれるように、畿内では秤量貨幣である銀を使用していた。銀の使用は一五八〇年代～一五九〇年代に本格的に普及していったとされる。そして、慶長期からは丁銀・豆板銀が铸造

された。丁銀は、なまこ形の銀錠で、重さは三〇匁〜五〇匁ぐらい、大きさは一定していなかった。豆板銀は円形なものが多いが、重さ・大きさは様々であった。丁銀・豆板銀の品位は定められていたが、その使用は本物か偽物かという見極めや品位の判断が必要であった。また、銀の重さが一定していなかったため、丁銀・豆板銀の使用は量目を確認する必要があった。したがって、丁銀・豆板銀といった銀を使用する時はそのたびに秤を利用して重さをはかっていたと考えられる。

しかし、百姓は銀の品位の判断ができず、重さをはからなかった。そのため、銀では商人と百姓との間の取引がうまくいかなかったと考えられる。そこで、商人と百姓は私札を貨幣として使用することを合意し、私札を使用することで商人と百姓との間の取引すなわち木綿売買を円滑にすることができたのである。したがって、私札の使用は商人と百姓との間の木綿売買から始まったと考えてよいだろう。

註

- (1) 朝尾直弘「木地屋銀札について」(『日本史研究』第七二号、一九六四年)
- (2) 小谷利明「久宝寺・八尾地域における都市形成」(『ヒストリア』第一八六号、二〇〇三年)

終章 本研究の総括

本研究は、第一章で提示した研究視角をもとに、第二章から第六章にわたって中世後期日本の貨幣使用の特質を述べてきた。最後に各章で明らかになった内容を整理し、今後の課題を示しておきたい。

第二章では、撰銭という行為そのものと悪銭を受け取った場合の対処について分析した。中世日本において中国銅銭を中心とした銭（一文銭）を貨幣として使用していた。中世後期日本において銭（一文銭）を区別する行為、撰銭がおこった。この行為が確認できるのは、一五世紀前半からであり、当該期では撰銭を職掌とする者の存在も確認できる。撰銭の手順は、受取人と支払人が立ち会いの上で、両者の「問答」による合意で成立していた。その結果、銭貨は受容されるものとされないものに分別され、一旦決まった結果は覆されることなく、両者ともそれに従っていた。つまり、撰銭は精銭と悪銭を範疇分けする行為であり、精銭と悪銭は支払人と受取人の合意によって成立するものである。受取人と支払人によって、悪銭の判断はゆれ動くものであり、グレーゾーンが存在していた。

第一章で示したように、先行研究における撰銭の理解には大きく二つある。ひとつは、中世後期における商品経済の発展によって、貨幣が不足し、悪銭が登場するという理解である。もうひとつは、一四六〇年代の中国における銭体系の崩壊が日本の銭体系にも波及し、一四八五年の大内氏の撰銭令を發布につながったという理解である。

第二章で明らかにしたように、悪銭の登場は量的な問題でなかった。それは、商品経済の発展による貨幣需要の増加と貨幣供給の不足による悪銭（排除される銭）の発生という理解では説明できないこと示している。また、撰銭という行為は一五世紀前半ごろから確認できる。しかがって、本研究の考察によって、先行研究における撰

錢の理解では説明できないといえるだろう。

悪錢を受け取った場合の対処の仕方は二通りあった。一つは悪錢を替える行為（「悪錢替」）で、もう一つは悪錢を売買する行為（「悪錢売買」）であった。「悪錢替」の仕組みは、受取人が支払人に悪錢を返却もしくは受け取りを拒否し、精錢との取り替えを要求し、後日支払人より精錢が届くものである。「悪錢売買」の仕組みは、受取人が支払人に悪錢を返却するのではなく、第三者に悪錢を売却して精錢を獲得するものである。悪錢を購入する第三者は「商人」であり、「商人」は悪錢を通貨として商品の買い付けなどに使用していた。

悪錢使用の場面の存在は、流通界から排除されたという理解では説明できないことを示している。悪錢は「悪錢」という通貨として、精錢とは異なる流通の場を持っていた。すなわち、悪錢と精錢は異種の貨幣として異なる商品流通を媒介するものである。異なる流通の場とは、種類を異にする商品に対応するものか、商人の集団・組織に対応するものかは今のところ明らかにできないが、黒田明伸の言葉を借りるならば、それは支払共同体での違いによるものである。異なる支払共同体が接触するところで、悪錢と精錢は交換される。そして、交換されるさいに、精錢と悪錢に比価が立つ。その比価は精錢一対悪錢二や精錢一対悪錢三という簡単な正数比をとっている。それは、錢貨の素材価値によって決まるものではないこと、市場の動向によって変化する相場ではないことを意味する。精錢と悪錢との比価は、市場とは関係のない交換のためのルールであったと理解すべきである。

第三章では、中世後期日本においては、錢貨に封を付けるという行為を解明した。錢貨に封を付ける行為とは、錢貨そのものに封を付けることで具体的には、錢貨に花押を据える行為である。錢貨に封を付けると、その旨を記した書状と送進状が添えられる。その書状には花押が必ず据えて、錢貨と状は一対の関係となる。錢貨の受取人は錢貨と書状に据えられた花押を照合した上で受領していた。錢貨に封を付けた状態を同一種類の貨幣として認識して受領していたと理解できる。

錢貨に封を付けることは隔地間の年貢錢運送のさいに現地の年貢収納・送進担当者がおこなうという特徴を有していた。「悪錢替」の原則にしたがうと、当該期における隔地間の年貢錢運送は、運送先で撰錢した「悪錢」は現地（運送元）の支払人に返却され、代替の錢貨を送り返してもらう状況になる。そのため、「悪錢」という荷の負担を強いるという問題があった。支払人との距離に関係なく、撰錢された悪錢は支払人に返却されるという「悪錢替」の仕組みがそうした問題を生んだのである。錢貨に封を付けることが、こうした問題を未然にふせぐための一つの方法であった。

史料上、撰錢行為と錢貨に封を付ける行為には、連続性が確認できる。それは、撰錢した段階を固定化すること、その状態を維持することを意味している。撰錢は撰錢した者（受取人と支払人）での合意形成であるため、第三者の手に渡った場合には再び撰錢しなければならなかった。錢貨に封を付ける行為はそうした問題を解決する要素を持っていた。ただし、封を付けた錢貨が保証されるのは、花押が認識できる限定的な範囲であり、花押が錢貨受領のさいの証明となっていた。

錢貨は撰錢という行為によって精錢と悪錢に区別されるようになり、錢貨に封を付けることによってその現状が固定化されるようになる。つまり、錢貨に封を付ける行為がみられる背景には、その錢貨の区別化を必要とする社会があったのである。

第四章では、緡錢の慣行を解明した。錢（一文錢）は円形方孔の形状をしているため、錢貨の中央の孔に紐を通して使用することがある。その状態を緡錢という。緡錢慣行は、二つの表現が確認できる。ひとつは、異なる錢種をある一定の比率で混用する緡錢で、いまひとつは百枚未滿の錢を百文として使用する短陌である。

短陌は中世後期日本において「九十七文錢」や「九十六文錢」、「七十二文錢」など様々な値をとっていたことが確認できる。これは短陌が錢を数える手間賃や緡繩の代価という意味では理解できないことを示唆している。一緡のなかに異なる錢種を含み、しかも精錢と悪錢のように異種錢貨の間に比価が立つ場合、短陌の

値は「九十七文銭」をとることはできない一方、「九十六文銭」や「七十二文銭」の値はとることができる。九六・七二・四八・二四以外の数字は精銭と悪銭の簡単な正数比をとることができない。つまり、「九十六文銭」や「七十二文銭」が存在しうる背後には、異種銭貨の間に比価が存在していたのである。

第五章では、中世日本における短陌の計算方法について検討した。短陌の計算方法は、位取り方式と比例定数方式の二方式が存在する。位取り方式は、短陌の値を位取りとして用いる計算方式である。実枚数は、緡銭と短陌値をかけた上で、バラ銭を足してあらわせる。実枚数と価格との関係を見ると、価格は一〇〇から短陌値を引いた数を緡銭数を掛けた上で、実枚数を足すと表示される。一方、比例定数方式は短陌の値を比例定数として用いる計算方式である。実枚数は、位取り方式と同じように、緡銭と短陌値をかけた上で、バラ銭を足してあらわせる。（但しバラ銭数は短陌値未満となる）。価格は実枚数を短陌値で割った上で、百を掛けることで表現できる。中世日本（少なくとも銭貨使用の場合）では、位取り方式のみ用いており、比例定数方式を用いた事例は存在しない。日本において比例定数方式を用いるようになるのは、銭から銀、銀から銭に交換するときである。短陌を前提とするとき、銭と銀の価格体系は同じではない。そのため、銀の価格を表示するには、短陌の計算方式を位取り方式から比例定数方式で変換する必要があった。それは、貨幣としての性格（計数と秤量）、貨幣計算単位の違いによるものであった。銭と銀の貨幣使用には、位取り方式と比例定数方式は必要不可欠な要素であった。つまり、比例定数方式の登場が、銭単独の世界から、銭と銀がリンクした世界へと転換したことを意味しているのである。

二種類の短陌計算は、日本では時間的な差であるのに対して、中国では同時併存であることは史料上からいえる。このことから、貨幣慣行の違いは商品経済に直接対応するとは論理的にはいえない。社会構造・商品経済の段階の違いなどの条件に加えて、貨幣慣行の違いが説明できる。無媒介に商品経済と結びつけるのが近代主義そ

のものなのである。

第六章では、銀の浸透と貨幣使用の変容を、北野社における諸職補任料を事例として検討してきた。北野社の諸職に補任されるときは、補任料・得分などといった形で、諸職に応じて一定額を支払う必要があった。それらは精銭納（撰銭したうえでの授受）を原則としており、金・銀が社会に浸透した天正期以降も継続していた。諸職補任料が精銭納であることは、銀や米を貨幣として使用するさいにも影響を及ぼした。すなわち、貨幣使用のさいには銭だけでなく、銀や米においても「精」と「悪」に区別しているのである。一五九〇年代ごろに銀が社会に浸透すると、銀・銭・米の間に相場が立つようになった。また、それとは別に銭一貫文Ⅱ米一石Ⅱ銀一〇匁で結びつけた固定相場が存在し、市場と連動する世上の相場が併存状況にあった。固定相場は一五九〇年代の銭銀相場と近い値であったが、慶長期ごろに銀高銭安の傾向となり、固定相場と変動相場が大きく乖離してしまった。そのため、諸職補任料の支払い方法をめぐる問題が起こったのである。

こうした問題を解決するために、宮仕衆中は価格表示方法と支払い手段について規定するようになる。つまり、宮仕衆中の中で価格表示方法と支払い手段をめぐる合意形成をおこなったのである。銀が社会に浸透し、貨幣使用の現場では、相場の影響を直接的に受けるため、価格表示方法と支払い方法の問題を抱えるようになる。そうした問題を自律的に合意を形成する動きは、当該期の貨幣使用の特質である。

以上が本論文において明らかにした成果である。では、今後の課題を示しておきたい。

まず、本研究では貨幣使用に議論を絞ったため、貨幣と権力との関係、貨幣と商品流通の問題といった側面については言及できていない。しかし本研究の成果によって、貨幣の問題とかかる側面を明確に区別でき、この問題についての確にアプローチできるようになったと考えている。

また、本研究では、銭と銀との関係については考察することができたが、金・銀・銭の「三貨」使用の展開までは論じることができなかった。第五章で明らかにしたように、短陌を前提とする社会では、位取り方式と比例

定数方式の存在が貨幣使用実現において必要不可欠の条件であった。金・銀・銭の「三貨」がいかにして使用されていたのか。「三貨」使用のメカニズムの解明が必要な作業であろう。

さらに、銭に注目してみると、寛永一三年（一六三六）、寛永通宝が鑄造されると、行使する銭が中国銅銭から寛永通宝に変化する。この変化は歴史的にどのような位置づけなのか。当該社会の貨幣使用の動向を踏まえながら考察する必要がある。こうした問題については、別の機会に論じることとしたい。

初出一覧

序章 新稿

第一章 新稿

第二章 「撰銭」の仕組み（原題「中世後期における「撰銭」の実態―「悪銭替」と「悪銭売買」―」『古文書研究』六九号、二〇一〇年六月）。

第三章 銭貨に封を付けること（原題「銭貨に封を付けること―中世後期における銭貨使用の一側面―」『出土銭貨』三一号、二〇一二年五月）。

第四章 緡銭慣行（原題「中世日本の緡銭慣行」第一章『鷹陵史学』三八号、二〇一二年九月）。

第五章 計算方法（原題「中世日本の緡銭慣行」第二章『鷹陵史学』三八号、二〇一二年九月）。

第六章 新稿

付論 私札と木綿売買（原題「近世前期の私札と木綿売買」（財）八尾市文化財調査研究会編『河内木綿―歴史と資料―』二〇〇七年一〇月）。

終章 新稿